
うちのただおくん

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うちのただおくん

【コード】

N8239Q

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

よこしまほらや他のGSものを書く前に書いた「逆行モノ」です。お楽しみいただければ幸いです。

本編横島忠夫の苦悩は、平行世界の横島忠夫にも伝わっていた。それも大きく時間を隔てた幼い忠夫に。直接伝わる苦悩と記憶、これが「横島忠夫」を「YOKOSHIMA」へと進化させる！！まさにジョグレス新化！！

第一話（前書き）

新年度記念投稿！！

よこしまほらや他のGSものを書く前に書いた「逆行モノ」です。
お楽しみいただければ幸いです。

第一話

夢を見た。

自分が高校生で、親と別れて暮らしていた。

夢を見た。

綺麗な上司と命がけのアルバイトをしていた。

夢を見た。

恐ろしくて怖くて、逃げ場のない仕事場で笑っていた。

夢を見た。

絶望と渴望の狭間で、それでも歯を食いしばっていた。

「あああああああああああああああ！！！！！」

息子がまた悪夢をみているようだった。

幼い頃から何かしらの夢を見ているようだったが、東京に引っ越してきてからは毎晩のように悪夢をみているようだった。

起きると何も覚えていないようだったが、さすがに近所迷惑と言うこともあり病院に相談したところ、逆行催眠という確認をしても
らえることになった。

が、夢の内容は一切判明せず、絶叫とテンカン症状に陥るとい

結果しか残らなかった。

毎日の絶叫と精神疲労でやつれてゆく息子を、私は抱きしめてやることしかできなかった。

なぜか抱きしめている間だけは声を殺して叫ぶのを我慢しているように思える。

だから、小学生も高学年だというのに息子は母を抱きしめて寝ることになってしまっている。

とはいえ、この年になっても母を求めてもらえるのは、少しだけうれしい気がする。

夫の仕事が順調なおかげか、東京本社への転勤となって一年が経つ。

最近になって悪夢に叫ばなくなった息子だが、全身の体液を絞り出すほど泣いている。

声を上げず、すすりあげず、それでも涙を流し続けていた。

毎朝冷やしタオルをしないと腫れぼったい目で登校しなければならぬほどに。

一時期は児童虐待すら疑われるほどだったが、ここ数日急に変わった。

泣かず叫ばず、それでいて鼾もかかず。

寝たままの姿で起きる、そんな状態だった。

自主的に早朝起きるようになった息子は、ランニングを始めた。

朝夕、かならず2時間ほど。

天候に関わらず、些事に関わらず。

なぜか一振りの塩を持ち歩くようになった息子に理由を聞くと、苦笑い笑顔で必要だから、と答える。

急激に成長したかのような息子の姿に驚いたが、最近まで母親に抱きしめられなければ普通に眠れなかった息子の姿が急に大きくなつたかのようで心強かった。

そんな息子が日曜の朝に頭を下げた。

どうしても行きたいところがあるけれど、一人で行くには遠すぎる。

だから付いてきてほしい、と。

「なんだ、ガールフレンドでも連れてデートか？」

私は夫の無神経な台詞を拳で遮り、息子の肩に手をおいた。

「……どうしても行かんといけないんやね？」

「うん、かーちゃん。」

すこしオチャラけたところのある息子が、一遍の迷いもなく私を見つめ返した。

そういえば、若い頃の夫もこんな瞳をしていたと思う。

「忠夫、父さんも行った方がいいのか？」

「……父ちゃんもかあちゃんも、一緒にきてほしい」

息子と同じ、まじめな瞳で夫はうなずいた。

ある子供から直接の依頼があった。

それはたぶん、小学生高学年ぐらいの子供だろう。

意志を強く感じるその少年の声は、様々な内容であったが、突如自分が霊視能力を持つていることを自覚してしまい、それでも正気を保ち続けるための心構えや行動指針に関するものだった。

突如見えるようになってしまい戸惑い、毎夜悪夢にうなされるようになったこと、そのせいで母親や父親に迷惑をつけていること、簡単な身の守り型を覚えたのは良いけど、身に覚えのない情景に悩まされ寝ている間泣いていること。そして、清め塩でランニング中の霊を払っていたところ、成仏する雑霊から私を紹介されたこと。

私は彼の話の正面から受け止め、全力でフォローすることに決めた。

だから、彼の置かれた状況をご両親に話すべきだと勧める。

しばらく彼も悩んでいたが、私の教会までつれてゆくので説明をお願いしたい、と言ってくれた。

そして私は彼の両親に対面した。

私の名前は唐巢。

破門を受けてもなお神の教えをもって人々を救うことをやめぬ神父と呼ばれる男だ。

衝撃だった。

幼い頃からの叫びは、霊症によるものだったのだから。

忠夫を悩ませた全ては、年齢に見合わぬ能力を持ったがゆえに霊たちに弄ばれたからだという。

それを知り、いいや、なぜそれに気づかなかったのかを私は自分

で自分を責めた。

幼い心と体でどれだけの責め苦を受けていたかを思うと知らずに拳が揺れた。

そんな私の拳を、妻は優しく包み込み・・・さらに握り込む・・・
いたい、いたいよ、妻よ。

「・・・では、忠夫はこのまま・・・。」

「いいえ、忠夫君のお母さん。彼はかなりの力を付けています。ちゃんと教育を受ければ直ぐのでも一線にでれるほどに」

「一線？」

「はい、ゴーストスイーパーと呼ばれる職業の一線です」

瞬間、妻は爆発した。

人様の子供を、年端も行かない子供を、そんなやくざな仕事に就かせたいものか、と。

しかし、忠夫の能力がそこまで言うのなら、道はそれしかないだろう。

「・・・なんでや、なんでうちの忠夫だけそんなことせんならんのや!! 毎日毎日苦しんで、毎日毎日苦しんで、そんなんで、なんでやあ!!」

なるほど、忠夫が私を連れてきた理由がわかった。

切れた妻を押さえる役、そうなんだな？

思いの外聡い息子に辟易とさせられながら、妻の押さえに回った。

両親及び唐巢神父の面通しが終了した。

神父にアポを取っておいたので話は進むし、親父も十二分に役目を果たしてくれた。

お袋も最終的には納得してくれて、唐巢神父に頭を下げた。

「息子を、忠夫をよろしくお願いいたします」

「お任せください。最低でも息子さんが自衛できるようにするよう
にお守りします。」

「先生、やっぱり報酬もらってくださいい〜!」

「しかしだねえ、忠夫君。みんなお金にこまっついていてえ・・・。」

「だったら、そろそろ水道を止められそうな教会うち以上に困っていた
依頼人が何人いたか教えてくださいってば!!!」

「・・・あははははは」

同居し始めて三ヶ月で唐巢神父のためさ加減がしれた。

何しろ人が良すぎるせいで、報酬を受け取れないのだ。

もちろん必要経費という形では受け取ることもあるけど、それで

も、やすすぎて足がでる。

ゴーストスイーパーというからには一仕事数千万という単位だったはずなのに、いつのまにやら業界最安値。

やすすぎてGS協会からも文句がきいているため、いたしかたなく交渉前後に自分が報酬交渉しているぐらいだ。

交渉結果をどうにかGS協会に納得させ、その上で教会としての収入を分離して……。

「その……だねえ、小学生に経理管理をさせてしまうのはさすがに良心が痛むのだがねえ……。」

「だったら、ちゃんと青色申告できるように資料を集めてください
!!!」

全く何というか、神父は抜けまくりなのだ。

お金も「髪」も。

「……忠夫君、いま、不穏なことを考えなかったかい？」

「……家庭菜園の設営を決意したところです」

じつとにらみ合う僕ら。

まあ、いつものことですよ、はい。

唐巢神父の住み込み弟子になって、半年が経とうとしていた。

近所の奥さんたちから「神父の体調はあなたにかかってるわ。」とか言われるほど家事を引き受けてるんだけど、修行の方もしている。

この半年で、寝ている間も安眠できるぐらいの結界を張れるようになったし、霊波を出せるようにもなった。

で、出せるようになって言われたのは、

「今後も霊能に関わるならば一気に伸ばそう」

というもので、連休の度に泊まりがけの除霊に同行させてもらっている。

本日の除霊は事業に失敗した男性が一家心中を図ろうとしたものの妻は浮気で家に近寄らず、娘も元部下と駆け落ちという状況で世を儚んで自殺。

それを清々したとばかりに妻と娘が金に換えようとしたものだからぶっちぎれ。

旦那は悪霊になって別荘地域全体を呪いました、というものであった。

本来なら神父が受けるような内容ではなかったんだけど、GS協会からのごり押しで決まったようなものだった。

色々と無理を言ってきたので、こちらも契約上の無理を利かせたけれど、怯まず規約してくるのは度胸が良いのかバカなのか。

とはいえ、神父の実力から考えれば成功間違いなし、ということこそを見取った遺族コンビが、なんと契約金のダンピングを始めたのだ。

安くしろから半額にしろにつながり、最後には無料にしろとか言い出した頃には僕も切れていた。

おまえ等が強欲かますたびに、向こうさんはパワーアップしてるんだけどねえ！！

「忠夫君！！」

「はい、先生！！」

僕は致し方なく、懐から契約書を引つ張りだした。
そして契約の精霊に対して契約履行を宣言する。

「古の契約の精霊よ！　かわされし契約に基づき、契約をくつがえ
さんとする愚か者どもから取り立てよ、報酬はその内容の2割なり」

「心得た、契約者よ。」

GS協会と契約している精霊が現れた瞬間、親族は土下座をした
が契約違反は決定している。

すでに何度も契約違反をしていることに業をいやした協会は、そ
の懲罰もかねてこの契約執行をするように言ってきたのだ。

面倒ごとをおしつける協会には腹を立てたけれど、これもそれも
「貸し」の一部だし、気にするまでもない。

そのうち利子も込めて取り立ててやるよ、内心ほほえむ。

契約の精霊の力により、かの親族は破産した。

その事実を知ると、旦那の幽霊は心安らかそうに成仏した。

これを持って契約完了とか書面を送ってきた協会に五通ほどの「
事実確認書類」を送付したところ、あれよあれよというまに唐巢神
父が協会の役員に昇格した。

口止め人事と体制への取り込みらしい。

よけいなところで頭が回る爺どもだなあ、と笑う。

いやいや、あざ笑う。

今回の「事実確認書類」を唐巢神父が送ったと本気で思ってるん
だろうか？

書いてある事実から透けて見える背後関係、そんな迂遠な脅迫を

唐巢神父がすると？

やっぱり、自分の後ろ暗さを感じると相手も同じと考えるあたりが分かりやすいというかなんとというか。

そんなわけで、協会役員となった唐巢神父が内部洗浄という仕事をしている間は暇だろうなあーと思っていました。

初仕事、それが暗殺だった。

聞けばGSの仕事にかこつけて、依頼人を破産させたという極悪GSの弟子だそうで、この弟子の暗殺が成功すれば師匠も暗殺してほしいというものだった。

破産した奴らがどうして暗殺なんて手段がとれるのかわからなかったけど、初仕事は初仕事だ。

相手が極悪っていうなら、殺すのだって躊躇しない。

・・・躊躇、しない。

三日ほど観察していたが、資産家の資産を横取りしたとは思えない質素な生活をしていた。

どうやら師匠は外出中らしく、弟子だけで生活し、そして修行も一人でやっている。

・・・やっているっぽい。

というか、あれは修行なのかわからない。

毎日の瞑想はわかる。

走り込みもわかる。

ただ、まるでマンガの主人公のようなポーズとか、カンフーアク

シヨンスターのようなポーズとかわからないし。
それでいて、有効な打撃つばいやつにつなげているのもわからない。
い。

本当に、何をやってるんだらう？

観察五日目にして督促がきた。

仕方ない。

正直に言えば暗殺を忘れて観察してたし。

この楽しかった観察もおしまいだ。

一方通行のお楽しみも、もう終わり。

そろそろお前を殺さなくちゃいけない。

お前のことを忘れないよ。

横島忠夫。

私の心の一番深いところで覚えておいてやるからね。

このエミが、小笠原エミが。

日々感じていた熱視線を感じなくなった。

うーん、子供補正のモテ期はおしまいかぁ・・・。

これからは寂しいブサメン時代に突入なのかぁ、と絶望的な気持ちになる。

以前みていた悪夢が、実は自分の未来の姿だと気づいたのは最近だった。

細々とした記憶の違いはあるけれど、繰り返し見ている夢は高校二年の頃の夢だろうと思う。

未来の僕は、過去の僕に思いが伝わるほどの後悔をしている、そ

れが恐ろしかった。

でも、未来の僕にとってそれは過ぎ去った過去かもしれないけれど、僕にとつては未だ来ない時の果て、未来なのだ。

そこまでの後悔ならば覆してみせる、と心に誓う。

そんな意味で見れば、神父の元にこれたのはよかったと思う。

未来の僕が霊能に目覚めたのは高校になってからだけど、それからみれば無限の時間があるともいえる。

この時間を積み重ねて、絶対後悔しない、後悔させない！

・・・あれ、なんか「いわかん」がある、な！！

何でこんなことになったのかしら？

横島忠夫を苦しめないように殺そうと、使い魔を解放した。

母方から受け継がれた魔族を、反則すれすれの方法で縛り付けて使役しているせいか、色々と制約がある。

だけど、ここ一番では力になるので、それなりに使えてきていたつもりだった。

だが、今日は違った。

解放された使い魔は、魔族は、その力のすべてを取り戻した。魔族としての力すべてを。

「かーっかつかつか。やっと小娘の命を喰えるってわけだあ。」

魔族は自慢たらたらに語る。

自分の知らないところで契約が書き換えられていたこと。
その契約のせいで、わたしの命が魔族に捧げられていたこと。
さらに、この仕事自体に何の正義もなく、実行すれば私は投獄されること……

私は裏切られたのだ。

野良犬のような私に与えられた、「小笠原」という名前をしゃぶらされ、そして切り捨てられたのだ。

その時いつを知った瞬間、奇妙な思いを感じていた。
悔しかったし、殺したいほど恨んでいたはずなのに。
それなのに。

奇妙に気持ち軽かった。

サバサバとした気持ちだった。

『さあ、小娘、その命を……くうっ!』

魔族、ベイリアルルの胸に光の板が突き刺さっていた。
いや、それは光の剣だろう。

その剣は、胸から、腹から、喉から、額から。

いくつもの光の剣がベイリアルルから生えでてきていた。

『ぐ……ぐががががが!!!!!!』

耳を塞ががんばりかきの絶叫をあげたベイリアルルは、そのまま真っ白になって消えた。

光の剣もそこから消えていて、残ったのは呪具と私だけだった。

なにが起こったのか、何が起きたのか、全く理解できなくて私は暫くへたりこんでいた。

太陽の角度がずいぶん変わった頃、私の肩をたたく手があった。無防備に振り向けば、そこには横島忠夫。

「ねーちゃん、だいじょうぶだった？」

彼曰く、遠目で怪しい霊が私を襲おうとしていることに気づいたので、霊波刀を叩き込んだそうだ。

ただ、遠目だったので、どこからどうやって私のところまで来れるか分からなくて、今までかかってしまったそうだ。

何というお人好し。

思わず苦笑い、立った。

いや、笑えなかった。

泣いた、泣いた、盛大に泣かされてしまった。

今の状況、私の生い立ち、それどころか横島忠夫の暗殺まで依頼されたことまで話させられてしまった。

さぞや怒っているだろうと思ったが、その顔は真っ赤になっていてそっぽを向いていた。

いや、耳まで赤くなっているのをみれば、分かる。

私に抱きしめられていることを照れているのだ。

なんてかわいい。

いやいやいや。

その後の横島忠夫がすごかった。

私を教会まで引つ張り込んでご飯を食べさせつつ電話対応。

どこに電話したのかと思いきや、十分もしないうちに二人の中年

男性が登場。

「ほほー、さすが我が息子！ いい線いつてるじゃないかあー!!」
「せやる、せやる!? ねえちゃん、絶対美人になる!!」
「そうだな、うんうん。わかった。だったら俺が何とかしてやろう
!」

何を何とかするのかと思いきや、もう一人の男性が私に向き直った。

「初めまして小笠原エミさん。私は横島支社長の部下、クロサキと
もうします。」

無表情に頭を下げたクロサキさんは、私に三つの選択肢をくれた。

一つは、小笠原の本家への復讐の援助と乗っ取りの援助。

一つは、小笠原本家を完全に断絶させ、構成に血筋一つ残させない
ようにすること。

最後の一つは、小笠原本家と私が完全に縁を切り、私が穏やかに
暮らせるようにしてくれるというものだった。

「なんで、何でオタクらそんなことをしてくれるノ」

その答えが痛快だった。

「美人美少女を助けるのに理由はいらない、それが横島の男の本懐
だって父ちゃんがいつてたんや!!」

「そうだ、すばらしいことだぞ忠夫!!」

がっちりスクラムを組む親子をみて、全身から力が抜ける思いだ
った。

横島のお父さんがしてくれたことは、全部だった。
いや、ほとんど全部だった。

小笠原の家が運営している会社が一月ほどで四散し、本家の家も
人手に渡った。

秘蔵されていた呪具の大半が市場に流れ、本家の大半の術士が司
法に追われているという。

復讐と乗っ取り。

さらには私を、小笠原エミを「横島」エミにしてくれた。

横島の名前が大きいわけでもないしお金持ちなわけでもない。

しかし、横島のお父さんもお母さんも優しく強く厳しく愛おしか
った。

そして私をこっち側に引き込んでくれた、最愛の義弟、忠夫。

バカでお調子者で、それでいて幼い頃からの霊症の影響で強すぎ
る霊力を持て余す少年。

「エミねえ!!」

ツメエリ姿の忠夫は、私の周りをくるくる回る。

「にあうにあう、すっげーにあう!!」

私の制服姿を始めてみたという忠夫は、うれしそうに騒いでいた。

今年の春から忠夫は中学生、私は高校生になった。

横島のお母さんの知り合いがやっているという学校に入学できる
ということに入ることにしたんだけど、その学校が驚きの学校だっ
た。

「六導女学院」

お嬢様学校で有名な上、

「霊能科」

があるというとびつきりな女子校だった。

霊力試験なんかもあるので、入学には厳しい審査があるはずなのに、私のところには「入〜学〜きよかします〜」という学院長許可印がつかれた書類がきただけだった。

思わず横島のお母さんに視線を向けると、

「あら、だってあなた、もともぐりのプロでしょ？ 職歴書いたら一発OKだったわよ？」

おかーさー！ーん！！！！（涙）

まあ、そのへんは冗談だったらしいんだけど、実際のところ、すでに六道はその辺をつかんでいたらしい。

まあ、個人的にはそんな事情はどうこうよりも、弟の賛美の方が気になるわけで。

「忠夫も格好いいヨ？」

「・・・エミねえ、痛々しい嘘はやめてくれ」

すごい勢いで涙を流す弟、忠夫だったけど、なんでここまで自虐的なのかが分からない。

少なくとも、弟の親友「銀チャン」だの東京の友達から聞いた話としては、何人もの女子にアプローチされてるはずなのに、すべて弟

には「冗談」だと思えるそうだ。

自分は絶対に女にもてないキャラクターだと「盲信」していて、しすぎていてどうにもならないらしい。

第一話（後書き）

さて、いろんな逆行SSで扱われていますが、エミさんは「横島」スタートです。

これって結構イイカンジなので、流用させてもらいましたw

第二話

「ありや、完全に女に対する自信つつもんが消滅してんな」というのが、現在アイドルの卵の「銀ちゃん」の言葉だった。私も同感だったけど、今に至るまでその認識を覆すことに成功していない。

本当にもつたいない話だと思う。

とはいえ、自分の弟が「色悪」になるわけではないと思うと、それはそれで良いかもしれないと思うのは、ずいぶんと歪んだ話かもしれない。

神父に相談した。

最近、制御がうまくいかないことが多すぎることについて。今までできた制御ができなくて、思わずため息が漏れる。集中力とかが足りないのかともおもうけど、そればかりではない気もする。

何かなにやら分らない、そんな状態だったので、最後の最後に神父へ相談した。

するとすでに答えを分かっていたかのように神父は答えてくれた。

「忠夫君。それは君の霊力が向上したせいだ。」と。

いままで原付に乗っている気分で操作していても、スポーツカーのエンジンが乗っていれば、自ずと乗れるわけがない、と。

「えーっと、シャーシも原付っすか？」

「そうだな、シャーシも何とかしなければならぬだろう」

「エンジン積み替えてできませんか？」

「忠夫君。自分の顔が嫌いになったとして、誰かのと積み替えることは可能かい？」

色々と問答をしてたけど、どうやら神父はすでに結論ももっているようだったので直接聞いてみた。

「・・・妙神山にいきたまえ」

えー、やってきました原始林」。

神父の紹介だということから、VIP待遇で行けるのかと思いきや紹介状をくれただけだった。

もう一枚の封筒は、中身が関係ないものだったけど、僕に大きな力を与える栄養剤だったので、心から感謝だった。

ただ、来れに加えて地図の一つでも付けてくれるとうれしかったんだけど、仕方ないかもしれない。

なにしろ音に聞こえた「霊山」だもの。

仕方ない仕方ないといいつつも、二日も森を歩くと気弱になってくる。

だから、真上から聞こえた声も気弱な自分が聞いた幻聴だと思っ

ていた。

「おいおい、坊主。無視はなかるう」

見上げてみればそこに人・・・？

というか、ひと、なのかな？

修験者風のふくそうに赤ら顔、長い鼻・・・

「あ、天狗様？」

「ふむ、やっと気づいたか」

聞けば、初日から僕は同じところをぐるぐる回っていたとか。何とも恥ずかしい。

「で、小僧。ワシに何用じゃ？」

「いえ、別に」

「・・・？」

さらに聞くと、この天狗様、勝負に勝つと様々な薬をくれるそう
だ。

「というわけで、小僧。勝負じゃ？」

「えーっと、薬ほしくないので勝負しません」

「まてまてまて、このワシは長年の研究と開発の成果で、殆どの病
気を駆逐しておるぞ？」

「・・・。」

「勝負せぬか？」

「・・・。」

気まずい沈黙の中、天狗様はちよつと話を逸らした。

「それはそうと、小僧。お主がちよこちよこみておったそれはなんじゃ？」

ふはははは、聞きましたね？ 聞いちゃいましたね？
いやさ聞かせましょう！！！！

「この写真こそ最愛の姉であり、正真正銘美女の卵、エミ姉さんの制服写真だあ！！！！」

どうだおどろいたかあ！！！！

「あー、つまり、そのお、小僧。シスコンを直したい、と」
「ちがうわあー！！！！！！！！」

シスコンだと、なめるな天狗様、いやさ天狗！！

美人で可愛くて甘えん坊な姉が、某有名女子校の制服を着てはにかんだ笑顔で写真に写ってるんぞ？ ちよつと頬を赤らめて！！

みればエネルギー沸くだろ、元気になるだろ、アクセル吹けるだろ、元気になれるだろうがあ！！！！

「あー、その、すまん。ちよつとだけ分かったかもしれん」

「謝ってほしいわけでもエミ姉さんに惚れてほしいわけでもないわい！！！！」

気づけば天狗は両手を会わせていた。

「うん、わかった、すまなかった」

まけまけ、と頷いて、天狗は一つの小瓶を僕に渡す。

何これ？

天狗に教わった方向に歩みを進める。

一応、そのまますすぐ進めば妙神山へ続くらしいけど、その道は結構険しいらしい。

だから万能治療薬を持ってゆけ、と。

そこまでして貰う謂われはないと言っただけど、エミねえの写真の拝観料だと言われたので貰うことにした。

「ほれんなよ？」

「わかった、わかった。」

そんな道行き、正面から人の気配。

頭の前から足先まで武士って感じの人だった。

・・・いや、人っぽい感じの武士。

「・・・つかぬことを聞くが、ソナタ、天狗か？」

いえいえいえいえ、単なる人間の中学生です。

「・・・そうか・・・」

深いため息をついたけど、再び僕をみた。

「そなた、天狗をみなんだか？」

きけば自分の娘が熱病にかかったので天狗に勝負を挑んで薬を得るつもりとか。

「……だったらこれを使ってください。」

気つぶのよすぎる少年だった。

私の勝手な事情に感じいつてか、万能治療薬なるものを渡してしまっただから。

それも天狗から譲られた霊薬を。

あまりの驚きに目を剥いたが、少年は言う。

「美女美少女は世界の宝。それを救うのに何の理由もいらないうって親父なら言いますから。」

にこやかな笑みでその場を去った少年の名は横島忠夫。

この恩は生涯忘れまいと思う。

幼すぎる訪問者は、過去最低年齢じゃないだろうか。

付き添いでもなく同伴者でもなく、紹介状だけを片手にこの妙神山にたどり着いた彼は、13に満たない少年だった。

送り出したのは、過去修行経験のある唐巢氏。

確かに筋がよい人でしたが、そんな彼が送り出すとは思えない少

年でした。

が、それは思い違いだったと鬼門の試しで分かりました。その集中力、その集約力、そして圧縮力。

人の霊波を物質レベルまで圧縮し変形させ、そして伸縮させるその技は、すでに完成レベルなのではないかとすらおもわされましたが、彼の悩みは斜め上に行っていました。

霊力が少々して制御しきれないから、修行して制度を高めたい、と言っただから。

よろしいでしょう、私の全力を持って、あなたを鍛えてあげましょう……!!……!!……!!

六道女子に入学して一月がたった頃、忠夫が山から帰ってきた。

「エミねえ、ただいまー!!!」

六道女子の校門に。

終業寸前のこの時間に、何を思っただかあらわれた忠夫は、私のいる教室に向かって大手を振っている。

いつまでも手を振ってるものだから、思わず降り返すと、忠夫挟もうれしそうに微笑んだ。

それを見た周囲が、わっと盛り上がる。

「ねね、エミさん。彼、弟?」「なになに、結構可愛いじゃない。」「もしかしてお姉ちゃん大好き?」「やった、ブラコン?」

軽薄な笑いの中、一人の女だけは違った。

「・・・あれが、横島忠夫、なのね？」

「そうよ、あなたの兄弟子で、妙神山歸りの、ね。」

ニヤリと笑うその女の名は「美神令子」。

神父の元に修行にきているいけ好かない女だ。

しかしその霊力は同年代の平均を大きく引き離しているせいか、むちゃくちゃ慢心している。

だから神父は毎日のように慢心を諫めてるけど、逆効果に終わっている。

ま、そりゃそうだろう。

中学一年の小僧が、自分より数段上の実力で、伝説の修行場である妙神山にいつていると聞かされては、ライバル心も燃え上がると言うものだ。

とはいえ、私的に見れば、そんな心を燃やすぐらいならその分瞑想しろと思うけど、この女には無駄だろう。

「ね、ねえ、エミさん。その、もしかして、弟さんって、あの『妙神山』に行ってきたの？」

私が頷くと、周囲が爆発した。

それを見ていたあの女は、心底不快そうだった。

ママの師匠、唐巢神父は確かに優秀だった。

世界で数人しか居ないSランクスイーパーである事実は変わらな
いし、今までの業績も偉業も認めるところだ。

だけど、だけど、絶対に認められないことがある。

「なんでこいつは現場に連れて行って、私はだめなんですかあ!!」
いや、分かっている。

「才能を認められただけの私と、すでに大きな結果を示している「あの」小僧とじゃあ全く通じるものが見つがることを。」

あの日、校門にたつ幽霊、何度も何度除霊しても消えることのない名物幽霊を抱きしめて除霊したのを見れば。

そのことを周囲の生徒にほめられて、真っ赤になって逃げ出したその背中を見れば。

あのととき発揮した霊能を見れば。

「あなた、霊具の一つも扱えないで、何言ってるワケ?」

ムカつくこいつは、「あの」小僧の姉、横島エミ。

呪いが中心の霊能のため現場に立ち会うことは少ないが、すでにGS資格相当のお墨付きを唐巢神父より得ている。

ママも彼女を認めているし、私自身も才能を認めざる得ないと思っっている。

でも、心根が許さない。

何しろ「横島」エミだから!!

「バカ言わないで! 自分の身ぐらい自分で守れるわよ!!」

手にした神通棍に霊気を通すと、光と共に力を表す。

「美神君、そのまま前後に振りたまえ」

くっ、さすが神父、見え見えだった。

私が前後に神通棍をふるると、その光はぶれて消えた。

「・・・その裏技を使つてでもと言う根性は認めよう。しかし、仕事現場でごまかしは利かないんだ。一流の力を持った上での裏技なら私も認めるが、今の内からそれでは認めることはできんよ。」

くそ、と神通棍を床にたたきつけると、簡単に砕けた。

それは私が作ったイミテーションだから。

「では、留守番と瞑想を。」

そう言いながら神父は仕事に出かけた。

「あの」小僧、横島忠夫と共に。

「・・・ちくしょう・・・いつか泣き目に遭わせてやるんだから
!..!」

霊能関係なんて言えば、多かれ少なかれ血統主義だ。

才能は確かに遺伝するし、霊能は伝授されるから。

だから「横島」なんていう、新興も新興な名前だと、言められること言められること。

先ずはクラスメイトから色々と言われ、さらに隣のクラスからも色々と言われ、最後にあの「美神令子」の親派に色々色々。

もちろん、あの女自身が望んでいるわけではないだろうけど、あの女の視線のせいか、私に敵対していると汲み取って嫌がらせをしてきていた。

そう、してきていた、なのだ。

そんな関係が劇的に変わったのはあの日、忠夫が学校まで会いに来たとき。

妙神山から直接やってきたらしく、ぼろぼろな格好で、それでも笑顔でコチラに手を振っていた。

なんとというか、恥ずかしくも、うれしかった。

そんなシスコン全快節の弟が、ふと、校門の自縛霊に気づいて抱きしめた。

多かれ少なかれ、学校全員が霊能者だなんていうウチの学校の生徒には全員見えていたらしく、抱きしめられた霊が微笑みながら昇天する様までが一部始終目撃されてしまった。

さらには私の口が滑り、妙神山帰りであることや、唐巢神父に認められていることまで知られたせいで、今までとは逆の居心地の悪さを味わうことになってしまった。

「横島さん、お話聞かせてもらえませんか？」

「横島さん、呪術にお詳しいってほんと？」

「横島さん、修行のことで相談に乗っていただけませんか？」

「こんなあたりまでならいい。

ふつうの会話と切り捨てよう。

が、

「横島さん、あなたの弟さんって付き合っている女性って居るのかしら？」

「横島さん、あなたの弟さんって、いつもどこで修行なさってるの？」

「横島さん、あなた、ウチのソサエティーにはいませんこと？」

真っ向から全部断ったけど……！

血統主義から見れば、あれだけの才能を見せられては捨てることはできない。

純血主義で交配してきたサラブレッドだったとしても、あの才能は惜しいに違いない。

つまり、ウチの弟は、鼻息荒い飢えた女子高生の標的にされつつあるというわけだ。

・・・おもしろいから全員紹介してやろうか？

・・・いや、何だかおもしろくない。

そんなモヤモヤした思いを抱えつつ、家に帰ると、なぜか家の前に六輪ロールスロイス。

で、車体エンブレムは・・・

「六道・・・？」

いやな予感と共に家に飛び込む私だった。

時は数日さかのぼる。

神父との仕事帰りのこと。

グダグダと報酬を受け取りたくなさそうな神父をけたおして報酬交渉をして、全額中三割を孤児院へ募金することで同意さして入金まだ確認するという誠に中学生らしくない仕事に疲れた思いをしていた僕だったが、優しい心まで忘れたわけではない。

帰りに神父用の養毛剤は買ったし、厄珍堂で練習用の御札も買ったし・・・。

そんなことを思っている中で、ふと視線の先の陰に気づいた。それは、誰もいない公園で、ベンチに座る女子高生。沈んだ瞳も気になるけど、彼女の着ている制服も気になった。それは「六女」、エミねえと同じ学校の制服だったから。

「おねえさん、何か悲しいの？」

いっしゅん、びくつとした彼女は、僕を見て顔をゆがめる。

「おねえさん、泣きそうだったら泣いて言いと思っよ？」

僕の一言に彼女は首を横に振った。

「・・・わたしは、ないちゃあ、だめなの」

なんで？ と聞く。

「・・・わたしがあ、なくとあ、ミンナが暴れちゃってえ、みんながこわがってえ、おかあさまに、おこられるのあ」

こわいのよ、と震える彼女。

そんな姿を見て、何だかすごく申し訳ない気分になった。だから、僕は彼女を抱きしめた。

「・・・！」

びくりとふるえる彼女を、できるだけ力を入れないように抱きしめて、僕はささやく。

「・・・ゆっくり、ゆっくり泣けばいいと思いますよ？」

その言葉を聞いて、彼女は僕をぎゅっと抱きしめた。
そして、声もなく、力なく、ゆっくりとゆっくりと泣き
始めた。

「……ふ、ふえええええ……」

彼女の陰から現れた、異形の者たちも、なんがかゆっくりと動い
て、そして彼女に身を寄せた。

僕はそれたちこそが「みんな」だと気づいた。

「ほら、お姉さん。『みんな』も一緒に泣いています。」

ぐちゃぐちゃの涙の彼女が周囲を見ると、『みんな』が彼女にす
り寄っていた。

悲しみを共にするように。

「……みんな、みんな、暴れないの？」

彼女が小首を傾げると、『みんな』も小首を傾げた。

「……あのね、きみが、やさしいから、へいきだつてえ」

真っ赤になつた瞳で微笑む彼女と向きなおつた僕は自己紹介を初
めてした。

「横島忠夫です。」

「六道冥子です」

「六道？」「横島？」

聞けば、エミねえのクラスメイトだとか。

「じゃあ、エミちゃんの弟さんだったのねえ」

ニコニコと微笑む彼女の頬を拭くと、うれしそうに「ありがとう」と言う。

足下の犬っぽい物の怪、式神がすり寄ってきたりする。

「この子たちが、他人に、なつくなんてえ、珍しいのよ」

ぞろぞろと十二体も現れた式神は、みんな僕にすり寄ってきた。

「うれしいわあ。みんな忠夫君がスキみたい」

なんだか大型の犬にすり寄られているみたいで、僕も嬉しかった。

「じゃあ、みんなも僕も友達だね。」

瞬間、十二体の式神たちが僕に襲いかかる。

いや、たぶん、じゃれついてきたんだと思う。

そう思いたい。

「すてきだわ、冥子、初めてお友達ができちゃったあ」

六道本家は大荒れにあってた。

本家の跡取り娘である「冥子」が、宗主の叱責を苦にして失踪したのだから。

まあ、実際のところ、お説教が嫌で逃げ出したただけだが。

ともあれ、頭の中が如何に御花畑であろうとも、六道家の力の象徴である十二神将を伴つての逃亡だ。

その力が万全に發揮されれば都市部の破壊所では済まない。

さらに言えば、その力が暴走すれば、現状のどのGSであろうとも対抗手段を持たず、霊力が失われるその瞬間まで破滅が続くこと請け合いなのだ。

「冥子は、まだ、見つからないのかしら。」

見た目と語調には感じられないが、六道の宗主、冥子の母は失神寸前なレベルで錯乱していた。

あと、あと数分報告がなければ、彼女もまた暴走していた、そんな瞬間にその声が響く。

「おかーさま、ただいま。」

十二の式神をつれた冥子が、にこやかな、付き物がとれたかのような表情で現れたのだ。

表面上は笑っていても、いつも何処か思い詰めたかのような思いを表情に張り付けていた冥子が、まさに天真爛漫に笑っているのを見て、六道夫人は思考を切り替えた。

叱責、追求は後だ。

今は、冥子自身の心の内を探らねば、と。

この靈感が確かなら、厳しい舵取りを続けさせられている六道本家としての道筋が見える筈、と。

息子、忠夫の客として現れたのは、かの有名な六道家の宗主と娘だった。

聞けば、娘であるところの「冥子嬢」を息子が救ったという。

それは事故や暴漢などからではなく、心を救ったというのだ。

間延びした口調には「相変わらず」「頭痛もするが、自慢の息子がよそ様の子供を救ったと聞けば胸を張る思いだった。

・・・六道との関わりでなければ。

「びつくりしたわ、娘を助けてくれた男の子が、百合子ちゃんのお息子さんだったなんて」

「びつくりしたわ、忠夫君のお母様が、お母様のお友達だったなんて」

親子そっくりの語調に陥落寸前の精神だったが、何とか持ち直す。

「あなたの方は結構大変みたいね。冥那」

女子校時代の同級生は、ホエホエとした表情の中で暗い陰をにじませる。

この違いがわかるのは、過去の付き合いのせいだろう。

「でも、忠夫君が、霊症だったなんて、始めてきたわ」

言葉の外で「何で教えてくれなかったのか」との怒りが見え隠れしている。

しかし、当時は今以上に立場が危うかった冥那に何かができなかった解らなかつたし、夫の情報では、その一つの行動でも彼女の立場を危うくしつことは間違いないだろう。

それゆえに、私はGS協会を頼らざる得なかった。

「はじめんさい。冥那。」

今のこと昔にこと、色々とはなしている所で私は切り込んだ。

「で、冥那。今日は、お礼に来たってだけじゃないんでしょ？」
「さすがね〜百合子ちゃん〜。」

二〇目の奥で光を放つ。

「じつはね〜。忠夫ちゃんを〜、冥子の〜、お友達のほしいの〜」

私はその場で倒れた。

ソファーに座ったままで。

気付けば居間の入り口でエミも転けていた。

横島の家にはロールスロイスが居るといつ時点で異次元的な話なんだけど、客として六道夫人と娘の冥子が居る時点で失神しかけた。なにしろ、六道冥子といえば、六道筆頭本家の愛娘であり、その霊力は通常の霊能者の数十倍、十二体の伝承式神を操る天才にして、ちよつとの外敵にも暴走する「ぶつつん」で有名だったから。

その威力は都市を全壊させるほどと言われている、誰もが近づかないことを心に誓っていた。

あの「美神令子」ですら「さわらぬ冥子に祟りなし」と言っているとか。

で、その「祟り」が何で実家の居間にいるかな！

第三話

話を聞いているうちに、横島のお母さんと六道夫人が旧知の間であつたり、忠夫が幼い頃の霊症の過負荷で霊能に目覚めたことすら聞けたのはよかつたが、六道夫人の一言に転けた。

「忠夫ちゃんを、冥子の、お友達に、ちようだい」

場所が移された先は唐巢神父の教会。

忠夫が現在住み込みで修業している先であつた。

家の居間で行われた話と同様の流れで、冥那は「ちようだい」を「きてほしいの」に言い換えた。

瞬間、息子はうなだれた。

深いため息と共に冥那に視線をあわせると、きつぱりと言いつ切つた。

「六道夫人。あなたがすべてを買い与える限り、冥子ねえちゃんは何もえられませんよ」と。

よし、よく言つた、我が息子!!!

「冥子ねえちゃんや『みんな』とは、もう友達です。でも、友達つてのは、そういう報酬や契約に縛られるものじゃないっす」

いいおとこ「息子」は、そついいながら冥那の娘をみた。

「……じゃあ、何もいらなの？ 何もないのに、娘のお友達

なの？」

「貰えるものはもらってます。」

「・・・それは〜な〜に〜？」

「友情と、信頼です」

瞬間、真っ赤になった冥子ちゃんの陰から、大量の何かが飛び出して息子にとびかかった。

叫び声をあげそうになった私を、エミがとどめる。

「おかあさん、よく見るワケ」

みれば、犬っぼいものや毛玉っぼいものやら、様々な変なものが息子にすり寄っていた。

息子もくすぐったそうな、それで居て嬉しそうな顔をしている。

私は、こんな息子をもてて、心底嬉しかった。

人の心を救える、そんな大それたことを素直な心で行える息子になっけてくれて、本当に嬉しかった。

気付けば冥那が珍しく表情を固めて硬直している。

「どう？　うちの自慢の息子よ」

「・・・冗談抜きで、忠夫ちゃん〜くれない〜？」

「その辺は、忠夫のハートを射止める努力次第じゃない？」

「・・・ウチの子には〜ハンデイがほしいわ〜」

「まあ、昔なじみだし、娘さんじゃなくて本家闘争の方なら助っ人出すわよ？」

ニヤリと笑う私に答える冥那。

あのころを思い出す表情だった。

本日は仕事もないので、みんな瞑想の実習だった。すでに術の確立しているエミねえは、その術の深層へ潜るため。未だ目覚めの浅い令子さんは、霊具を通してその術への結びつきを深めるため。

そして僕は、未来の僕が発現した術を再現するため。

未来の僕は、本当に死ぬような修行を通していくつかの術を得た。霊気を物質レベルまで圧縮した「サイキックソーサー」

その霊気を手に纏わせた「栄光の手」「霊波刀」

そして霊気の圧縮を常に行い頂点レベルまで高めた「文殊」

少なくとも、この三つに辿りつくためには、かなりの修行と荒行を必要としている。

命を落とすほどであったとしても、それは振り返りたくない。

あの慟哭を、あの苦悩を思い出せば耐えることができる。

雑念を捨てて心を研ぎすますうちに、手元に何かが生まれたのを感じた。

いま、生まれたそれは柔らかく、不安定なもの。

さらにこれを圧縮する必要がある。

そう、小さく、小さく、小さく、小さく。

苦悩の表情だった忠夫の手から金色の何かがこぼれた。

瞬間的にそれを拾った令子だったが、金目のものじゃないと判断してか、忠夫の手の中に戻した。

その仕草に気付いた忠夫がお礼を言うと、令子は真っ赤になってその場を去った。

誰にでも優しい、それで居て嫌みのない忠夫は各方面で人気だった。

教会に来る子供たちや老人たち、ご近所や商店街の人たち。

そして敵意むき出しだった美神令子にも。

天然記念物級にあまのじゃくなあの女は、絶対に素直な反応をしないけど、気になって仕方ないはずだ。

なにしろ、最近噂の「モンスターティマー」だから。

六道夫人電撃訪問以降、六道冥子は私のことを「忠夫君のおねえちゃん」として非常に慕っており、今じゃカップル扱いすらされている。

校内の勢力図も一気に塗りかえられ、私&冥子が独立最強勢力で、それ以外がその他、みたいな感じになってしまった。

そのためか、一年の霊能対抗試合でもぶつちぎりとなってしまう、通常三人一チームなのに私と冥子以外は五人体制になってしまった。とはいえ、冥子の式神の多彩さと、ガード不能な私の霊体直接攻撃の前では敵はなく、すでに不動の一位の位置を確保していた。

むろん慢心はしていないが、ぶつつんしない冥子は最強のカードだし、私自身もアマとはいえない修羅場をくぐっている立場で言えば学生同士の練習に負けるつもりはない。

それでも負けるかもしれないのが人通しの戦いなんだろうけど。

「で、忠夫。それ、何なワケ？」

そう聞いた私に忠夫は苦笑。

つまり万人に聞かせられない話だというわけだ。

私は時間と場所を変えて質問し直した。

忠夫君とエミ君からの相談ということで、ずいぶんとよる遅くに時間をとることにした。

聞けば忠夫君が新しい霊能を得たらしいのだが、詳しくはなしたがらないと言うのだ。

せめて神父の前だけで、という彼に聞いてみて、その霊能に恐怖を覚えた。

それは「文殊」だった。

「……先生、それはなんです……か？」

私の驚愕に恐怖を覚えたエミ君は、声をすぼめていた。

実際の所、忠夫君が説明を渋ったわけも私にだけなら話すと言ったわけも完全に理解した。

しかし、この場をごまかしても良い結果にならないと判断し、正面から話す決意をする。

「これはね、エミ君。文殊という霊能だ。」

言葉をキーワードとし、あらゆる現状を実現するという万能の霊能。

たとえば傷や怪我を「治」療するためにつけば、瞬間的に治るし、火事や火災を「消」す目的で使えば、完全に消すことができる。

自然現象であれ霊能現象であれ、その一文字を当てはめられることが出来れば、あらゆる現象を起こすことが出来る。

「……忠夫が説明したくないわけが解ったワケ。」

そう、この文殊、あまりの万能性のせいで業界でも伝説になるほどで、唯一これを実現している能力者は太宰府の菅原道真公のみ。

かの神の文殊が一度市場に流れた時など正に戦争級の争奪戦が発生し、神会からの介入があったほどであった。

ゆえに、人間界に文殊の能力者が居るともなれば、三界入り乱れた騒動が起こることは必至であった。

少なくとも、多重結界が張られたこの部屋でなければ話せない、
そういう内容だった。

そんな話を聞いた忠夫君は、先ほどよりも真っ青になっている。
実はそこまで酷い状況だと思っていなかったというのだ。
では何をおそれていたのか？

「行き詰まった令子さんの霊具替わりに使われてはたまらなかった」
そうだ。

聞いてるかね、令子君。

君の兄弟子は結構、厳しいぞ？

いくら結界をしたって、電波盗聴を妨害してなけりや意味がない
のに、と思いつつ盗聴していて正解だったと確信した。

あの金色の玉をみて、金目のものじゃないのは解ったけど、靈感
に何か引つかかると思っていたのだ。

だから教会の書庫で調べていたんだけど、その答えと盗聴機の音
が同時にきた。

あれの名前は「文殊」。

無限の可能性と驚愕の多機能性を秘めた神聖の霊具。

裏の市場価格で10億ドルとも20億ドルとも言われる極レアア
イテムであった。

何であんな凄いものを金目のものと思わなかったのか、その理由
はすぐにしれた。

あれを奪い合うために4〜5の国と国土が消えたというのだから。
やばいやばいやばい、あれは絶対にヤバイものだったのだ。

いや、かんじたわよ、凄い何かを。

でもあれは未来に関わる怨念だったに違いない。
思わず冷や汗の私の耳に、忠夫の声が聞こえた。

「行き詰まった令子さんの霊具替わりに使われてはたまらなかった」

「あたしだって、ヤバイものぐらい解るわよ!!!」

その叫びが聞こえてか、壁の向こうで爆笑が聞こえた。

冥那が突然うちに現れた。

聞けば、忠夫を自分の学校に転入させないか、という。

「あなたの学校、女子校でしょ？」

「少子〜高齢化〜対策なのよ」

はつきり言えば忠夫を抱き込みたいんだろう事は間違いないんだ
けど、少子高齢化対策と聞くと別の角度が見える。

「学生結婚推奨ってのは、ちよつと先をみすぎじゃないの？」

「さ〜すが〜、百合子ちゃん。」

つまり、有名所の派閥や自分の門下の男子も取り込んでしまおう
という事だろう。

六道の宗主なんてものをやっていると、こすつからくなるのねえ。

「そ〜れ〜で〜ね〜、百合子ちゃん。おねがいがあるの〜」

ぽふつと手を合わせた冥那の目の前に書類が現れる。
ちよつと驚きつつ手にとって肩を落とした。

「……息子や旦那だけじゃなくて、私もとりこみたい、と?」

「百合子ちゃんか、専業主婦だけしてるのって、日本経済にとつて不利だと思っの?」

「私は結構気に入ってるんだけど?」

とはいえおもしろそうだと言うことには変わらない。

女子校を共学に、周辺状況を制圧しつつ経済界をひっくり返す。
常識を梃子にオカルト色の常識を、か。

「ま、息子も息子だし、協力しても良いわよ?」

「さっすが百合子ちゃん」

「でも、息子の説得は自分でなさいよ?」

「……いじわるっ」

さすがに事が大きいので、いや、大きいとみんなで判断したので、妙神山に相談に行くことにした。

今度はちゃんと地図を持たされたので、まっすぐ山までこれたんだけど、前回通った道が道ではなかったことに気づき驚いた。

あれに比べれば、地図通りの道のたやすい事よ。

そんな鼻歌の背後では、息を切らせる二人の気配。

「た、忠夫、ちよ、ちよ、ちよつと、まつ、ワケ……」

「忠夫……休憩……キュウ」

エミねえと令子さんが、今回同行を申し入れた。

少なくとも令子さんには早いと思っんだけど、行き来だけでも良

い訓練になるからと同行を許された。

登り初めて三度目の休憩だったけど、すでに二人の水筒は空。
ウエイト用に背負ってきた僕の背荷物から出したニアウヲオータ
ーを飲んでいる。

「・・・た・・・忠夫は、なんで、そんなに、元気な、ワケ？」

「ええつと、集中すると解ると思うけど、この辺って凄く集中した
竜脈があるんで、そこから靈気を使って常にヒーリングを・・・」

「やり方教え（なさい）（るワケ）！！」

即席講座の後、一時間ほどで二人とも元氣を取り戻した。

「こんな術があるなら、とっととおしえなさいよね！！」

「同感なワケ！！」

プリプリ怒っていますが、二人ともちょっとだけ考えてほしいの
です。

いくら竜脈から靈気を引っ張ってきても、それを制御するには靈
力が必要なわけで。

つまり・・・

「「「「「（ぐたーーーー）「「「「」

靈力が切れると、心身ともにつかれるのです。

まあ、先生の目指す修行には成ったと思うので、二人をざっくに
乗せて先を急いだ。

門の前まで来ると、鬼たちが迎えてくれた。

「おお、忠夫。またきたのか。」

「忠夫、もしかして貴様修行好きか？」

「マゾめ」

「人聞き悪いこと言うなよ!!!」

今回は修行ではなく相談に来たというと、修行場の管理人である小竜姫様を呼んでくれた。

「まあ、忠夫君。また来てくれたという事は、とうとう妙神山の内弟子に……」

「ちがいますっつえば、相談です、相談!!」

「あら、残念」

にこやかに微笑む小竜姫様。

この人はお堅い性格のくせに、僕をからかうときだけ生き生きしてる気がする。

「それで、背負っている方々は？」

「えっと、唐巢神父の所の同門で、経験として行き来してこいということで……」

「ここまでできることが出来なければ意味がないんじゃないですか？」

「いや、たぶん、僕が変なことを教えなければ大丈夫だったんですが……」

「もしかして、竜脈を？」

「……はい」

まったくもお、と腕を組んだ小竜姫様は、僕を軽くたたく。

「見合う内容を見合う人だけに開示なさい。」

「ふぁーい。」

気が抜けた返事は、小竜姫様が僕の頬を両方に引っ張ってるから。

霊力の使いすぎで気絶なんて恥ずかしい話だったけど、新しい術を何も考えずに使った結果だと考えれば受け入れるしかない。

あの術はたぶん、忠夫が妙神山で修行した末に身につけた技なのだろう。

未熟な自分にはすぎた技なのだと解っただけでも収穫だ。

「あら、お気づきになりました？」

視線の先にいるのは美しい女性だった。

まだ若い、私よりも2〜3歳程度しか上でないだろうに、何らかの気配が沸き立っていた。

ああ、たぶん、神族にちがいない。

私は起き上がり頭を下げた。

「畏まらなくてもいいんですよ？ 忠夫君の同門なら弟子たる資格を得ることが出来ます。いわば弟子候補生ですから」

にこやかに微笑む彼女の名前は小竜姫様。

この妙神山の管理人だという。

「あの、忠夫、は……。」

「今、この修行場の責任者と会議をしています」

そうか……。

なら、こっちは……。

「まだまだ時間はかかると思いますので……。」

すつときらめく瞳の小竜姫様。

「修行でもなさいますか、美神令子さん？」

!!

ゲーム好きの老師への相談と言うことで、最新のゲームを六道のおばさんの伝で持ち込んだところ、小躍りして喜んでくれた。

「忠夫、一晩中やりこむぞ……！」

うきー！！と叫ぶ猿神老師と対戦中のこと。

「で、出来ちゃったのか、文殊」

おりゃ、鉄山！！

「ぬ、きたないぞ、忠夫……！ 猛虎硬……！！」

ぬ、でえーい、通常技コンボ。

「よめてるわい……！」

ぐあ……で、出来ました。

「ふむ、そうか……」

一度ゲームをポーズしたので、手元に一個だしてみると、猿神老師が目をむく。

こういう玩具あったよねー。

「ばかもの！ ふつうに圧縮しておれば300マイト程度じゃ。その程度でよいといったであろう！」

現在の三界の単位として靈力を「マイト」という単位で表している。

通常の間人が10マイト程度。

靈能者が70〜80マイト。

唐巢先生が100マイト前後だという。

つまり、文殊の圧縮は、唐巢先生の生命維持能力も含めた全能力の三倍程度が目安というわけだ。

「何マイトぐらいあるとおもいます？」

「……四桁弱じゃな」

「……げ。」

「おまえの体はこの単位で覚えてしまっておるんじゃない？ これ以下には作れまい」

しまった、と頭を抱えて後ろに倒れ込んだ。

前回妙神山に来たときに、すでに老師から示唆されてはいた。僕の靈能の特性と行き着く先である文殊のことを。

ただ、注入するマイルトが高ければ高いほど威力が大きく成りすぎるので気をつけるようにいわれていたのだ。

老師が目標とした300マイルトというのも人間でみればらぼうで、正に万能といっても良いほどだそうだ。

ただ世に知れた菅原道真公の文殊に比べれば遙かに劣る力なので、注目度は下がり「人間文殊」として新しい低い価値が付くはずだったのだという。

が、出来た文殊は千を下回るものの目標の三倍以上。対人間相手においてほぼ無敵ともいえる威力だった。

先日、実験用に依頼を受けた広域除霊は、文殊一つ「浄」でお釣りが来てしまい、以来範囲の三倍の範囲が浄化されてしまった。

これ自体は唐巢神父功績として協会に報告できたのだけど、逆に唐巢神父の力が強すぎるのに依頼料が低すぎるという事で再び文句が噴出した。

いついかたなく、他のGSが受けられないような安い依頼を集中的に受けることにより協会と他業者との軋轢を緩和せざる得なかったんだけど、神父は神父で御満悦だった。

なにしろ、神父感覚で適正な価格の仕事であり、市鷲とのためになる仕事だったから。

まあ、それはさておき。

「で、何個同期制御できるんじゃない？」

「三つです。四つ目で大暴走ですね」

「そうか……」

思わず猿神老師も寝ころんだ。

「……一個ずつならはれないように使えるじゃろうが、同期制御をしたら、一発ではれるじゃろうなあ……」

「文殊なんか市場にないんじゃないですか？」

「ばかもの、天界と魔界に、じゃ」

「……うわぁ……」

そういえば、文殊の争奪は三界でしたっけ？

「まあなんじゃ、天界にはもっぱれてるじゃろうな。」

「そんな情報網が？」

「いや、天界ののぞき屋が、おまえさんにご執心でな。」

『のぞき屋はひどいのねー！！！』

絶叫と共に現れたのは、愛嬌のある丸目の女性。

タイトなボディースーツを着ているので、みるところに困る。

『ジロジロ見られるのは嬉しくないけど、忠夫君なら見てもいいのねー』

につこり微笑むその笑顔に引き込まれかけたところで、彼女が微笑んだ。

『私の名前はヒヤクメ。忠夫君の調査にきたのね』

修行場から忠夫が類人猿と共にでてきた。

何者か、と思っただけど声がでなかった。

隔絶レベルに霊格が違っていることを感じたから。

あんな凄いの隣で、なんで忠夫は平気なんだか。

「おう、お嬢ちゃんたちの修行はどうじゃ、小竜姫」

「はい、老師。二人とも良い資質ですので、先は明るいですね」

「ほっほっほ、唐菓はよい弟子に恵まれておるな」

そういいながら、類人猿は忠夫の頭をなでている。

「ご紹介します。こちらは僕の義理の姉、横島エミ。そしてこちらは同門の美神令子。・・・エミねえ令子さん、こちらにおわす方は、この修行場の責任者、斉天大聖老師です。」

「ぶーーーーー!!!!!!」

思わず吹いた私と令子。

そりゃ霊格凄いに決まってるじゃない!!

闘勝仏よ、通天大聖よ、孫悟空よ!!

「あー、気にするなきにするな。昔やんちゃだった不良のじいさん、それだけじゃ」

「今じゃゲーム猿、ですよね?」

「うき!」

げんこつで殴る仕草の老師と笑う忠夫。

それで、それだけで、何となく安心できた。

で、後ろの女は?

「神族調査官のヒヤクメなのねえー」

なんだろう、むちゃくちゃ雑魚っぽい。

「雑魚じゃないのねー!!」

・・・!!!!!!

「あーエミねえ。ヒヤクメさんは大概のものを靈視できるんだそうなので、妙なことを考えない方がいいよ」

「そういうことは早くいうワケ!」

「あー、ごめんなのねー。表層意識だけじゃなくて深層意識から前世ぐらいまでならすっぱり見えるのねー」

私はふるえた。

いや、令子ですら青ざめた。

「あのねー、いくら見えたって、見えてるって言わなければ、みんな警戒しませんよー?」

「忠夫君は社会の窓が開いてるのねー」

「ふわあ! そういうことは早く言ってくダサイ!!!!」

「・・・ふふふふ。」

なんだろう、このフツフツと沸く感情は。

私と令子がジロリと見た瞬間、ヒヤクメさんは真っ青になって忠夫の陰に隠れた。

なんだか、こう、さらにフツフツと。

「あ、あのねー、私は仕事できたのねー。」

第四話

「あ、あのねー、私は仕事できたのねー。」

「そうです、ヒヤクメ。仕事はさっさとなさい。そして忠夫君からとつとと離れなさい」

なんででしょう？ 小竜姫様にも沸き上がる何かが。

ヒヤクメさんの仕事というのが、忠夫の霊能力の根元を探るというものだった。

文珠の件はすでに神界のトップにはいられているものの、どうか情報を偽装して人間ががんばって作りましたけど役立たず、程度の情報にしているそうさ。

しかし、神になるほどの修行をした菅原道真公ならまだしも、ただの中学生の人間が文珠に至るといのは異常すぎるという事もあり、表向きは調査、本格的には忠夫の霊格構造まで調べたいというのだ。

もちろん、忠夫には拒めるそうだけど、あいつは拒まないだろうと思う。

「じゃ、ちゃっちやとおねがいます」

「・・・ほんとうにいいのねー？」

「だってほら、ヒヤクメさんにこうしてみられるだけで、みんな知られてるんでしょ？ だったらもうウチの親より親密な仲って感じ」

言われたヒヤクメさんは真っ赤になった。

「じゃ、じゃあ、見せてもらおうのねー」

それはすでに終わってしまった物語。

それは悲恋と絶望の物語。

それは行き着く先に始まった後悔の物語。

それは、それはそれはそれは……

引き裂かれんばかりの虚無と絶望が、その瞬間に発生した怒りと悲しみが、彼に数年にわたり降り注いでいた。

発生した時系列は未来。

しかし照射された方向は全時空方向。

螺旋を描きつつ進む時間の波の頂点を打ち抜くかごとくに照射された漆黒の思いが、幼い過去の彼に照射された。

鍛えに鍛えぬかれ、世界すら救うことを成し遂げた戦士たる少年の絶望。

それが彼の魂を錬磨した。

削られ打ち抜かれ、そしてそれに負けぬように立ち上がる。

そんな絶望的な魂の戦いを少年の心は成し遂げたのだ。

それ故の異能、それ故の文珠。

そう、神となるまで修行した、そんな存在などに負けないほどの錬磨を、この少年の心は成し遂げたのだ。

今ほど自分の役目を呪ったことはない。

のぞき屋、観察者などと言われることなど大したことはない。

人や神とて心をのぞかれて平静でいられる存在などいやしないのだ。

唯一妙神山の小童姫や老師は気にもとめていないが、それでも入ってほしくないと思っっている領域がある。

が、この少年、横島忠夫は違っていた。

自らの領域ですつぽり包んでしまうのだ。

どうせ見られるなら仕方ない、と。

ここまでおおっぴらに見せられてしまうと、こちらの方が恥じてしまう、というほどに。

そんな少年の、横島忠夫の、未来の慟哭を見てしまった。過去の苦悩を見てしまった。

見てしまった。

見てしまったからには報告しなければならない。

これから未来に起きるであろう、神界の魔界の失態を。

その失態によって傷ついてしまうであろう少年の心を。

すべてを報告しなければならぬのだ……。

両目を見開き滂沱の涙のヒヤクメ。

なにを見、なにを聞いてもこんなにも感情を乱されることはないはずなのに。

「ヒヤクメ、ヒヤクメ！」

我に返ったヒヤクメは、そのまま座り込んだ。

「いやなのね、いなやのねー！　こんな事報告できないのね、酷すぎるのねえー！……！」

いやいやと頭振るヒヤクメを、忠夫君が抱きしめた。

「全部見てくれたなら、話は早い。全部報告してください」

「だめなのね、ぜったいだめなのねえ、いやなのねえ!!」

「お願いです、ヒヤクメさん。もう二度とあんな想いが繰り返されないようにしなければならぬんです!!」

瞬間、ヒヤクメが止まる。

「すべてを見てくれたヒヤクメさんにしかできないことなんです。・・・お願いします」

抱きしめたまま、頭をなでる忠夫君だったが、ゆっくりと腕をといた。

あわせるようにヒヤクメは立ち上がる。

「がんばってくるのね。だから、またぎゅってしてほしいのね」「おやすいご用です」

にこやかに、始めてみるような心の底からの笑顔でヒヤクメは転移した。

あわせるように忠夫は倒れた。

老師曰く、精神的な負荷のせいだろう、とのことだった。

妙神山から帰ってきた弟子たちは見違えた。

以前より高い能力のあったエミ君は、全く淀みがなくなったし、

美神君は高いポテンシャルで能力が開花していた。

加えて忠夫君は論理的な体術を納めてきたらしく、きわめて機敏になった。

もうすでに私の現在の能力を超えていることは間違いない。

霊能すべてで見ると、対人戦術に特化しているように見えるが、彼の力の源のすべては「霊力」であるところを見れば、対人ではなく対人外といえるだろう。

そんな彼だが人外にはよく好かれるようで、除霊先の妖怪や幽霊たちと仲良く話しているのをよく見る。

単なる対話だけでも成仏する霊もいるので、彼自身が行っている行為こそが正しい除霊の姿かも知れないとも思う最近だ。

「先生、ちよつとこの依頼へんですよ？」

「ご近所の幽霊と話していた忠夫君が声を潜めて私にささやく。

今回の除霊は、低級霊が吹き黙っているという物件の除霊だったのだけれども、過去何度も除霊が行われているという。

しかし、しばらくすると再び低級霊が吹きだまるというのだ。

情報には出てこない異常があるかも知れないと、忠夫君が聞き込みをしてくれていたのだ。

「この地図ですと・・・」

屋敷を中心にいくつかの祠はあるのだが、その祠の一つが壊れているというのだ。

さらに言えば、壊れた祠が適当に治されている、とも言つ。

その適当さが原因ではないか、というのだ。

そんな事例があるのだろうかと考え調べにいくと、そこには酷い祠があった。

常識もなにもなく、単に形だけ当てはめたかのようなおしかた、
というか積み上げただけ。

こんな形ではおかしくもなく。

「忠夫君、靈道を治す。フォローしてくれたまえ。」

「わかりました先生。」

「令子君、エミ君。靈道を治したら、あとは雑霊を散らすだけだ。
君たちに任せるよ。」

「はい、わかりました先生。」

祠を正しくし、靈気を込める。

『惑いし道よ、惑いし子らよ。主の導きを受け入れたまえ……』

集まる靈力。

ときはなたれたちから。

『エーメン！』

導きの力が再び解き放たれる。

すでに体の一部のようになじんでいる神通棍を閃かせる。

私は前衛、エミは後衛。

結界に近づく敵を私がせき止めて、エミが冷帯へ直接攻撃をする。
チャージが必要な攻撃なので、どうしても前衛を必要とするエミ
だったが、その攻撃力は一線級だった。

私の場合は、いろんな霊具を切り替えることによって近距離から

長距離までをフォローする万能タイプだが、エミの場合は自らの安全を確保しないと成らない中長距離タイプといえるだろう。

私と同じように万能タイプである冥子は、式神を道具に見立てると同じタイプといえるが、高い霊具を使わなくていいのはうらやましい限りだった。

「令子、いくわけ!」「了解!！」

私は簡易結界を展開。

あわせるようにエミの攻撃が広がった。

「……完了、かしら?」

「……………ん……………」

霊視ゴーグルで周囲を見回して雑霊一ついないことを確認。

「よっし、完了なワケ!!」「いえーい!!！」

はいタッチの私たちは意気揚々と現場を後にする。

「エミねえ、令子さん。ご苦労様」

忠夫が投げた缶ジュースを私たちは受け取る。

「さんきゅ、忠夫」「ありがと、忠夫」

忠夫がとり持った縁というかなんというか、最近、私とエミ、あと冥子がよくつるむ。

クラス対抗でエミ&冥子&私で組んだところ、勝てるチームがいなくなってしまう、学年対抗に発展。

その年のGS受験チームに勝ってしまったから騒ぎが大きくなってしまった。

六女では高等部三年の選抜で優秀と認められた生徒だけが在学中にGS受験ができるルールになっている。

少なくとも、三年になっても優秀と認められず受験もできない年もあるぐらいだ。

今年の三年は優秀で、受験して落ちても恥にならないと判断されただぐらいのレベルがあるはずなのに、一年に負けた。

これはどういふことなのか、と理事会が紛糾したというのが、理事長が一言。

「通過できる子よりも、合格できる子の方が優先よ」

聞けばすでに除霊助手として実践に付いているという。

ならば受験資格でも問題あるまいと言う結果となった。

かくして私たちは今年のGS受験を後押しされる毛かとなった。

実質最年少GS資格取得記録は塗りかえられるだろうけど、来年あたりにまたぬりかえられるんだろっなあ、と苦笑いの私たちだった。

急遽、エミねえ達がGS資格受験をすることになった。

それに併せて合宿というか、勉強会みたいなものが開かれることになった。

六女で。

その勉強会に何故か僕が招かれることになったわけで。

「何ですか？」

「だってえ、忠夫君が一番優秀でしょ？」

聞いた話だとGS受験って霊波と実践形式の戦闘らしいし、優秀もなにもないんじゃない？ と聞いてみる。

「じつはねえ、冥子の面倒を見てほしいのよ」

最近、暴走の回数を大きく減らしている冥子さんだけど、やっぱり暴走はするらしい。

とはいえ、今までみたいなプツンではなく、霊力切れの制御不能らしい。

「それって、普段式神出し過ぎってことじゃあ……。」

「そうなのよ、でもねえ、私たちが言っても聞かないのよ」

師匠の指導力不足を他人に預けるって、どういう根性でしょうか？

そんなことをエミねえに聞いてみたところ、エミねえも令子さんも僕を拜む。

「命あつてのもの種なワケ。」「頼むわ、試験会場で死にたくないのよ」

そんなわけで、勉強会とは名ばかりの式神教室が始まることになった。

） 初日

「みんな」を常時出していて、どのくらい保つかを試した。ワンダリングさせているだけだけど、ほぼ五時間ほど保った。

つまり、冥子さんの霊力は、現在5h*12というわけだ。

きゅ〜、と目を回したところで密かに文珠で回復させると、式神達も収まった。

今度は一番燃費が悪い子を中心に試したけど、三匹程度なら一日保つことがわかった。

つまり、結界を張りつつ霊視して攻撃すると言つことが、一日中できると言つことだ。

その結果を六道婦人に見せると、瞳を輝かせて喜んだ。

「最低でも〜五時間放置すれば〜、暴走は〜収まるのねえ〜」

ああ、そつちですかw

） 二日目

最高三匹に絞る、そんな訓練を始めた。

移動の足の馬っぱいものか、テレポートできる子。

霊視ができる子。

この二体は決定。

で、最後の一体をいろいろと切り替えるという手法を検討してみた。

「でもね〜、活躍できない子も〜かわいそうなのよ〜」

「冥子さん。冥子さんが怖いものが嫌いなように、苦手なことがある子もいます。でも冥子さんをお願いされるとみんな頑張っちゃいます。苦手なことでも出来ないことでも。でも、本当は出来ることでみんなは活躍したいんですよ？」

「そつかあゝ、うん、わかった」

子供のように微笑んだ冥子さんは、三人体制を細かく運用する方法を一生懸命考え始めた。

「でもー、必要なら全員出したほうがいいのよね？」

「そうですね、全員出して暴走するに任せるといふ先方もありつて言えばありですね」

「……ふふふ」

なんだかちょっと黒くなった気がする冥子さんだった。

三日目

この三日間でどうにか形になったわけだけど、実践形式でやってみることにした。

相手は三年の元GS受験組三人集。

六道婦人をお願いして、冥子さんを倒せたら受験資格OKという流れにもらった。

少なくとも、今回一年の受験は横紙破りだし、三年の人たちだつて在学中に受験しなければならぬわけではない。

ただ、それは、プライドの問題だと思う。

さすがに全校生徒の前で訓練は無理と言うことで、六道の敷地内で訓練してもらったんだけど、結果は三年の惨敗だった。

向こうは冥子さんの暴走ありきで作戦を立ててきていたけど、冷静に対処できる冥子さんに暴走はありえない。

ゆえに、決め手に欠いた三年生はギブアップを宣言した。

また一年修行して来年にかけることを宣言して帰った三年の三人

だったけど、それを見送って見えなくなったところで六道婦人が泣いた。

もう、人目をはばかることなく号泣。

隣のメイドのフミさんにすがりついて、わんわん泣いていた。

そう、娘の成長を目の当たりにして泣いたのだ。

小さくささやくように「ありがとう」を繰り返して。

「忠夫くん、準備はいいかしら？」

エミねえたちのGS受験前日、みんなで六道の家に泊まることになったんだけど、何故か僕も一緒に泊まることになった。

聞けば、在学中に受験するときには、六道の家がバックアップしてるぞ〜という雰囲気を出すために送迎するのが習わしなのだから、うけど、何で僕まで？

「忠夫君は〜、冥子の〜コーチなのよ〜？」

「そうね〜、忠夫君〜、コ〜チって言った方が〜いい〜？」

まあその辺は冗談と流すことにして、唐巢神父からも勉強になるから〜一緒なさいと言ってくれたので、同行してみただけど、その車の中に何故かマイマザー！。

「母さん、なんで？」

「あら？ 自慢の娘の晴れ姿よ？ いいじゃない」

我が母、百合子は、なんと六道夫人と同級生だったそうで、最近つきあいを再開したとか。

原因は冥子さんに僕が声をかけたあたりだとか。

「お友達」にお給料を上げて雇うシステムの脳味噌はどうかと思うけど、先日の涙を覚えているので、たぶん、うちの親に負けないほどの子煩悩なんだと思うことにしている。

「ところで忠夫は受験しないのかい？」

「さすがに中学生で受験は・・・。」

「あら、いいんじゃない？」

「保護者としては許可するわよ？」

「じゃあ、私が保証人になるわあ」

ちよちよちよつとまっつてくださいよ、ねえ！？

「唐巢くんの許可もあるし」

「協会からの許可もあるわ」

「妙神山の管理人さんから推薦状も」

わ、畏なんですね、畏なんですよ！？

ぐああー！ー！ 唐巢神父、計りましたねえー！ー！ー！ー！

「だから、あきらめて、受験なさい」

たすけてエミねえー！ー！ー！ー！

忠夫君の絶叫が聞こえたきもしますが、無視しましょう。

実際、彼の才能は高すぎるので、それなりの注目を浴びなければならぬ立場だと言うことを、今のうちに自覚してもらわなければなりません。

六道夫人に目を付けられたのが運の尽き、というか、彼の母親が

六道夫人を名前でよびあう様な仲であったことも彼の不幸のうちでしょう。

彼の實力からすれば、手抜き半分で合格することが決定しているので、最小年合格者として名前を残してもらおうというのが私と六道夫人達との計画だ。

彼自身の霊能のおかげか、除霊に必要な道具は少なく、簡単な霊符程度は自分で書いてしまうので、教会の経営がきわめて健全になっているのだけれども、さすがに無免許の彼が作っている札を珍重しているというのは体裁に悪い。

そんなわけで、六道婦人の薦めもあり受験してもらうことにしたのだけれども、すごい視線が私の背中をおそっていた。

振り向けば、我が弟子達。

横島忠夫、横島工三、美神令子。

三人が三人とも今回の受験の件を聞いていなかったのだから、仕方あるまい。

視線で『先生、お話をお聞きしたいんですがね』と語っているが、嫌々だめだよ？

私はGS協会の仕事で監視員として職務を全うせねばならないのだから！！

「あら、唐巢先生。あなたのお弟子さん達でしたっけ？」

「聞けば下は中学生、上でも高校生が免許受験ですって？」

「激励してあげればいいじゃないですか」

いいえ、彼らはすでに私の弟子である前に受験生です。

皆平等にしなければならぬのです、ええ。

一次試験は全員通った。

今回の参加者は3521人。

その大半である三千人強が落ちている事実からすると、唐巢神父の弟子や仲間内全員が通過するというのは奇跡的確率に見える。

が、素人目で見ても息子や娘の仲間達は周囲から隔絶していた。覇気というか気迫が何倍も違うのだ。

「そういうことがわかる時点で、百合子ちゃんも素人じゃないと思っの〜」

まあ国際ビジネスの一線で働いていると、そういう目が養われるだけなのだけれども、霊能というものも同じ地平線にあるのかもしれないと思わなくもない。

ならば今から息子をタフに育てるなんてのもありだろうか？

バカな思索はおいておいて、目の前で二次試験が始まるうとしていた。

ラプラスダイスという霊具で対戦が決められたのだが、一回戦での同門同士討ちはなかったようだ。

そのことを心底安心しているのは誰よりも息子だろう。

姉であるエミばかりではなく、令子ちゃんや冥子ちゃんを攻撃することなど出来やしないと心から思っているのがわかるから。

たぶん息子は、相手に怒られたり嫌われたりするのを承知で、二回戦以降で負けてみせるだろう。

試験に向かわせてくれた人々の顔をつぶさぬよう、姉たちとの対戦で目立たぬよう。

もちろんエミ達はそのことが理解できているから、色々と手段を講じるのだろうけど。

一回戦は身内四人がほぼ同時間で勝利した。

開始から三十秒ほどで令子ちゃんと忠夫が勝利。

四十秒ほどで冥子ちゃんとエミが勝利した。

この辺の時間差は相手や攻撃手段によるものらしく、冥那曰く「エミちゃんはずつと直接攻撃が出来ないから、時間ぎりぎりになるはずなのにね」とのこと。

つまり、圧倒的な実力差があるということだ。

続けて行われた二回戦で冥子ちゃんが手こずったのだけでも、無事四人とも勝利し、GS免許を取得決定した。

次の三回戦は翌日に行われるということなので、再び六道邸に行つたのだが、そこではこれでもかと言うほどのパーティーが行われており、主賓登場とばかりの大騒ぎが始まった。

まあ、そりゃわかるけどね。

なんでうちの旦那が、六道のメイドを両脇に抱えているかね？

あれよあれよというまに、GS免許取得。

二回戦終了とともにGS協会の広報に取り囲まれて、僕たちはアップアップになった。

僕とエミねえは姉弟で、令子さんも入れれば唐巢神父の弟子仲間で、冥子さんを絡めると六道女学院関係で、行き帰りに六道夫人が付き添っていたりなんだったり。

色々と聞かれたのだけれども、取材内容のゲラが出来たので、問題なければ広報に使いたいという書類が、六道夫人から見せられたんだけど、その内容が何というかもう……。

第五話（前書き）

週一更新のよこっち、今度も色々ありますが、お楽しみいただければ幸いです。

追記：今作のトーナメントは、対戦ごとにダイスを振ってます。

第五話

僕は幼い頃から唐巢神父に弟子入りしていて英才教育を受けていたとか、エミねえはそれに触発されて才能を開花し、唐巢神父の目に留まったとか、令子さんの母親である美知恵さんも唐巢神父の弟子だそうで、二代にわたる英才教育だとか、なぜか母と六道夫人が昔からの知り合いで、その伝で唐巢神父と出会ったことになったり……!!

思わず母親をみると、してやったりという笑顔。

あからさまな嘘は無くても取材状の勘違い程度は許す姿勢で、というこらしい。

「みんな、できれば、このかたちで納得してほしいの」
「あなた達の関係って、結構良好なのよ。だから変な取材で崩したくないじゃない？」

まあ、なんとなくか、理解しました。

そんなこんなでゲラをOK出したんだけど、大きな疑問が一つ。

「僕らの誰かがギブアップすると、この記事って無駄になりませんか？」

瞬間、大爆笑の渦。

なんで？

三回戦でも私たちはバラバラになり、それぞれが勝利した。

これって運命を感じてしまう。

忠夫の台詞じゃないけど、ここでギブアップなんて事にならないようにしないと、折角の記事も無駄になってしまうしね。

ベスト4の三席が六道女子在校生で埋まるなんて開校以来の快挙と大盛り上がりで、学校から大拳の応援団が集まってきていた。

まるで甲子園の高校野球の応援のような勢いだ。

ともあれ、六女という括りで見なければ、唐巢神父の弟子が三席を埋めているという見解もあり、協会内での地位は鰻登りだろう。

加えるならば、おばさまの工作のおかげか、私たち全員が六道の派閥であるものと認識されている。

それ自体は文句無いのだけでも、以降の政治圧力には事欠かないだろう。

GS免許持ちの在校生、大派閥となりつつある六道家。

そして秘蔵っ子、横島忠夫。

これだけのカードと繋がりがもてたという時点で、望外の幸運といえるだろう。

その幸運が誰に微笑むか、準決勝のダイスが振られた。

決勝は瞬時に決着した。

ともに前衛タイプである忠夫君と令子君だったが、積み重ねた経験の差が表面に出た形となった。

靈波刀でつばぜり合いをしている隙に、令子君の手首を握って靈波を送り込み、失神させるといふ荒技を使ったが、これ自体は靈格闘術の専門家である清水顧問すらうなるほどの見事さだった。

ただ、失神した令子君を抱えて試合用の結界からでたところで、「貴様も旦那とおなじかぁー！ー！」とドロップキックを放った横島夫人のほう清水顧問の目に留まったたというのは何とも言いえない話だ。

謀略と計略が絡み合ったGS免許受験だったが、終わってみれば弟子が全員合格し、六道派閥が全員合格するという恐ろしい結果となった。

横島夫人が六道夫人と手を結んでいる以上、忠夫君の包囲網は完了していると見ていいだろう。

すまない、忠夫君。

替わりと言っては何だが、手早く独立できるように手はずを整えさせてもらおう。

けっして縁を切つて被害を受けたくないとか言ってるわけではないからね！！

えー、おかしな事が起きました。

まず、GS免許が取れたんですが、早々に修行完了を言い渡されました。

まあたしかに、結界とか張れるようになるのが当初目的だったのですが、いつのまにやら靈能開花に走り、除靈助手を経てGS免許

なワケで。

「君はすでに一人立ちするだけの修行は終わっているのだよ。だからもう研修などと言えないのだよ」

にこやかに微笑む神父。

令子さんやエミねえはウンウンうなずいてる。

「確かに、忠夫って経理会計報告交渉までやってるシイ」

「前衛も後衛も万能だしねえ？」

「・・・それって、でてけてことですか？」

「「「いやいやいやいや！！！！！！」」」

思わず首を横に振る三人。

「そうではなくて、君自身が思う、君が目指すGSになってもいい頃なんじゃないか、と思ったただけなんだよ」

僕自身が目指すGS。

僕がしたいゴーストスイーパー。

何となく、胸の内側が暖かくなってきた。

「忠夫、前に言ってたじゃない？ 何でもかんでも無理矢理除霊するやり方は好きじゃないって。」

「忠夫。これから依頼も除霊も、正面から選ぶことが出来るワケ。」

それを神父が許してくれた。

そう思った瞬間、僕の瞳は涙であふれた。

「ありがとうございます、御座います、先生」

深々と頭を下げる僕を、神父は優しく微笑んでみている。

なにもGSになったからと言って除霊をしなければならないわけじゃない。

僕が思う僕自身のスタンスで、この世界と向き合えばいいんだと言ふことに気づくことが出来た瞬間だった。

GS免許を取れた報告に妙神山に行こうと言い出した忠夫についてゆくため、準備をしていたある日、教会に珍しいお客さんがきた。それは妙神山修行場管理人の小竜姫様と人に化けた鬼門達だった。聞けば竜族のお偉いさんの子供が、人間界に興味を持ってしまい、修行もそこそこに降りてきてしまったそうだ。その搜索を手伝ってほしいという。

「で、そのお子様の手がかりは？」

「・・・全く。」

私の言葉に肩を落とす小竜姫様。

「ヒヤクメさんは・・・」

「今、神界で身動きがとれない状態です」

令子の問いにもうなだれる小竜姫様。

とにかく、外見特徴でローラー作戦しかないかな。

「そういえば、龍神さんの子供が、どんなところから人間界に興味を？」

「……ああああ、そういうことですか!!」

神父の問いに、大きな小竜姫様の声が答えとなって響く。

猿神老師へのおみあげのゲームソフトを漁っていたところ、店先で騒ぎが起きていた。

「卑怯もの」とか「無礼もの」とか「頭が高い」とか騒いでいる幼児を、近所の子供が殴る蹴る。

手加減が利いているのか、幼児に目立った傷はないけど、リンチ同然の行為が許されるとは思えない。

「これこれ、そこな子供たち。亀をいじめるのはやめたまえ」

「あ、横島のにいちやん!!」

「きいてくれよ、このガキ生意気なんだ!!」

「名を名乗れとか、頭が高いとか、生意気なんだよ!!」

まあ、何というか、発言に困るなあ。

見た目といい、格好といい、オカルト関係者だよなあ……。

「じゃあ、この場合は僕が預かると言うことで。」

「……しゃーないなー、横島あんちゃんが言うなら……」「教育してきてや、あんちゃん」「今度、アホなこといたらマジげりやど、がき」

三者三様の悪態をつきつつ、少年たちは店の奥に向かった。

残ったのはオカルトっぽい子供。

というか、たぶん竜族だよな？

「・・・人間、感謝する。さすがに我が本気を出しては大人げないのでな」

余裕ありげにふるまってるけど、悔しさに涙を浮かべているのは秘密だ。

「して人間、聞きたいことがあるのだが・・・。」

んー、確かにムカつくなあ。

多分見た目通りの年齢じゃないんだらうけど、滑稽を通り過ぎてムカつく。

これは才能だろうなあ、むかつかせ屋。

「・・・この地に『横島忠夫』なる人間が行くと思うのだが・・・。」

つとつと口元に扇子を開く子供。

「ふむ、知らぬであろうなあ、三界でもまれなる人物と聞く。そんなときが知らぬのはいいとして、先触れとして雇ってやらぬ事はない。頭を垂れて我が願いを叶えろ。」

もちろん拳骨。

ヒット三発で空中に浮かせて、さらにコンボヒット12発。

もちろん血を吐くほどのダメージが入るように、手の中の文殊には「打」の文字を入れる。

この子供は多分、3000マイルはあるだらうから、怪我程度ですむ予定だ。

宙を舞って地面に落ちた子供が、三秒ほどで立ち上がった。

「なにをするこの無礼ものめ!!」

「無礼はどつちだ、この恥知らずが!!」

「なんだとお、この竜族王朝の王太子、天竜童子と知つての狼藉であらうなあ!？」

「名乗りなんか今更されたって聞き入れるもんか、馬鹿者目が!! 人の世界に土足で押し入って、親の名前で好き放題に暴言を吐くことが狼藉でなくて何という!!」

「・・・な、なにいい!? 我が天竜童子と知つてもその態度、ゆるせん、ゆるせんぞお!!」

「てめえ見たいなクソ餓鬼がどれだけ偉ぶってみても怖くねーよ!! 本当に尊敬すべき人つてのは、ちゃんとそいう雰囲気を負つてるんだよ! 小竜姫様とかなあ!!」

打てば響くようなバカ、天竜童子は、瞬間的に固まった。

「・・・そ、そなた、も、も、もしや、小竜姫をしっておるの・・・か?」

「あの人こそ、尊敬すべき竜族だ。」

僕の言葉とともに、なぜか餓鬼は真っ白に燃え尽きた。

捜索に出よう、というところで、教会に忠夫君が帰ってきました。なぜか背中に天竜童子を背負って。聞けば、人間の子供の前で尊大な態度をとっていたので、逆にいじめられていたとか。

助けてみれば再び尊大な態度と言うことで、拳系の養育的指導を

していたとか。

一応竜族の王子なのですから、無茶はしてほしくないなあ。

そう思っただんですが、すでにボコボコにしたと言うことで責任を問われたら呼んでほしいとにこやかな笑み。

「ま、それはともかく……。」

教会のベンチで寝かされた天竜童子にチョップを入れた忠夫君。すると瞬間的に起きあがり、忠夫君を見て声を上げ、私を見て悲鳴を上げた。

なぜか忠夫君の背後に隠れる天竜童子。

「なんでにげんだよ。美人で優しいお姉さんだろうが。」

うんうん、忠夫君はいい子ですねえ。

「そ、そ、そなたはしらんのなあ、小竜姫の怒りモードの恐ろしさを……。」

「それはオマエが小竜姫様を怒らせるからだろ？」

そうです。殿下が私を怒らせなければ、問題ないのです。

「ば、ば、ばかをいうな！ 小竜姫は基本怒ってるぞお！！」

「そりゃ誤解だ。小竜姫様は、笑顔と優しさでできてるんだぞ？」

すばらしい標語です。以降、修行場の合い言葉にしましょう。

「……きさま、もしか横島忠夫か？」

「もしかしなくなつてそうだよ。」

「……ならば納得じゃ。あのお堅い小竜姫が岡惚……。」

・・・」

瞬間、私の剣は唸ります。

もちろん、剣先は天竜童子の口の中。

「よけいなことを言うと、童子の口が縦に裂けますよ?。」

生意気なクソ餓鬼を気絶させた小竜姫様は、にこやかな笑みとともに教会を去った。

一応、依頼完了と言うことで一箱何かをおいていつてくれたんだけど、中身を見て驚いた。

「せ、千両箱、じゃない・・・。」

「た、た、忠夫、忠夫、どうしよう・・・。」

「しゅ、しゅ、主よ・・・。」

折角置いて行ってくれたんだから、とっとと換金して教会の補修費と貯金にしましょ。

「「「「・・・」」」」

で、貯金の方は、またくるであろう妙神山の集の東京滞在補助費用にすれば、角も立たないでしょ?

「た、忠夫君。冷静だね?。」

「あのですね、先生が本気になって仕事すればこの程度の現金は右

から左なんですからね？」

唐巢神父は日本で何人もいないSクラス。

そのぐらいの報酬を得ていておかしくないのだ。

少なくとも、経理管理をしていた僕は千両箱を換金した程度ではビクともしない。

そう言いきつたのに、先生はちょっと震えていた。

「た、忠夫。今、忠夫にまわしてるDクラスの仕事って、ドンぐらの利益なワケ？」

「基本的に道具を使わないから、僕の場合は利益率89%ぐらいかな？ 先生は聖水とか呪術用の聖書を使うから、68%ぐらいですね。」

ちなみに呪具の損耗率が高い令子さんは38%。

呪具を大量使用するエミねえは25%になる。

二人が50%を越えるのは五千万クラスの依頼からになるはずだ。基本的に高い呪具を使わないでいい僕や先生は、さすがに利益率が高くなる。

が、逆に、装備による汎用性が高い令子さんが一人で仕事すれば成功率は高いだろうし、エミねえはどうしても前衛を必要とするので二人以上の経営になる。

どちらも高額を得るためには、かなりの長い時間をがんばって経営しなければならぬはずだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぐっと考え込んでいるエミねえと令子さん。

しばらくお互いを見ていた二人が同時に僕を見た。

「忠夫、いつしよに事務所を開く（わよ）（ワケ）」

えー、事務所を開きました。

場所は以前除霊した霊的不良物件。

除霊は完了したんだけど、今まで何度も除霊後に再び霊が集まってきたので、非常に評判が悪くなって売れ残っていたそうだ。

協会の資料では二度しか除霊してないんだけど、あのいい加減な祠の処置を見ればわかるとおり、モグリのGSが6度も除霊していたそうだ。

モグリの方も何度か稼ごうとしていい加減な除霊をしていたらしく、先生の方からその報告が行われている。

本なら司法に委ねる内容だそうんだけど、日本には未だオカルト専門の司法機関がないので、GS協会が代行して処罰しているのが現状だ。

もちろんその現状がいいものとは思っていない人たちは多く、現役を退いたGS達が協力してオカルト司法機関、通称「オカルトGメン」を組織しようとして躍起になっているとか。

その中の一人が、今目の前にいる美神美智恵さん。
そう、令子さんのお母さんだった。

事務所開設と言っても、様々な手続きがある。

たとえば連帯責任者を三名必要とするとか、開設時に除霊助手を必要とするとか、開設時の責任資金が一億ほど必要とか。

責任資金は先日の千両箱から借りている。
除霊助手は、名目上エミねえと令子さん。

そして連帯責任者は、唐巢神父と何故か清水GS協会顧問が引き受けてくれたんだけど、最後の一人が目の前の美神さんのお母さんだった。

というか、六道夫人を押し退けて立候補。

まあ、令子さんが所属する事務所だから、ということでも立候補してくれたのだ。

もちろんそんな事だけじゃないのは解っているけど、ここは感謝をしておかなければならない。

「・・・美神さん、あなたのお陰で最後の条件が叶いました。ありがとうございます。御座います。」

僕が一礼すると、とても16・7の娘がいるとは思えない若々しい笑顔で微笑んでくれた。

「いいえ、若くて有能なGSの後ろ盾になれたんですもの。逆に感謝したいぐらいだわ」

つまり、いま設立しているオカルトGメンを手伝って、ね、と言うわけですか・・・やっぱり。

僕がそう言うと、美神さんはにこやかな笑顔のままだったが口元がひきつる。

「やだ、忠夫君。娘も美神なんだから、名前で呼んでいいのよ?」

えー、じゃあ、美智恵さん。

「なーに? 忠夫君」

「とりあえず、設立前の訓練とか業務支援とかウチ依頼しまくると、六道傘下にオカルトGメンが入ったって噂になりますよ?」

ひくつと表情を固める美智恵さん。

やっぱりなーと、僕やエミねえ、そして令子さんが肩をすくめる。

「た、た、忠夫君。や、やだわ、派閥とか権力とかそういう事じゃないのよ? ただ、若くして才能にあふれるGSとある程度技術提携を結べる下準備とか……」

「ママ、本音が出てるわよ?」

可愛いしぐさで両手で口を覆う美智恵さん。

迂闊な感じが可愛いなあ。

とても一児の母とは思えません。

「……だめ、かしら?」

苦笑いで小首を傾げる美智恵さん。

まあ、正直に言っとオカルトGメンの人員予定者は三線級のGSやGS試験に落ちた霊能者に特殊免許を発給して使う予定なのだそうだ。

そうなるとD～E級の仕事ならまだしもそれ以上では対応できない可能性が高い。

失敗や失態が発生しそうな物件は、外部の民間GSに依頼する形で計画しているが、依頼料は凄く安いものになってしまう。

だから今のウチに安い提携と人員確保に動いたと正直に告白されてしまった。

もう、それは切り札だった。

しょうがないのでこっちもカードを切る。

「無理に現役を引つ張り出さなくても、GS候補をただで使つてのはどうですか？」

再び小首を傾げる美智恵さん。

やっぱり可愛い人だなあ……。

忠夫の奴、なんつつか、恐ろしい企画を引つ張りだした。

オカルトGメンの業務現場を、六女の選抜メンバーの除霊実習単位に組み込んでしまえ、と六道夫人に吹き込んだのだ。

始めそれを聞いた六道夫人はゴネたけど、忠夫が試作した霊具を見せられて意見を急転する。

三つの霊具というのが、「杖」「盾」「罨」と称されるもので、実際は違う。

現行の武器を模して言えば、「手榴弾」「霊波感応物理障壁」「改良型捕縛結界」といえる。

だが、この霊具の売りはそこではない。

この霊具、恐ろしいほど生産コストが安いのだ。

杖は一つあたり五千円。

盾は一つあたり八千円。

罨に至っては一つあたり二千円だ。

「た……ただお……くん？」

製法・原料を目の前で並べられ、さらには六女の実習区画で威力を見せられて、六道夫人は失神した。

理事長室で回復した夫人は、是非とも業務提携を！！と叫んだが、そこで引つ張りだしたのがオカルトGメンとの現場実習単位だった。

瞬間的にその有用性に気づいた夫人は、がっかりと忠夫の手を取った。

「この、『美智恵お姉さんの聖なる杖』と『冥那ちゃんの愛の盾』と『百合子さんの恋の罿』の製造委託を六道にお願いしたいと考えています。」

「・・・愛なのね、忠夫君は六道を愛してるのね？」

「その代わりに、オカルトGメンと六女・六女卒業生にはかなりの割引で卸すとしていただきますのです」

「・・・忠夫君、おばさまを口説いてどうするのかしら」

まあ、口説いてると言われても仕方ない内容だ。

うちの忠夫は商売つけなしすぎて困る。

ともあれ、この霊具によって、協会が裁ききらない雑霊の依頼が一掃されること請け合いだ。

少なくともE級以下とされている低価格依頼が、急場の資金稼ぎと依頼達成率上昇で「おいしい」物件とされるようになるし、オカルトGメンのメンバーが如何に弱小でも数さえ揃えれば都市包囲規模の霊団でも戦滅できるだろう。

この霊具の配給計画を聞いた美智恵さんも、

「令子、弟か妹を今すぐ作るわ、ええ、いますぐよ!!」

と忠夫に飛びつこうとしたぐらいだから。

もちろん、私と令子に撃墜されたわけだけど。

実は、忠夫も全部解放したわけではないのだ。

忠夫が開発した新霊具「竜神姫のお仕置き棒」こと改良型神通棍もあるのだけれども、こちらは全くコストに見合わない、というか

霊的動力部分に文殊を使っているので、大量生産ができないというものなので、公開どころか存在も周知させていない。

そんなわけで、ウチの事務所「TER除霊事務所」専用装備として保管されることになっている。

と、そんなこんなで、忠夫が引つ張りだした企画は順風満帆に走り出し、来期から準備中のオカルトGメンとともに除霊実習を始めるそうだ。

「でえ、忠夫君。手伝ってくれるのよね？」

「やだな、この学校にはプロ免許を持ったウチの所員が居るじゃないですかあ」

「まあ、そうだったわねえ、免許は持っても単位は必要ですものねえ？」

第五話（後書き）

岡惚・・・・・・ 岡惚れ・・・ 決まった相手のある人や付き合いのない人もしくは少ない人へ密かに恋すること。

第六話

「まあ、そうだったわねえ、免許は持ってても、単位は必要ですものねえ？」

売ったわね、忠夫、私たちを売ったのねえー！！

「いえいえ、ウチの事務所からの出向ということで、研修時間にも含まれますし、学校の単位も取れますし、六女の中でもオカルトGメンとか六道の門を叩く人もいるかもしれませぬし……。」

つまり？

「六女の霊能関係者の有効利用？」

「忠夫君、やっぱり六道を愛してるの？ 冥子を落とすつもりなの？ 愛を囁いてるのお？」

目をウルウルさせてる夫人は置いておいて、たぶん忠夫は潜在的なモグリGSの根絶を考えているんだろうと思う。

令子とも話したことだけど、現在のGS業界の実力には波がありすぎるのだ。

私たちや忠夫、冥子などのクラスの实力があればいいけれど、そのレベルにいたらない運だけで免許取得したようなGSも少ない。

いや少なくともどこかゴロゴロしているのが現状だ。

で、あの程度が免許持ちならば、とちよつとした霊能者がモグリGSとなり、全く経験のない霊と対戦して負けたり無茶苦茶にしたりという事件が多い。

それゆえのオカルトGメンなのだけれども、底辺層の底上げをしなければその実現も危うい。

だからの新霊具、だからの新単位ということなのだろう。はじめは六女から。

そして新装備の有用性を目の当たりにさせた上で、GS免許取得者だけには低価格配給される。

新装備による依頼達成率の上昇。

達成率上昇によるモチベーションの上昇。

霊的被害の軽減と民間GS負担の軽減。

Gメンの開設とオカルト被害対応の迅速化。

たぶん現在の依頼制度にも大きな変化が起きるだろう。

その変化の入り口が、今目の前で開こうとしているのだ。

まったく、ウチの弟にはやられる。

とはいえ……

「……派遣っていうなら、手当つけるワケ」

「……忠夫、解ってるわよね？」

ガクガクとうなづく忠夫だった。

事務所に行くと、なぜかそこには母がいた。

エミねえも令子さんも何故か微笑んでいる。

いやな予感がしたので回れ右すると、そこには何故か六道夫人と冥子さん。

囲まれました。

「忠夫。おまえのいい話があるの。」

そう言つて切り出されたのは、あるパンフレット。

一枚目は「六道学園開設のお知らせ」。

二枚目は「六道学園合格通知」。

三枚目は「六道学園入学証明書」

全部僕の名前が書いてあります。

・・・横島忠夫、ピンチです。

「まあ、表向きは別にして、正直な話をするとね、霊能関係者の希望でもあるのよ」

六道女子がある女性霊能者に比べると、男子霊能者の間口は狭い。霊能学校などないに等しいし、本家だの宗家だのと言う争いが耐えない純血主義の性で、力を発揮する前に力を失ってしまうことも多いとか。

そこで学校という形で能力者保護や育成を行うことで底辺拡大を行いたいという。

母もその計画に乗っていて、一般人からのスカウトも男女問わずにしているそうだ。

で、その客引きとしてプロ事務所持ちも入学、と言う形で持っていきたい、と言うワケらしい。

一応、僕もその方向性には賛成だ。

だけど・・・。

「なんで、うれしそうに六女の制服が舞ってるかなあ？」

「いえいえ、ちゃんと男子部の制服は作ってるけど、試しに着てみてほしいかなーとか？」

「もちろん、しゃれよしゃれ。でも、ちょっと着てみるワケ。」

「忠夫。無理とは言わないけど、無理矢理着せるわ」

やばい、本気だ。

「冥子さん、たすけてえ。」

「忠夫くん。私もお揃いの忠夫君がみてみたいかな？」

だめだ、味方がいない！

サメザメと泣く忠夫はおいておいて、男子霊能者を集める意義は大きい。

一子相伝系の霊能者が多い業界で、生かし切れていない霊能者をオカルト業界に残せるという誘惑は強すぎる。

私が面会した28の家の全てから編入や入学の打診があり、入学試験内容に関する問い合わせはすでに三桁を越えている。

問い合わせは国内ばかりではなく国外からもあり、留学枠や単位互換制度に関する懸案事項まで持ち上がっている。

もちろん彼らの目当ては「杖」「盾」「畏」だ。

息子が無茶苦茶恥ずかしい名前で命名したものだから、書類にも「杖」「盾」「畏」としか書けないのが頭痛の種だが、その効能と威力そしてコストについては業界中が騒然となり、国内ばかりか海外からの問い合わせも多数だ。

外交輸出物件としての打診もあるのだが、これについては領けない。

全ては国内需要と関係者需要に振り分けることが決定している技術なのだから。

USAだってUKだって独自霊能兵器は公開していないわけだし。

「でもね、百合子ちゃん。うちに入学して卒業すれば、卸の資格が得られるのよ？」

そんなもの、実習に関する資格として散逸と解析の禁止を契約に組み込んでエンゲージすればいいこと。

とはいえ、そんなことをしなくても、そのうち世界で解析される程度の技術なのだから、気にしなくていいのよ。

世界で解析が終わる頃には、霊能は六道、そういう流れになるから。

「はあ、本当に忠夫ちゃんといっしょ百合子ちゃんといっしょ、六道をほんきで口説いてるの、かしらあ？」

「あら？ 忠夫だったら『僕が思うGSとしての活動ですから』っていうと思うわよ？」

もちろん、今はサメザメと泣いているけど。

男子部も含めた六道学園は、中等部からの開始になった。

一応、霊能科のみで、四クラス三学年となった。

クラス分けの表を見上げていると、不意に人の気配が現れた。

みればガサガサの髪型、三白眼、ちよっと低めの身長。

そんな彼がコッチをみていた。

「おまえが横島忠夫か。」

うなずきつつ、何処かで見たとこの顔だと思っ。

どこだったかなあ……。

「俺は、強くなるために生きてきた。」

あ、そうそう、ナンカの勝負だ。
なんだっけ？

「だが、おまえのお袋にこてんぱんにされた。」

そうか、それで生きてるのか。
結構凄くない？

「・・・おれは女に手を挙げられないからと、無茶苦茶卑怯ないいわけをした。」

くつと頭を下げる三白眼。

「すまん、おまえの母親を、おまえの母親の意志を汚いいいわけで汚した」

・・・!!!!!!

「思い出した!! ダテ・ザ・キラー、ダテ・ザ・キラー!!」

「!!!! おまえ、なんでそれを!？」

「俺だよ、俺、浪速のペガサス、タミヤカップ三連続首位だ!!」

「・・・お、おまえ、そうかおまえか!!」

ばんばんと肩を叩きあう僕たち。

「そうか、横島忠夫、おまえが浪速のペガサスか!!」

さすがだ、やっぱり違う男だ、と感心しきり。

「なに言うんだよ、おまえのプテラノソーンXがあそこでギア変形してなかったら二回目の優勝はなかった!」

「いや、三回目の優勝で解った。パーツ一つに至るまで心を向けられる奴だけが優勝できる。早い奴らが勝つんじゃない、強いヤツが勝つんだと教わったんだ。」

僕たちは握手した。

「伊達雪之丈、1-Aだ。」 「横島忠夫、1-A。」

かつてのライバルが級友として握手できた瞬間だった。

かつてのライバルは既に業界での地位を固めていた。

聞けば既に事務所を構えているという。

すごい話だと腰が引けたが、逆に考えればその年でそこまでいけるほどの修行をしたんだと思うと頭が下がる。

「死ぬか生きるかの修行をすれば、雪乃丞だって直ぐ此処までこれるって。」

生死をかけた修行場一覧に「妙神山」の名前を見つけ戦慄を覚えた。

妙神山といえば霊能者が自らの力をきわめて、その上を目指すときに訪れるという伝説の修行場だったから。

「いやいや、あそこは、あそこにたどり着けた人間だったら誰でも修行のための試しを受けられる神霊の修行場だよ。」

「……そこまで詳しいと言うことは……。」

「……一応、何度か。」

そりやスゲエワケだ。

苦笑いを浮かべた俺だったが、ちよつと踏み込むことにした。

「俺でも行けるか？」

「……見た目の霊力は合格。あとは生死をかける根性があるかどうか、だけど……まあ、雪乃丞だし。」

自分で行けると思ったら声をかけてほしいという横島。紹介状を、あの、唐巢神父の書いてもらうというのだ。

「おまえの紹介状じゃだめなのか？」

「……だって、まだ開業したての駆け出しだよ？」

「そりやそうか。」

「そりやそうだよ。」

教室までの短い間、お互いの近況を交わしあっていた。

一年A組には、いろいろな人間が集まっていた。

ただ、特徴的なのは「伝統的な」名家がほとんど居ないことだろう。

名簿を見てみるとB組やC組には伝統的名家が集中していて、D組には中小名家が乱立と言った感じだった。

「つまりどういうこと？ 横島。」

「まあ、BとCが現在のGS協会次男三男と取り巻きで、D組は旧来のGS協会次男三男と取り巻きだろうねえ。」

「じゃあ、俺たちは？」

不意に声をかけてきた細目に向かって笑う僕。

「自分の代から霊能に目覚めて技を磨いて、独自の道を開く「開祖」でしょ？」

「「「「「おおおおおおお！」「」「」「」

教室中が沸いた。

逆に言うと、進む方向を間違つと、明らかに行き詰まるわけだけど。

「いいじゃねーか、どんないやな奴かと思ってたけど、話が分かるじゃねーか」

「いやいや、マジでいいおとこじゃねーの？」

「やっちまおうぜ、A組が一番だって証明しようじゃねーの!？」

バンバンとみんなで肩を叩くクラスメイト。

「つつかよ、無方向、無団結、無秩序つてのが売りじゃね？」

雪乃丞のその人ことで、教室は爆笑の渦となった。

男子部の合同入学式は、在校生が鈴なりになっていた。

高等部まで集まっているのは男子が珍しいばかりの話ではないだろう。

現在三学年四クラスに分けられている男子部の内部は、新旧のGS協会親族の集まりといえる。

つまり、同じような集まりである女子部や高等部においても親族がやってきたという気恥ずかしさがあるのだ。

ゆえに、物見高く見物、というだけの話でもない。

まあ、率直に言えば、我が弟にして所長、横島忠夫を見物にきたのだろう。

現在、最年少GS資格取得と最年少事務所開設記録を持つ我が弟は、高等部で結構有名だ。

はじめは校門の除霊だったが、GS試験の時に決勝の試合も見ているせいで、いつのまにかファンクラブなるものまで出来ていた。

つつか、私と令子のところまできて公認をしてほしいなどと言ってきているのが恐ろしい。

ちなみに公認すれば、いろいろとつながりが出来ると言うことなので、密かに公認したところ、忠夫の生写真だのなんだのと要求されているのが少し煩わしい。

そんな立場にあるとは夢にも思わぬ弟は、入学式中であるにも関わらず、隣の男子とつつきあい、ちよつと笑っている。

こういう年頃の表情も出来るのだな、と嬉しく思ってたんだけど、隣の令子が大砲のようなカメラでその様子を撮影していたのが寒かった。

「……仕方ないじゃない。百合子さんたちに頼まれてるのよ。」

まあ、仕事の関係で入学式にこれない横島のお母さんの代わりとしては仕方ないけど。

でも、ちよっと鼻息が荒いのはどうにかならないのかしら？

いやー、うちの所長、いいかおしてるわぁ。

この一枚一枚がファンクラブで高額取り引きされると思うと、内心の興奮が表にでてしまつて困る。

百合子さんばかりではなく、六道婦人や冥子、うちのママからも発注されている忠夫の写真。

みんななにに使うのやら、というかママ、最近忠夫を見る目が怪しいのよねえ。

パパもテレパス暴走で南米奥地からでてこないし、もしかして・

いやいやいや、さすがに忠夫に似てる弟も妹もノーサンキューよ。此処は一つ、忠夫にの孫で手を打ってもらおうかしら。孫が出来れば、さすがにそっちに走らないでしょうし。

「新入生代表、３－Ｂ 御門宗彦。」

？

「・・・エミ、代表つて忠夫じゃないの？」

囁くように聞く私に、エミも答えた。

「あのね、ただでさえファインプレーブツギリなのに、ここで目立つわけにはいかないワケ。」

なるほど。

そういえば御門と言えば、今年の三年の元GS受験組筆頭。このへんの政治バランスって面倒よね。

どうやら周囲も忠夫の出番を舞っていたらしく、違つとわかつてため息が漏れた。

つつか、おまえら、その反応じゃあまずいでよ？

ほらほら、御門君の額に井桁が、ああ、見ていた御門先輩の額にも井桁が……。

うつわ、声も震えてないし笑顔も浮かべてるけど、視線が忠夫に集中してるわよ、周り見なさい、御門君。

「まあ、しかたないワケ」

忠夫から代表を譲られたのは、実際のところ3-Aの鎌田という生徒だったらしいのだが「そういうのって向かないのよね」とかいつて辞退。

仕方なくお鉢が回ってきた、という事態だけで怒り心頭のところ、加えてこの扱いでは納得できまい。

つつか、睨むなら鎌田つつヤツにすりゃあいいじゃない。

「家名ばかりで実力がなくて、親にも見放されていたところで出てきたチャンスなのに、目の前に触れることも出来ない邪魔者が居るとなれば、恨みの一つや二つ……。」

「エミ、一応確認するけど、それって私らにも当てはまるからね？」
「……一応、気づいてるワケ」

そんな私たち、エミの隣で、冥子はホンワカしていた。

「忠夫くん、りりしいわね」

まあ、いいか。

授業はおもしろいし、クラスメイトもおもしろい奴らばかりだった。

みんな霊能はそこそこ開花しているので、いろいろと実習できたり、御札の使い方の基本なんて者もおもしろかった。

つつか、練習用の札ぐらい自分で作ろうよ。

そう言ったところ、なぜか授業が増えた。

聖別された教室が用意されて、硯や聖水やらが準備された。

写経の感じでさらさらっと霊力を込める。

そして外枠に包んでおしまい。

時間にして10分。

「・・・横島、それは誰に習った？」

陰陽寮から出向できている先生が真っ青な顔をしていた。

何か間違ったやり方をしてたのか不安になったのだけれども、聞いてみれば間違っていないとのことだった。

よかったよかった、と安心したのだけれども、出来な内容が問題だという。

「威力が低すぎましたか？」

「こんなの練習用につかえんわ、つよすぎじゃ!!」
「・・・ええ〜?」

おかしいな、厄珍堂で5円札だって買ったたかれた内容なのに。

「・・・その話は本当か? 横島」

「ええ。御札の中身を解析して、一枚5円、十枚で五十円だって言われたんです。でも、和紙代もでないから自分で使っただけでいいから、急に『坊主にはいつも贖罪にしろもらってるから特別引き受けるネ』って、一枚千円で引き受けてくれるって・・・」

「・・・札の授業は中止だ。これからオカルト犯罪に関する授業、そう、無知につけ込む悪徳業者の摘発だ!!」

六道婦人に許可を得た先生、春日先生曰く、僕が書いている札は最低でも10万円符、もしこれがちゃんとした呪符師が作ったという保証書があれば、その十倍に跳ね上がるという。

書き方まで教えてくれた恩人が、そんなひどい人だと思えず、思わず肩を落としていると、春日先生が僕の肩をたたく。

「横島、おまえは単純に騙されていただけだ。逆に、此処までちゃんとした符だが作れる人間に悪いヤツなどいない。」

そんな春日先生の告発と、陰陽寮の襲撃にあい、厄珍堂はしばらく休業を余儀なくされたのだった。

陰陽寮では、最近裏で出回っている霊符に悩まされていた。

出来が悪いわけでも質が悪いわけでもなく、きわめて精巧に出来ていて性能に文句なく、それいて安価に出回っているのだ。

200万円ほどの価値がある符だが、10万ほどで裏取り引きされていけば黙って入られない。

背後関係や流通ルート不明の状態で、いきなり真相が分かってしまふ。

そう、流通もとは霊具ゴロとして有名な「厄珍堂」

そして供給元はなんと「横島忠夫」。

最若年でありながら主席合格したという少年だった。

話を聞いてみれば、自分では五円札だと思って作っていて、そのつもりで厄珍に卸していたというのだ。

警察の調べでも間違いないという確証があり、GS協会の方で保管し見本に展示している5円符と違いないことが確認されている。

が、秘められた霊力はそんなものではない。

一応、対外的な内容があるので控えめに言ったが、どう見積もっても威力は500万、売買は一千万。

装飾で増力すれば二千万クラスになる符であった。

それを一人の少年が五円符の霊装で書き上げるなんてあり得ないいや、あり得るが、この場に置いておいていい才能ではない。

専門の機関で専門の教育を行えば、将来的に国宝クラスの呪具師になることが約束されているといってもいい。

・・・いや、まで。

専門機関は六道学園でもいいじゃないか？

他の霊的事象を押さえれば、幅広い符が作れる下地になる。

私程度のインチキ陰陽師などではなく、一流の陰陽師を派遣させれば、彼の才能は間違いなく延びる。

よし、即座に派遣だ。

上申書なんか書かなくて、彼の生徒名簿とこの符を送れば、派遣は決定することだろう。

「忠夫君ってば、よけいなところに目をつけられたわね。」
理事長室に呼ばれたTER除霊事務所員全員および冥子さんだけ、全員が首を傾げていた。

私も首を傾げると、ざらっと書類が広げられた。
教員として採用するよという各方面からの圧力で、国どころか諸外国、ザンス王国なんと言ったところまである。

職員の履歴を見ていると、正直笑ってしまうほどだった。

「陰陽寮の一流どころに靈的格闘の清水家、USAの心霊調査官にUKの魔法技師、最後に精霊石の加工師。最高の人員じゃない。」

現在のオカルト技術の頂点が集まるともいえる。

「この前ね、ネバダの空軍実験基地で爆発があったんだけど、裏から抗議があったの。」

「それで、分解爆発危険って書いてある「あれ」を分解したってことですよ？」

「そうんだけどね、訴訟を起こすとか契約違反だとか騒ぐんで、今後一切供給しないからそのつもりでっていったら、研究員を派遣させてっていつてきたの。」

もちろん、分解に対する違約金謝罪金込みで。

「陰陽寮は、忠夫君の符をみて、百年に一人の逸材だから、直接指導させるって言うてきてるのよ。」

引き替えに六道経由での符供給を強化するという。

ただ、ザンスについては断れないらしい。

向こうも精霊石の輸出を楯にしているので、六道どころか国自体で拒めない、そんな形らしい。

「全員ね、忠夫君目当てなの。だから、忠夫君が断れば全員ぐうの根も出ないの。だから忠夫君次第なの、というか断ってくれないかしら？」

第七話

いかに六道や国で拒めなくても、本人が拒めばかわり合わないことが出来る。

その子供っぽい拒絶にかけた冥那だったが、その一事にかけるのは冥那らしくない失策だろう。

何しろ家の息子は男前だから。

「六道のおばさま、それって断らないといけないものですか？」

ほら、格好いい。

「僕が餌になると、この学校に世界最高の教員が入るんですよ」

「そればかりじゃ～ないのよ～？」

「それって、情報戦とか呪術的な諜報戦が此処で起きるってことですよね？」

「そうね～それはそれは～一次大戦の～香港かシンガポールか～という勢いかしら～」

「忠夫、皆までいわなくていいわ」

すでに拡散することを決めて時間稼ぎだけを考えている技術を餌に世界中の最新諜報技術を集めて実践する。これは信じられないほどの幸運なのだ。

技術拡散する時間が遅れば遅れるほど、私たちが得られる諜報技術を回収できるし、お互いの技術を切磋琢磨できるというものだ。広大な世界で展開される情報戦を意識することを考えると、自分の陣地でその実習が出来るというのはすばらしいことなのだ。

「で、全校単位でそのことを周知徹底して、諜報戦も単位に入れましよう」

「！！！！！！！」

なんとというか、息子は六道をドコに向かわせたいのやら。

このアイデアが通れば、新旧のGS協会の情報が世界で席卷し、その裏で全く通らない六道の諜報技術に賞賛が集まることになるだろう。

在校生は霊能ばかりではなく、裏社会との正しいつきあい方も学べるといふわけだ。

もちろん取り込まれる人間やつぶされる人間もいるだろう。

まあ、そのへんも計算のうちと割り切れば、そうそう悪い手ではない。

というか情報自体を制御してやれば、これ以上の手はないだろう。

「百合子ちゃん」

「わかってるわ、その辺の企画はうちに任せて。」

「ありがとう、恩に着るわ」

最近の話だが、手ゴマになるような奴らが減っている。

いわゆる霊能ゴロとかGSモドキに力を与え、勘違い暴走させて争乱させるというつまらない計画の一部なんだけど、それにしつってそれなりな霊能がなければ始まらない。

だから、そのへんを調査してるんだけど、これはという奴らが拳って消えた。

消されたというわけではないのだが、いろいろと手のだしにくいところにつれていかれている。

それは国の司法機関だったり研修施設だったり。

噂を集めてみれば、どうやらこの国で発足するオカルトGメンの人員として確保されつつあるそうだ。

あんな、クソミソで橋にも棒にも引つかからないようなクズ霊能者をどう使うのやらわからないけど、コマが足りない事実には変わらない。

どうしたものかと散策と偵察を繰り返していると、妙な子供を見つけた。

中学生程度の年齢ながら、高度に洗練された霊力を持つてる。

いろいろと分析しつつ眺めていると、不意に振り返って私に視線を合わせて見せた。

にっこりほほえむ手招きまでして。

こりゃ、おもしろそうだね。

そう思っって誘い込まれたのは、小さな喫茶店だった。

席を勧められて座り向き合うと、少年はほほえみながらいう。

「竜族の方ですよね？」

おどろいた。

結構擬態に自信があったんだけど、その自信がぐらついた。

「・・・なんだい、結構良い目してるねえ。」

「いえいえ、知人に竜族の人がいて、その人と雰囲気似てたんですよ。」

「・・・人、ねえ？」

なんだか面白くなってきた私だった。

「で、そのおまえさんが、何の用だい？」

「いえ、なんだか熱心にぼくをみてたんで、なにかようがあるのか
そうだんか、とおもいました。」

「おやおや、子供の分際で、この私が相談できるってのかい？ そ
れを引き受ける？ いい根性だねえ。」

「・・・身の程知らずにもほどがある。」

「・・・だったら相談に乗ってもらえるかい？」

「手始めに私は名前を教えた、メデューサ、と。」

「ちよつと小首を傾げた子供は、「本名で？」と聞いてきたので「
神話の時代からね」と答えると、急に涙を流し始めた。」

「声もなく涙を流しつつ、「ご苦労、お察しします」とささやく。」

「どんな苦労をしたと思ってるんだ、と苦笑いだっただけど、ほぼ神
話の全体を知っていることによおどろいた。」

「そして私が追われている理由についても、全くの濡れ衣と謂われ
のない押しつけと叩き切った。」

「というか、感情移入しすぎじゃないかい？」

「そんなことはありません、絶対ありません！！ あなたどころか御
姉妹まで巻き込んだ所行、絶対許せません！！！」

「まいった、昔から女神信仰なんかしてる旧家なんかじゃ聞く感情
だっただけど、こつやつて神話の緩い国で聞く話じゃないので、ちよ
つと目頭にきた。」

「やば、と思っているところで、ハンカチが差し出された。」

「・・・バカな子だね。自分でお使い」

「子供は、いや少年は、滂沱の涙を流していたから。」

その書籍の名前は「女神の冤罪」だった。

神話において、宗教的に魔へおとしめられた神様の实例を含んだ神話の解説本だった。

もちろん、宗教的に貶められたからといって、お互いの神様に罪があるわけではないのだが、そう思う心こそが「魔」を生む土壌なのだと言葉では語られていた。

出版数は始め千単位だったのだが、噂を聞いた人々が自分で読みたいという思いを込め、再販が求められ、出版数を増やしていったが、実のところ増えたのは出版数だけではなかった。

各宗教団体からの抗議や嫌がらせが相次ぎ、三度ほど事務所移転までしたほどだが、それすら格好の宣伝になってしみて、ワイドショーなどで取り上げられるまでになった。

出版社は「七夜出版」という無名の出版社だったが、著者は不明のまま初版から第14版を数える頃になって、とうとう出版元ではなく、監視されて判明した著者のところに抗議がいつてしまった。

陰の著者「横島忠夫」のもとに、神族の出張所であり彼に関わりの深い妙陣山の管理人「小竜姫」が、やってきたのだ。

「忠夫君、勘弁してください。」

憔悴した表情で言う小竜姫様だったけど、僕としてはにこやかにほほえむ。

「勘弁もなにも、なにかしましたか？」

「解ってるんですよ？ あの本の主眼が『彼女』だってことは。」
「あはははは、わかりますかあ〜やっぱり〜。」
「・・・確かに神族のブラックリストが片手落ちだったのは認めます。即殺リストの大半が謀略でした、それも認めます。」

認めてくれるのはうれしいですね〜と言っが、涙目でにらみ返された。

「だから、これは撤回してくれませんかあ？」

封も切られていない書状の名は「絶縁状」。

直接メデューサの件で相談に行ったときに、なんの説明も聞かずに切り結ぼうとトビだそうとしたので、たたきつけた物だった。

もちろん、いち人間の、たかが修行者のコレに効力があるとは思えなかったけど、それなりに検討をしてくれたようだった。

が、検討された内容をヒヤクメさんから伝え聞いて、ちよつと怒りましたよ、ええ。

絶対正義の立場で仕方ないとは思っけど、海の神と戦いの神、ちと中世の立ちぐさつた脳味噌をませたるか。

そんなわけで、六道のおばさまの力もかりて、出版したわけだけど、思いの外反響があり「おばさま〜ほくほくなのよ〜」とか喜んでもらえた。

それはさておき。

「小竜姫様、じゃあ、メデューサさんのブラックリストは？」
「・・・破棄させていただきました。私も今後、情報には注意します。」

よかった、と心底安心できた。

だから僕はその絶縁状の封を開ける。
引き出された符だから一人の竜族を呼び戻す。

「もう大丈夫ですよ、メデューサさん」

呼び戻された彼女は、ずいぶんとはつが悪そうな顔をしていた。

「・・・忠夫、サンキュ」

そう言っつて、びっくりしたままの小竜姫様に頭を下げた。

「あんたがすぐに封を切ってくれれば、自力で出ていって首を差し出すつもりだった。」

そう言われては何もいえない小竜姫様だったけど、不意に真っ赤になつてメデューサさんにささやく。

それを聞いたメデューサさんは視線を逸らしながら小声で「スマン、聞こえてた」と言っつてしまふ。

そこで起きた大騒ぎは、事務所の施設を更新しなくちゃいけないほどの騒ぎであつたと記しておく。

すでに開業している異色の中学生「横島忠夫」は、俺の永遠のライバルだ。

過去、ミニ四駆においてタミヤカップ三年連続優勝を果たしつつも身を引いたのは、己にかなう才能はなしと慢心したためと言われていたけれど、実のところは霊症とその回復が必要だったからと聞かされてうなずくしかなかった。

そんな横島は、その回復によって強い霊力を得てしまったため、あの唐巢神父の元で修行し、そして先日GS試験に合格、加えて開業にこぎ着けたそうだ。

ヤツ自身の能力は既に師匠の神父が認めるところで、すぐに開業許可を与えたという。

まあ、俺としてもライバルが高く評価されるのはうれしいし、それを乗り越えるのが自分だと思えば鼻も高い。

が、こいつの嫌いなところがある。

それは……

「忠夫、ちょっとまつワケ。エリ、エリ！」

「忠夫、ネクタイが曲がつてるわ。あんたはうちの所長なんっだから、しっかりしてくれないとコツチが恥をかくのよ」

「忠夫君、またお仕事手伝ってね。」

と三人もの美女に囲まれる生活をしてたり、

「忠夫君、ちょっとよってきなさいよ」

「ただおちゃん、あそぼー」

と周辺の女性、子供から大人まで大人気なところだ。

顔の作りがいいわけじゃないし、服装だって制服でおれと変わらない。

身長だって変わらないし、体は俺の方が鍛えてる。

……ちくしょう、なんで俺がだめで、あいつがもてるんだ？

……憎しみで呪えるのなら……。

そんな俺の頭をはたく人。

「これこれ、バカなコトかんがえんじゃないよ？」

現れたのはスーツ姿のワイルドな美女。

「……ママににてる……」

「あ、メデューサさん。スーツお似合いですよ？」

「……ああん？ 自分で押しつけといて、似合うもくそもないだろっ？」

「いえいえ、似合うと思っておすすめしただけです。ただ、ここまでハマるとは。いけてます！！」

「……ほんとうにバカだねえ、忠夫は」

「……えー、何が起きてるのかわからねーけどおこったことだけ言っぜ。」

すんげー美人が現れて、ママに似てると思って惚れそうになったのに、なぜか既に横島のことを名前で呼んでいて、服装をほめられたらうれしそうに頬を染めながら憎まれ口をたたいているんだ。

「……ワケわかんねえ。」

「……ユツキー、口から出てる出てる。」

「だったら教える！ この美人の名前と出身と身長と体重とスリーサイズと……」

気づけば俺の首筋に刃物が……。

「まあ、忠夫の友達だから一部は答えてやるけど、セクハラは死をまねくよ？」

「イエス、ママ！！！！」

彼女への疑問は、その日のホームルームであかされた。

彼女の名前は「メデューサ」。

元神界の指名手配犯だったが、その罪状自体がでっち上げだったことは既に有名だ。

文字嫌いの俺ですら「女神の冤罪」は読んだぐらいだから。

メデューサさんの話では、姉妹も同様に指名手配はとかれていて、さすがに神界や魔界では居づらいので、地中海の小島で生活しているという。

それはさておき、メデューサさん、なんと1-Aの担任として就職したそうだ。

美人万歳、ボンキュツボン万歳！！

俺自身は意識してなかったけど、自分がおっぱい星人であることが自覚できた瞬間だった。

とはいえ、ちよつとした疑問。

「先生、忠夫とはどういう関係ですか？」

「・・・おやおや、直球だねえ。」

うれしそうな笑顔と、その言葉を止めようとした横島を暮らす全員で止めると、それを待っていたかのように口を開いた。

「忠夫にやあ、来世の先まで尽くさにかえせねえ恩ができてね。

大概の無理なら聞いてやるつもり、そんな関係だよ」

クラス中静寂。

ただ一人の罪人に視線を送ると、既にもぬけの殻。

「追え、地の果てまで追え！！ やつのフラグを折れ、やつのゾーンをつぶせ、ヤツのフェロモンを絶て、俺たちの希望を取り戻せえ

ええ！！！！

「「「「「おおおお！！！！！！」」」」」

溢れんばかりの霊波を放ちつつ走る俺たちは狩人。

無限の夢を追い続けてやるう！

竜族が教員として雇われる学校なんてあり得るのだろうか？

もちろん、現役で神職にある龍神ではなく、落ちた女神として扱われた経歴を持つ龍神だったが。

しかしその名も名高き（悪名高き？）「メデューサ」ともなれば、霊格もずば抜けており、霊的な視覚が発達していればいるほど見る事ができない。

陰陽寮からも調査命令がきているが、どうこうできるはずもない。周囲から天才だ何だとはやし立てられていても、せいぜい陰陽師としての才能だ。

神に届くほどであっても神を越えるほどではないのだ。思いの外高い壁とハードルを感じて、男は、土御門 友屋はため息をついた。

教師とは名ばかりの各方面尾スパイを大量に引き入れて何事かと思っただが、教員に龍神が居るとなると身動き一つとれるものではない。

彼女自身は「武」に突出した武神である自己紹介を受けているが、こちらの透視も遠視も受け付けない霊格の高さだけでも厄介なのに、「恩があるから」という理由で「あの」横島忠夫の守護を宣言して居るもの厄介だった。

このほどの「裏社会諜報員さん全員集合スペシャル」のような事態の諜報対象は、何をおいても「横島忠夫」なのだから。

「味方の秘密を敵が知る」とは良く言ったものだが、彼自身の情報に関してはいつさい不明、能力についても推測の域を出ないと言う怪しさで、唯一突出していることと言えば、あの三霊具の考案開発者だということだけだろう。

音に聞こえし三霊具、「美智恵おねさんの聖なる杖」「冥那ちやんの愛の盾」「百合子さんの恋の罌」と、名前はフザケているがしか思えないものだったが、威力は凄まじい物だった。

杖と称されたそれは、一次大戦中のドイツ系手榴弾のような外観で、使い方も全く同じだった。

が、そこで起きる結果は違う。爆発的に広がる浄化された霊力と霊光。それだけで意志ある悪霊であろうと意志なき悪霊であろうと浄化されるという物だった。

符換算で20000万相当。

これが販売予定価格一万円だといふのだから価格破壊も良いところだ。

あまりのことに陰陽寮は恥も外聞もない抗議に出たが、使用部品とその概念を提示され、未解明技術を使うことにより再現できる可能性があると報告書まで身内からあがってきてしまえばグウの根も出ない。

他の霊具についても格安すぎて怪しいと言うことで、試供品を使って出た結論は・・・「このままでは商売あがったり」だった。

これらの作成に関して最も核心ともいえる秘密を握っているのが「横島忠夫」であることは誰もが掴んでいるが、その先が全く延びない。

かの外資借金大国も無茶をして分解調査などするものだから逆賠

償をふっかけられて汲々としているのが現状だ。

ニユースでは「原因不明」とされているが、あれが「杖」の分解の結果であることは既に業界全体の知るところだ。

「……またく、ガードが堅くて本質すら見えない現状で、どうしようと……」

「……失礼します。」

陰陽教員室に飛び込んで、扉を閉めたのは今まさに攻略を考えていた「横島忠夫」。

そんな彼は、懐からマジックインキのような物を出して扉に何かを書き出した。

「いや、それはこの部屋の人間なら見て解るもの、穩行符の簡易呪式。」

「それをマジックで、直接扉に書き込む？」

「なにしてんの？」

「……ああ、これは、靈波に感応しやすいインクで呪を書いて、簡単な符の代わりにしてんです。」

「ふつとかるく靈波を流すと、穩行が完成する。」

「……横島君、それはどこで買ったんだね？」

「……買ってませんよ？」

「も、も、もしかして、君が作ったのかい？」

「ええ、失敗品ですが」

「失敗？　なんで？」

「こつやって、絶えず霊波を放つてないと働かないんですよ、これ」
たぶん彼は、簡易敵に符を作れる物を作るつもりだったのだろう。
しかし、このインクの使い道はそっちじゃない、そっちじゃない
んだ！

逆に考えてみたまえ。

常に霊波の流れている物に書き込めば、その効力は何倍にもなる
し、能力を付加もできるんだ！！

「？」

たとえば、神通棍に追記すれば効果を追加できるし、霊具に書き
込めば効果を増力できる。

「ああ、そうか、ヒーリングに併用すれば・・・」

「効果は倍増だ！！」

「・・・うっわー、さすが先生。目の付けどころが違うなあ・・・」

思わず、陰陽関係の教師で頭をつきあわせて、その効果や能力の
追加などを研究し始めてしまった。

火精や水精の召還呪符を細かく手の甲に書き込んで霊波を流した
ところ、瞬間的に発現したのは驚いたし、ある程度簡易敵に書き込
んでも発現できた。

では、どこまで簡易化できるかとか、属性にくくられた呪符は再
現できるかとか、それはそれはもう楽しすぎて、気付けば午前中の
授業すべてを放棄しており、陰陽教師全員が理事長の呼び出しを食
らっていた。

ともあれ、今回の簡易呪符作成インキはある程度能力のある者が

使えば爆発的な効果を得られるが、使い方を間違えば大いなる破滅が起きるものとして有名になったのだった。

息子、忠夫はまた奇妙な縁を取り持ってきた。

六道の校内に潜入した陰陽寮の先兵を取り込んだというのだ。

詳しく聞いたところ、お遊びで作ったアイテムが好評で、是非とも商品化に協力させてほしいと言うという。

研究結果やその手引き書などは六道で出版してもかまわないから是非に、というのだ。

この出版不況の中で根強い力を持つ六道を使いたいという話はよく聞くが、出版することが初めから成功すると確信している彼らの言葉にもなかなか引つかかる者があるので、夫と共に調べてみると、
「なるわであるわ、信じられないほどの情報と向こうから供給される宣伝文句。」

というか、すでに業界的の噂になっていた。

ということは、冥那も了承していることなのだろう。

「やっぱり、忠夫ちゃんは、六道をおとすつもりだわ」

すでに目をウルウルさせている冥那をみるまでもなかった。

この新製品は名称未定だが、呪術回路を自分の体に書き込んで、詠唱や符の代わりに使うと言うものだそう。

直接的な恩恵ははかりしれず、その効果は絶大とか。

冥子ちゃんなど、仕事前に背中へ「鎮静符」を書き込まれること
によって「プツン」が激減しているという。

その事だけでも冥那は感激しているのだけど、それ以上に得られる利益に泣いていた。

符やオカルトで盤石の地位を占めていた六道に、忠夫が持ち込ん

だ「それ」は、今まで無かった新分野という世界を広め、その協力者として陰陽寮が自ら進み出てきたのだ。

六道傘下にはいる、という恭順ではないところもいいのだろう。

第八話（前書き）

えーただおくん、やりたいほうだいですw

第八話

そう、それは必須のこと。

大組織というものは、自浄作用のある状態で切磋琢磨しなければならぬのだから。

「ところで、名前はどつするの？」

「むこうが、できれば、命名はさせてほしいですって」

まあ、いいんじゃないだろうか。

忠夫に任せると、また書類にするのもイヤになる名前を付けるに違いないから。

久しぶりに放課後に仕事がないので、雪之丞と寄り道しつつ帰っていたんだけど、怪しい事になった。

周囲の風景はいつも通りなんだけど、急に人影が周囲からいなくなつた。

ここにいるのは雪之丞と僕だけだつた。

「（ユキ、これって・・・）」

「（ああ、結界だな。）」

小声で囁きあう僕らの目の前に、ちょっと線の細い感じの男性が

現れた。

銀髪の偉丈夫、線の細さだけだと女性ではないかと感じさせる人だった。

「（いや、人じゃないか・・・）」

「（やっぱりそうか・・・）」

ぐっと靈気を込める雪之丞の脇を肘でつつく。

「（やめとけって、パワー比はアリー一匹とティラノサウルスだぞ）」

「（げ、なんだよ、そのむちゃっぷりは・・・）」

一気にやる気を減退させた雪之丞だったけど、それで正解。

目算しても絶対に勝てないと言うか、瞬殺されていない時点の幸運を謳歌したい状態なので、よけいな刺激はしたくないのだった。

「上位の神魔とお見受けしますが、何かご用ですか？」

僕の一言に、彼は感心したように顔をほころばせる。

「ふむ、私の部下を籠絡したという少年に直接会いに来たのだよ、横島忠夫君」

「えっと、もしかして、メデューサさんですか？」

「ふふふ、そうだよ、うん。彼女は結構有能だったんだがね、いつの間にか指名手配は消されているわ、人界に受け入れられているわ、何がおこっているのかすらわからなかったよ」

いやはや、こまったこまった、と苦笑いのその人。

というか、上司だから魔族、かな？

で、神魔。

「・・・まさか、魔神？」

「・・・まあ、彼女のように落とされた者は、世界認識が変われば立場が変わるものだ。私もそう認識していたし、実際にそうなっているいろいと確信したよ。」

「なんとというか、高位の存在ってよりも、まるで逃亡に疲れたモノに思えた。」

「だから思わず聞いてしまった。」

「あなたも、ですか？」

「・・・！」

瞬間、彼の表情が「笑顔」に戻った。

「・・・今の神魔の多くは、現在の善悪の縮図だ。一神教の台頭とそれ以外の魔族化は既に既存の枠組みと言っていいだろう。」

「言っつていい、とはいえ認められるモノではない、のだろう。」

彼の瞳がそう言っている。

目は口ほどにモノを言う。

「だけど僕は口を開いた。」

「・・・枠組みを変えることは不可能かもしれませんが、仕組みを変えることはできる、のでは？」

「・・・そうだな、人が、人々がそう望んでくれれば、な。」

「人が望む限り、か。」

「たしかにメデューサさんはそう言う方向でひっくり返したけど、ほかの魔族の人に有効かどうかはわからない。」

「おい、横島。・・・難しすぎてわからんぞ」

「・・・あー、つまりな、どんなにこの人が悪いことをしてなくても、世界中で「こいつは悪い奴」って役目を押しつけられたら逃げられないって話だよ。」

「・・・そいつは陰湿ないじめだな」

「その上さ、昔はみんなから良い人ってあがられてたって過去があると、心境複雑だって話だと思うよ」

そんな風に言いつつ彼をみると、苦笑いだった。

彼の浮かべた左右非対称のその笑顔をみて、すごい違和感を感じた。

まるで左右別人、アシユラ 爵みたいだ、と。

「・・・なにかな？ 横島君。」

すごく不自然に思えたので、すっと「そこ」に手を伸ばした瞬間、音もなく衝撃もない白い空間に飲み込まれた。

目の前で起こっていたのに理解できない現象ってやつがある。

永遠のライバル、横島忠夫そのものがそうだが、その横島が起こした現象も理解の上限を越えていた。

やつが、正面の魔族に向かって手をさしのべた瞬間、奴をふくんだ半径3mほどの光の柱に飲み込まれたのだ。

衝撃も音もない光の柱。

俺はその時、神様を数えるのに使う「柱」って単位の意味の正しさを感じていた。

絶望的な力を感じて、腰を抜かすことも後ずさることもできな

った俺だったが、目をそらすことだけはしなかった。
この瞬間を見ておかなければ鈍ないことだけはわかったから。

「少年、大丈夫か!!」

気づけば結界が壊れていた。

突然現れた光の柱に、警官隊が輪で囲む。

「さわるな!! これは圧倒的な神話級の霊格だ!!」

叫びつつ、六道の生徒手帳を見せると、責任者らしい男たちが付いてくる。

「……すまんが話だけでも聞かせてくれ。これはなんだ？」

「神で言えば天使長クラス、魔で言えば魔王クラスの霊格が、おれのダチに会いに来た。で、この騒ぎだ。」

「……それは誰だね？」

「相手は知らん。ダチは横島忠夫だ」

息をのむ気配。

神魔が、ただのGSに会いに来たというのだから驚くだろう。

「で、その横島君は？」

「あの光に呑み込まれた」

息をのむ人々。

とはいえ、この光の前では拳銃なんか無駄。

さわれば塩の柱決定。

どうやっても何もできない。

そんな絶望間の中、突如光が二本になった。
いや、分かれた。

光の柱と黒い光の柱に。

光の柱はゆっくりと細くなって消え、黒い光の柱もゆっくりと細くなって消えた。

残ったのは一人の男。

先ほどの差し出した手を伸ばしたままの姿勢で気絶していた。

デタントという行為が進んでいる。

神魔の協調路線など愚かしいとは思うけど、無為な闘争は人々の安寧を奪うものだ。

ならばデタントも悪くはないだろう。

そう思うのは、神族、それも人界に近い存在の竜族だからだろうことは自覚がある。

人界に多くの弟子の血筋を持つ私などは、子供を多く抱える母のようなもの。

守りたい世界だと思つ。

そんな私にとって、最近一番のお気に入り弟子と言えば「忠夫君」だろう。

幼いながらも努力と修行をかくことのない愛弟子。

霊力は人としては高く、そしてその発想力は好ましいものだった。そんな彼が、神話という世界の枠組みに戦いを挑んだことは神界魔界を問わず激震が走り、その決意を表すために私に叩きつけた絶縁状は、思い出すだけで倒れるほどに憔悴してしまう。

もちろん、絶縁は私の立場を守るためだったのはわかるけど、それでもあんなことは二度とやめてほしいと泣いてしまった。

正直に言えば、二度とあんなことはしないと行ってくれたその目

を見てトキメいてしまいました。

ともあれ、忠夫君が巻き起こす騒動を、ヒヤクメとともに見ていたのだけれども、見ていて後悔した。

心底見なければよかったと思い知らされた。

なんと忠夫君、魔神を分解してしまったのだ。

相手は魔界の大公爵、アシユタロト。

墮天前の名は「女神 イシュタル」。

古代メソポタミアの女神にして知識と芳醇の女神。

魔神の概念とともに魔神の体に封じられたそれを、するつと分けてしまったのだ。

現れたるは「女神」と「真魔神」。

ハルマゲドンか、と思ったが、その場で握手して天界と魔界に転移していった。

人界もパニックだろうけど、こっちだって負けてない。

女神を内包することにより弱体化させられていたアシユタロトが、神話級の力を持って魔界に復活したのだから。

パワーバランスが崩れた魔界では、やれ下克上だハルマゲドンだと大騒ぎになったのだが、戻ったアシユタロトはにこやかに宣言。

「我はデタント派。サツちゃんばんざーい」

魔界二大巨頭が手を組んだことにより、魔界は非常に静かにならざる得なくなった

では天界はというと、こっちも大騒ぎ。

いにしえの女神が、太古の力をそのままに天界に現れたのだから。二千年ばかりの代表者など目じゃない神格だったが、女神はにこ

やかに宣言する。

「デタント万歳。きーくんを支持するわ。」

自ら補佐役を宣言して、にこやかにほほえむ女神。

天界の天使たちも静かにならざる得なかった。

で、一部始終を見ていた妙神山にはあらゆる線からの問い合わせが殺到し、しばしの睡眠不足を味あわされることとなった。

誰もがその瞬間的な映像記録がほしいというお願い尽きだった。

先日の騒ぎのせいで取り調べが連日行われたんだけど、結果はでなかった。

というか、バチカンから釈放要求がきて、そのまま流れるように釈放された。

テレビによる取材攻勢が三日ほどつづいたけど、「コジテレビ」の局長と直談判して、会見一発で済ましてもらったのが成功だったと思う。

事務所の前に張り付いていた報道の人たちも消え、やっと静かな時間が過ごせるなーと思っっているところで、お客さん登場だった。

「芦原祐太郎と申し上げます。」

「イシユウタリーアーナと申し上げますわ」

ご結婚を控えた二人が購入した別荘が、地脈の悪い土地だったそう、で、どうにかしたいと考えたそう。

が、地脈をいじるとなると相当な費用を負担せざる得ないが、さすがにそこまでの予算がない。

どうしたものかと思っているところで、僕の取材されているテレビを見て思ったそうだ。

「人とそれ以外のものたちとの架け橋となると言うあなたならば、何とかしてくれるのではないか、と」

つまり人のGSならば高いが、それ以外の力を借りられれば安くすむのではないか、という訳らしい。

存外計算高い、と思いつつもそう言うものかもしれないとも思う。エミねえや令子さんは、苦笑いながら受け入れている顔。

地脈調整は、神父のところでも結構やってるし、経験がないわけではない。

「で、どのような地脈を？」

田舎と言うには言葉が足りない山間の村。

その人骨温泉という温泉宿をそのまま買いつたというのが剛毅ならば、温泉宿の人員をそのまま従業員として雇い、別荘の維持管理をする人員として雇うのもすごすぎた。

地域に落とされた現金は相当数だったらしく、反対も何も出なかったらしい。

すごい金蔓、じゃなくてコネじゃなくて・・・えーっと。

ともあれ、この温泉自体地脈効果があるんだけど、これ以上に何の不満があるのか、と聞いてみれば、実はこの地脈効果は、大きな地脈が封じられている事により溢れ出たおこぼれ程度のものらしい。実際に必要な地脈が封じられているせいで、本来の価値が激減し

ていると芦原氏は言う。

実際に調べてみると、確かにそう言う流れがあり、そのせき止めている堤を壊してしまうと、温泉の効能から地脈が失われることが必至だった。

ではどうするか？

忠夫が示した手法は、面白いものだった。

堤の規模を拡大して、地脈のプールを作ることにより、温泉はあらか町全体を囲うというものだった。

そして下流方面の地脈が異常にならない程度にバイパスを通すというものだった。

これにより、一部の、ほんの一部の地域の地脈は彼はてるが、山の地核の一部だけなので問題なからうという話。

妙神山にも問い合わせたが、問題ないという回答がきた、というかヒヤクメさまがわざわざ見に来てくれた。

地核改造と地脈改造という霊的工事としては大改造ともいえる儀式の見学に、六道や美神、唐巢神父や協会の歴々が見学に来ている。ヒヤクメさまがきたせいか、小竜姫様やよく知らない神様たちもきているらしく、村の人口密度は過去最高になっているという。

儀式参加をして名を売ろうとするGSも多かったけど、芦原さんがガンとして受け入れなかった。

聞けば、最初にこの話を協会に持っていったとき、鼻で笑われたとか。

本当に、バカというかなんというか。

ともあれ、私たちも最初は無茶な話だと思ったけど、実際にやってみればスムーズに進み、儀式は最後の一步というところまでできた。明日になれば完成する、そんな日に忠夫は変な幽霊をつれてきた。

現場事務所は重い沈黙に包まれていた。

今回の霊的工事の根幹に関わる問題が発覚したからだ。

まず、今回強化した堤の正体。

それはある植物妖怪へエネルギーを与えないために築かれたものだったというもの。

そして忠夫が連れてきた幽霊は、その妖怪を倒すための最終手段として準備された霊体砲弾であったこと。

現在、堤の強化により枯死しかけている妖怪がいること。

そして忠夫が「人とそれ以外との架け橋」を目指し看板を掲げていること。

では、対話すればいいのかといえそうではない。

GS協会の念話師によれば、すでにその妖怪は人間憎しで凝り固まっており、転生してもその思いに駆られるレベルだろうという。

ヒヤクメ様の見解も同じで、カルマを落として輪廻させないと、妖怪から墮天する事は間違いないそうだ。

墮天自体を悪とするものではないけど、自らの怒りや憎しみで墮天はしてほしくない、と忠夫は語る。

「我々の考えなしの依頼で迷惑をかける」

「ごめんなさいねえ、忠夫ちゃん」

芦原夫妻は謝ってくれるが、実際のところ計画をそのまま進めても、大きな問題はない。

妖怪は枯死、町は繁栄、どこにも問題はない。

これはGS協会の見解だ。

が、仕事を請け負った私たちは、忠夫は違う。

隣の幽霊とともにもうヒト仕事をする事を決意した。

式典で飯食い放題だつて聞いてやってきてみれば、うちのクラス全員で山登りとなった。

つつか、なんで山登りよ、と聞いてみると・・・

「三百年も人柱で幽霊やつてる美少女がいる。その子を助けたい。手を貸してくれ、同志！！」

・・・あたりめーだろ、同志。

美少女は世界の宝だ。

誰と誰がつきあつていても、誰に心奪われていても、美少女であるならそれは助けるに値する、そう言うものだ。

「そうだろう、皆の衆！！」

「「「「「おおおおおおお！！！！」」」」

俺はこのクラスが大好きだ、そう思った瞬間だった。

横島の話だと、今回の協力如何では村の温泉宿の宿泊自由権を人数分くれるという。

年間最大一月分つて、どんだけだよ！！

つつか、これだけの地脈に溢れる温泉地、同業者の羨望の的だ。

さらに気合いが入るってもんだ！！

人は城、人は石垣とはよく言ったもので、今回の作戦の要は忠夫のクラスメイトだった。

霊能を十分に持って訓練された彼らが、地脈の堤の導水管になり、妖怪の直上に地力を流す。

そこに根を伸ばし現れた妖怪と交渉するというのが計画の大本だ。

説得できればよし、出来なくても人の導水管がおそわれれば、一気に地脈が枯れてしまう。

かなり綱渡りな話だったけど、妖怪は憎しみを捨てることを拒絶した。

人を恨みながら死ぬことを選んだという。

ただ、その妖怪は一つの種を残した。

その種のは宿業を記憶させていないという。

自分を止めたくば、種子を人よりに育てればいい。

そう言っただけ果てたという。

忠夫のクラスメイトは我先に種子を育てると言い張ったが、割って入ったのは六道夫人。

この種子は六道で責任を持って育てる、と。

「責任？ 娘の育成に失敗してて？」

ずばつと切り込んだのは百合子さん。

すごい攻防の上、種子はなんと忠夫が預かることになった。

堤の完成式典の後、もう一つの儀式が始まる。

幽霊、おキ又ちゃんの復活のための儀式だった。

彼女は確かに人柱だったが、彼女の遺体自体は霊的な処置を施され任務が終われば生き返る事が出来るようになっていたそうだ。

が、その伝承をしていた氷室神社でも長い時間のせいで失伝しており、方法がわからなかった。

そんなところで、術者本人のアストラルコピーが現れ、いろいろと話を聞くうちに、大規模な霊力と大規模な地脈効果で反魂の術が完成することがわかった。

地脈は十分だった。

堤の拡大の影響で必要以上の地脈が貯まっていたから。

あとの大規模霊力にも心当たりがあった。

「美少女を助けるぞ!!!」

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』」

バカだが純粋な霊力が確保できた。

全力で純粋でバカだけどいい奴らばかりの仲間。

うれしすぎて涙が出そうだ。

少女は三百年のくびきを離れよみがえる。

バカみたいな現象だったけど、その原動力が美少女を助けるという煩惱まみれのバカばかりだったせいで、その重要性は意外に伝わることはなかった。

そんな様子を最後まで見た芦原夫妻は、にこやかな笑みでその地を去った。

他の神族とともに。

「そっか、あれが『アレ』だったのか。」

学食で昼飯を食う俺たち。

「さすがにビビった。」

あのときの仲間が一団で集まると、結構な注目を浴びる。

「なんつうか、すげえ話だよな」

主語というか詳細が話せないのでもこんな話になるけど、実施のところは話し合う意味すら持たない。

なにしろ、ご本人たちからあの場にいた人々に説明があったから。あの仕事や報酬自体が、デタントへの貢献をした横島忠夫への報酬の一部であり、神族「女神イシユタル」および「魔神アシユタロス」の名において神魔不戦の地として人骨温泉改め神在温泉が認定されたのだ。

霊脈的にも妙神山に次ぐパワースポットとして注目を集め、多くの霊能者やアヤカシ、神魔が訪れる土地となった。

もちろん、表の世界には漏れ伝わらない話だけど、主一霧裏の六道学園では有名で、宿泊権利をもつうちのクラスは注目されていた。

いろいろな意味で。

まあ、もててる、とは言いがたいけど、彼らだってバカじゃないので、軽い交流を楽しむ程度ですませている。

なにしろ、もてるのはいいとして、この権利を失うのは霊能者として痛すぎるから。

こんな学校に入っているからには、霊能者として生きていくつもり満点であるわけで、ちょっとした火遊びでそれを失いたくはないというのが本心だった。

むろん、同行者ありで利用したこともある。

自分の両親が元GSだったが、除霊事故でチャクラを乱されてしまい、一般生活すら危うい状態になっているという話とか、生まれついてチャクラ閉じているために、名家の重圧につぶされかかっている弟がいるとか。

そんな話を聞きつけると、ゆるりと誘拐して二・三日温泉に拉致するなんてことを繰り返している。

ばかばかしい話だ。

表に出せばいくらでも金が取れる話だし、横島の事務所を通せば全く問題のない話なのだ。

が、それでは意味がない、と彼らは思う。

そう言うことで手に入れた権利じゃないから、と。

それを聞きつけた六道夫人は、教員たちに「おとがめなし」を徹底させた。

大人になれば青臭すぎて虫ずが走るような行為だが、彼らが行うと実に気持ちのいい話に聞こえてくる。

そんな話を聞くことは、彼女達は好きだったから。

第八話（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

神代製のアシユ様は、いろいろと魔改造がされていますが、こんどは紳魔分離なんていう全く設定無視なことをしています。

どこかで見た展開だなんていう話しがあったらご指摘願います。私も数多く読んでるので、影響されてると思いますから。

第九話

『タダオ、理事長室まできな』

実に端的な放送が校内に響いた。

発信者は疑うまでもなくメデューサ。

最近機嫌が悪いのは、一度も某温泉に誘っていないせいだという噂だ。

クラスで誘ったときもあるんだけど、機嫌は回復せず。

やっぱ、直接誘わないといけないのかな？

その辺はそのへんということで、はいはいと理事長室にいつてみると、そこにはメデューサ先生と理事長こと六道夫人とお袋がいた。

「あのね〜、忠夫ちゃ〜ん。おばさん相談があるの〜」

この相談って奴を正面から信じるほどつき合いは短くない。

つつか、お袋と六道夫人が並んでいるんだから、結果は自ずと知れるわけで。

あきらめにも近い思いの中、切り出されたのは本当に相談だった。

「あのね〜、今度の合同除霊実習で〜忠夫ちゃんの事務所の力を借りたいの〜」

まあなんと云うか、神在温泉で全校実習を実施したいという話だった。

さすがに神魔不戦の地、実習もくそもないでしょう？

霊どころか雑霊すらないんですよ、あそこ。

そう、地脈の天地でありながら、神魔がウヨウヨしているせいでちよっとした霊格程度では存在し続けられないのだ。

「ん〜、除霊実習とは言ったけど〜、どちらかというところ神魔の方々を肌で体感してほしいというか〜・・・」
「まあ、簡単に言えば、高位の神霊を直接体感して、今後の自分について考えましようってのはなしよ。」

なるほど、理屈はわかる、わかるけど。

でも、全校は無理っしょ。

「そこは息子、お前の交渉力にかかっている。」

「丸投げかよ!!!」

「あのねえ、私はやれっていつてるのよ?」

「今までの実習はどうなったんだよ!」

「そっちは三流プロに頼んでるわ」

・・・プロでも三流。

で、こっちは道具がそろつと一流半。

・・・いける?

「じゃ、交換条件」

「あたし相手に交渉? おもしろいじゃない」

午後の昼休みが終わっても帰ってこなかった横島がSHRで帰ってきた。

本人曰く大勝利だとか。

何事かと言えば、そのへんは先生にゆずると一歩引く。

「あー、この小僧のせいで、全校実習の内容が書き変わった」

当初予定では神在温泉で合宿しつつ神魔交流という流れだったらしい。

それって、女子部とも交流だろ、いけてるじゃないか！　と騒いだの持つかのま。

その内容が書き変わったんだから。

「どう変わったかつつと……」

言葉を濁して、ニヤリと笑うメデューサ先生。

「高等部が行っていた臨海除霊実習を、中等部で引き受けることになった」

起きたのは爆発的な歓喜。

絶叫の喜び。

よくやったと横島を叩くクラスメート。

そんな中で俺は聞く。

「さすがに霊能に目覚めてない奴まで引つ張り出せねーぜ？」

「さすが、雪之丞。」

そついいなら横島が一本のペンを出す。

隣にいた矢神、未だ霊能に目覚めていない友人の手の甲に何かを書いた。

「矢神っち、霊波出してみ？」

「？」

いわれるままに霊波をだすと、矢神の手の中に炎が生まれた。
どよめく教室。

「これは陰陽寮から発売される試供品で、これを使えば簡単な霊能
や霊具替わりになるんだ。」

きらめく瞳が集中する。

「実習は来月だし、それまでみんなで基礎的な霊力の増強をするこ
とにして、がんがんいこうぜ」

ぐっと拳を握る横島に、みんなが手を重ねる。

「正式な呪を書き込めば効率も上がるよな？」

「絶対的な霊力量もそうだけど、制御だろ、やっぱ。」

「逆に直接霊気を込められるんだから、呪法の部分だけ抜き出せね
ーか？」

「制御用の仮想式神なんか仕込めばよくな？」

「耐水だろ、もしくは防水。」

まきあがる意見とアイデア。

相手の意見をつぶさぬように、自分の意見でつぶれぬように、前
向きに。

「な、これから時間あるか？」

「ちよつと集まるうぜー！」

そんな彼らに、陰陽先生たちの先行研究書を渡すとさらに盛り上
がる。

「さすがだぜ、プロは違う」

「いや、この発想はなかった」

「うお、すげー、神卸まで言及してんじゃん！」

大いに盛り上がる1-Aだったが、実のところ他の中等部は盛り下がったクラスが多いと聞く。

多くの生徒は除霊自体を幼い頃に体験しており、除霊実習自体をなめていたから。

さらにいえば、自分の霊能に自信を持っており、他の霊具など興味もないということらしい。

それぐらいなら、神在温泉に行った方が有益だとすら思っていたそうだ。

が、その自信こそが落とし穴だった。

絶叫と絶望が声になって響き渡る。

符術で结界を張っていた三年が吹っ飛び、中堅にいた生徒も吹っ飛ばされた。

前衛全てが飛ばされた所為で、むき出しになった中堅が軋みを拳げている。

戦線中央に控えた名家連合崩壊により、両翼の弱小名家連合が殺到する。

功をあせった行為だったが、自らの霊力以外に頼るものが無いくせに没落した家名に何お力があるかとばかりに崩壊していった。

「おーい、やっぱ全滅っばいぞ」

双眼鏡を構えた緋出水ひじずみの言葉に、各学年のAクラスが肩を竦める。取り合えず、一年の人間結界符の輪を作って侵攻範囲を狭める。二年の長距離攻撃可能勢で、結界のスキマから数を減らす。一年の人間結界の輪を切り替えつつ、前線に押し出した人間結界によって負傷者收容をして、有志による前衛部隊を投入。これが夜半までの作戦だ。

「おっし、じゃあいつちよやるか!!」

襷掛けをする雪乃丞にみんなが続く。

襷には女子部の皆が念糸で縫ってくれた靈力の増幅符が縫いこんである。

気合が入らないわけが無い。

「善戦した勇者には、女子部のヒーリングが待ってるぞ!!」

「oooooooooooo!!」

「逃げた抜け作には、鎌谷先輩の抱擁が待ってるからな!!」

「oooooooooooooooooooo」

「生き残って、女子部といちゃいちゃすんぞ!!」

「oooooooooooooooooooo!!」

「突貫!!」

「oooooooo!!」

靈能を持たないが靈気を操れる一年が、全身に靈符を書き込まれた状態でダッシュする。

人の鎖の状態で雑靈を散らしながら、どんどん戦線を押し上げる。続く二年以上の長距離射撃や靈体ボーガンによる攻撃支援で靈核を持つ悪靈が散ってゆく。

靈力が途切れ、倒れそうになった人間に代わりが入る。

次々と入れ替わる一年の人間結界だったが、その効果は折り紙つきだった。

やる気が違う、気力が違う。

「人員撤退完了!!」「足手まとい掃除完了!!」

全滅した生徒の収容を完了したと声が集まった。

「盾、装備!!」「了解!!」

霊気がつきかけた人間が人間結界全員に配り、わずかな霊力で盾を展開する。

守りに特化した盾は、それだけで一切の霊の進入を押さえ込むことに成功した。

「杖、投入!!」「了解!!」

二年の投擲部隊による「杖」で、周辺雑霊の殆どが消え去った。

「盾部隊は、後退しつつ「罨」を設置!」「了解!!」

盾をかまえつつ一年は後退したが、それに誘い込まれるほどの霊は存在していなかった。

「・・・第一弾は消滅、か?」

「・・・零体リーダーによると、二弾の接近は一時間後になる模様です。」

「では小休止を徹底してくれ。あと、忠夫を呼んでくれ」

「横島は今、説得中ですが?」

「バカは死んでも直らん。あれはどうしたって負けを認めんよ。」

誰もいなくなった大広間で、横島はポツンと座っていた。

「ん？ バカどもはどこに行った？」

「あー、危険な実習をさせた六道と僕を訴えるそうです。」

「バカか、あいつら……。」

思わず溜息を漏らしてしまった。

雑霊だの船幽霊が大群で来る「危険な」「実習をさせられた」と、本気で抗議できるつもりだろうか？

ウチの師匠が聞いたら俺が半殺しにされるぞ。

「残ったのは各学年のD組みの一部だけですな」

「で、戦力は？」

「神通棍を使えるのが10人。霊波だけが四人。霊波も出ないのが15人ですね」

つかえねー、とは言わなかった。

霊気を扱えれば「杖」も「盾」も使えるのだから。

霊気が使えなくなったらって運送はできるし輸送もできる。

「横島GS手伝え。こんなかでプロはお前だけだ。」

「了解、青嶋指令」

なんつつか、その気にさせる凄いやつだった。

上空から見ていると、その悪辣さが浮かび上がる。

結界能力が皆無ながら自信とプライドでのぼせ上がった小僧達が、無謀な攻めを行って靈気を一気に失ってゆく。

雑霊を散らすことが出来ても、雑霊から身も護れない小僧達の運命など決まっただけで、次々と戦闘不能になってゆく。

死にそうなら助けるけど半死半生なら助けない、そういう約束だったので暫く見物をしていただけ、やはり我が生徒達は立ち上がる。

全身に呪符を書き込んで、鋭く小さく展開した靈気で効力を持たせる。

長く長く持ちこたえられるように、長く長く護れるように。

そんな練習の成果はすぐに現れ、雑霊など蹴散らして盾となる生徒達。

前線の人間結界が安定したところで、零体ポーションや射撃靈能による援護が入り、雑霊や船幽霊が蹴散らされてゆく。

いいコンビネーションだ。

これだから人間ってやつは侮れない。

バカがいっぱいいる中で、気持ちのいいバカが集まると、こんな戦い方が出来るようになる。

そろそろ人間結界の靈気が尽きるかというところで、「盾」が装備された。

完全守護状態で起動されると、通常の零体ポーションや靈能では攻撃が通らなくなる。

そこで、「杖」を大量投入して周辺を完全浄化することにより、悪霊レベルも一気に消し去る。

盾の内側にいたから無事だったけど、ありゃ、あたしにでも効くわ。

恐ろしいものを作ったある生徒を視界に納め、にやりと笑う。

海岸線とホテル周辺に展開した改良型捕縛結界を避けるようにしてホテルに戻ると、女子部によるヒーリングと戦闘準備が行われて

いた。

「メデューサ先生！」

女子部の生徒達が集まってくる。

「そろそろ第二段がくるよ。野郎どもに負けないように、しっかりやんな」

「……………はい！！」「……………」

「人間結界は、細く長く絶え間なくだ。これが出るようになるだけで、かなりの制御技術が得られる。お前らはガキの時分でこんな命がけの修行が出来るんだ。幸せだとおもいな！！」

「……………はい！！」「……………」

「………いってこい！！！」

「……………はい！！」「……………」

持ち場に散る少女達を見送り、私は忠夫がいるであろう作戦会議室に向かった。

第二段の迎撃は極めて順調に進んだ。

やはり崩壊と回復の戦況を直に見たのが効いたのだろうと青嶋先輩の話。

とはいえ、霊力は勝るものの体力で劣る女子部の人間結界の崩壊は近い。

「雪乃丞。」

「おう、いけるぜ。」

「皆は？」

「鼻息荒いつての。」

じゃ、いつてこい、嫌われるなよ？

「まかせろ、目指せ吊り橋効果！！」「」「」「」
「おおおおお！！！！」

お前らこえーよ。

人間結界の鎖が切れたところに1-Aの仲間が入る。

「自分の霊力だけじゃねーんだ。皆で、皆を支えるんだ！」

倒れた女子を支えながら鎖に入る。

「大丈夫だ、ゆっくりと細く、ながくだ！！」

打撃に吹っ飛ばされそうな女子の前に立つ。

「でっけーのは俺達に任せろ！ 霊波のカベを失わなければいいんだ！！」

独自の訓練で言い合った標語を胸に叫ぶ。

「」「」「俺達には出来る！ 俺達なら出来る！！」「」「」「」

男子も無い、女子も無い、成し遂げる目標に向かった霊気が一瞬になった瞬間だった。

「零体ボーガン部隊前進！！」「了解！」

「ボーガン補給急げ！！」「了解！」

「盾、上方に展開、来るぞ！！」「おおおお！！！！！！」

飛来する船幽霊を迎撃するボーガンと盾。

襲い掛かるうとした船幽霊達が、何も出来ずに静止した。

「よし、畏が効いてるぞ！！ 畏にかかっていない敵を落とし、畏にかかっているのはその後だ！！」「了解！！」

圧倒的な幽霊戦力を、押しとどめ、分断して散らしてゆく。

霊能を持つものも持たないものも、一つの目的に向かい全力疾走していた。

時は今、夜明け前。

完全勝利の時は、もうすぐだった。

霊力がなくても目の前の作戦は見事だとわかる。

多分、この作戦での中核は忠夫ではないのだろう。

忠夫は最大攻撃戦力として温存され、この戦線が崩壊した際の後始末役で作戦本部に詰めているはずだ。

「全く、ふがないわ」

「そうね、涙が出そうよ」

勝手に宿を引き払って、帰ってしまった生徒達がいた。

色々といっていたが、要するに

「自分達が目立てる舞台を準備できなかったことに対する不満？」

「そつなのよ、本当になさけないわ」

正直に言えばB組の連中は帰ってきたことで叱責を受け、この結果を見せられて更なる叱責を受けているだろう。

が、C組の一部やD組の一部となると話は変わる。六道学園自体に対するスタンスが違いすぎるため、話が通じないのだ。

帰れば抗議が山のように来ることだろう。

もちろんそんな事を相手するつもりは無いので、そのままGS協会にスルーパスするつもりだけど。

@@さんとこの息子さんはなさけねー、Eクラス霊に気絶ですつて、うぶぶ。

そんな噂で持ちきりにさせてみるつもり満々な私だった。

「まあ、盾も杖も毘も、さらに筆だって中学生が使ってすら絶大な効果あり、と宣伝できただけでも成果ありね。」

「も、忠夫君ってば、冥子がほしいならいつてくれればいいのに」

くねくねしてる冥那はさておき、この結果は業界を走るだろう。

ふっふっふ、儲けるわよ？

朝日が昇る。

砂浜には気力が尽きた生徒がごろごろしていた。

男子も女子も学年も無い。

ひとつの戦いに勝利した仲間たちだった。

そんな中、横島がタオルやらジュースやらを配って歩いていた。

今回は最大戦力ということで、予備戦力扱いだつたため、こんなことしか出来ないと言笑い。

でも、今回の戦功で言えばアイツ抜きでは語れない。

呪文の研究でも作戦の検討でも部隊配置でも先頭に立って進め、補給や休憩のタイミング、仮眠や食事のタイミングを絶妙にコントロールしていた。

これがプロつてもんなんだと感心していたものだ。

で、一番効いたのは「禪」。

聞けば高等部のお姉さま方が手縫いで仕立ててくれて、さらに霊糸による呪文を女子部に頼むなんて離れ業をかましてくれた。

俺達には一生の宝だな、うん。

「さて、諸君。五次にわたる侵攻を耐えたことにより、われら中等部最精鋭による防衛戦線は完了した。」

目を覚ますもの、起き上がるもの、全員が瞳を輝かせる。

「……さあ声を上げろ、我々の勝利だ!!!」

呆然とした生徒達。

男女かかわりなしに手を取り合う。

「あ、あ、あはははははははははは」

「ふ、ふ、ふふふふふふふ」

笑いが、暖かな笑いが周囲に満ちた後、爆発する。

「やったぞ、おいやつたじゃねーか!!!」

「やりましたわ、できましたわ、やりとげましたわ!!!」

肩を組み抱きしめあい、共に喜びを分かち合う。
飛び跳ねる、くるくるまわる、もう大騒ぎ！！

「やったな、横島！！」

「やりましたわ、横島君！！」

雪乃丞と女子部の、そう弓さんが僕に抱きついてきた。

「わたくし、今回で教えられましたわ。成し遂げることの難しさとその可能性を！！」

「ああ、学んだ。倒すばかりが力じゃねー。護る力が大切だってな。」

僕のところに集まる生徒、青嶋先輩のところに集まる生徒、みんなが急に胸上げを始めた。

朝日の中で胸上げをする彼らを、二台のカメラが連写していた。

臨海除霊実習の結果は、即座に神在温泉の高等部にも伝えられた。中等部の完全勝利に驚く声も聞こえたが、名家の名乗りが多い比重だったという事もあり、自分たちの眷属がいるのだから当たり前だと鼻高々だった生徒もいたが、その鼻は一気に折られることになる。

各学年のB組とC組は完全に全滅し、東京に帰ってしまった後、各学年のA組とD組の有志で7時間にわたる戦闘を行ったという話を聞いて全員が驚いた。

高等部で行われる除霊実習では毎年戦線崩壊が起き、プロのGSの手を煩わせることになっている。

今回の戦闘推移を見ると、唯一のプロGSである横島忠夫は実習

参加しておらず、多少の霊能と霊波が出せる人員だけで支えきつたと言えた。

戦線を指揮した青嶋孝雄の評価も高いながら、作戦骨子を練った横島忠夫の評価も高く、男子部の曹操とか男子部の諸葛亮とか言われ始めていた。

まあ、なんとというか、私も令子もニヤニヤ笑い。

先ほどまで鼻高々だった女どもが、人目につかないように消えていったのを見ていたから。

「ま、仕方ないワケ。」

「そりゃ、アンだけ自慢していた眷属が、そうそうに逃げ帰ったんじゃないかねえ？」

「ん〜？ 失敗したのは〜、くるみちゃんたちじゃないし〜、かんけないんでしょ〜？」

まあ、冥子のいう通りなんだけど、誇れるものは家名だけという女の家名が落ちたんだから、そりゃうるたえるわ。

「しっかし、忠夫も無茶な訓練させてたわね。」

細く長く鋭く、と、とても中一のレベルじゃない要求に対して、バカみたいなニンジンぶら下げて気合を入れさせたらしい。

やれ吊り橋効果だ、やれ男の背中作戦だ、とかなんとか。

男子部の一部にしか配れなかったという禪にしても、全滅するであろうクラスの数計算されていて、逃げ帰ったり交戦を拒否した人数までは含んでいなかったらしいけど、実際に訓練に参加した男子の分しか準備していなかったそうだ。

つまり、戦力になるならないは、実習前の一月で振り分けられて

いたともいえる。

「理事長もあの訓練はカリキュラムに入れるって言うってたわけ」
「まあ、つきあったこっちにも利益満載だったしね」

忠夫に関わると、物事が大きく楽しくなりすぎる。

臨海除霊実習の報告書は多岐にわたっていた。

生徒たちからの実習報告書は通り一遍なのは仕方ないだろう。

だが、担当GSとしての横島忠夫報告書と担当教員であるメデューサ報告書に大きく食い違いがでていた。

簡単にいえば最終評価の段が大きく食い違う。

横島報告書においては「善戦するものの、死力を尽くし終えたため、第六次への備えなし。以後の修練が必須」となっていたが、メデューサ報告書では「死力を尽くすものの気力を残す。続き二次までの善戦を期待できる」とあった。

簡単な食い違いだが、見過ごすこともできず、理事会に呼び出してみると、お互いの報告書を読んでつかみ合いを始めた。

「てめえ、忠夫、自分の仲間を低く見積もりすぎだ！！ あいつらを嘗めるんじゃないぞ！！」

「メデューサこそなに考えてるんだ！！ 気力？ つまり命を霊力にかえろってことだろうが！！」

「ちがう！！ 魂からしぼりだせる限界があるんだ！その上限生きてないっていつてるんだよ！！」

「だったら上限にきたらどうなる？ 逃げることもせめることもできねーだろうが！！」

第十話

聞いていると、どうも見極めたラインは同じだが、そこから先の判断が分かれるという話らしいことがわかった。

横島報告書は、全員が生還可能、撤退可能、防衛戦に移行して増援待ちまで可能というラインで、次の攻勢をそのまま受ける事ができないと住めくくっている。

が、メデューサ報告書では、各自の疲労度や残りの霊力が事細かに分析されていり、そこから導き出された結論が記載されているのだ。

いわば軍師の視点と現場指揮官の視点の差だろう。

理事会はその内容と報告の正確さに感心し、双方を認めた。

そして横島・メデューサ両名の和解を勧告すると、二人とも笑い始める。

「個人の感情を仕事に持ち込むなんて、（メデューサ）（忠夫）もまだまだだね」

鏡写しの台詞に怒った二人が再びつかみ合ったのはご愛敬。

臨海合宿の結果は、校内での力学を塗り変えた。

血統・霊能・秘伝主義であった男子部だったが、臨海合宿以降は実績・成績主義に移行していた。

もちろん、成績が悪いからいじめられるというわけではなく、実績も成績もない「名家」が声高に喋らなくなったと言うだけだが。

いわゆる六道に劣るものの、古参の名家とされるB組C組勢は実家より強い叱責を受けているし、次はないとまで言われている生徒もいるという。

D組の一部は訴訟を本当に起こしているいい恥をかいたそつだ。

六道から来る気マンマンだったにも関わらず、逆に訴訟を起こされたり協会内部で陰口をたたかれたり。

もちろん、完成された技を拾得していない未熟な状態だったのでしょうがないんだ、と言うことにしたわけだが、それにも関わらず、一晩の攻防をしのぎきった少年少女は未恐ろしい、という話につながる。

つまり、ふがない、と言われる人間を大量に生んでしまったわけだ。

光あるところには闇あり、闇は腐臭を放って大きくなってゆくのは必定。

本来であれば受けられるはずであったスポットライトを霊能も発現していない未熟者たちに奪われた屈辱。

素人でも扱える強力な霊具。

そんなものがあれば自分たちだってできた。

あんな蛮人のような作戦は作戦とは言えない。

あの装備があれば、自分たちなら、あいつ等より遙かに上手に、あいつ等より遙かに華麗に……。

そんな陰鬱とした会話が、A組以外では常にささやかれていたのだった。

もちろん、陰に隠れて、ヒトには聞こえないように。何をどう言っても負け犬の遠吠えだから。

「……と、まあそんなかんじよ」

理事長室に呼び出された僕と青島先輩は、僕の母の話を黙って聞いていた。

なにだ、どういうわけで「そんなかんじ」なのかを聞いただけなのだけれども、母子の関係で十年以上のつきあいだけに解ってしまう。

「……つまり、見せ場を作れ、と？」

「そこまで露骨じゃなくていんだけどね。でもこのままだとヒネクしてつぶれちゃうのよ」

「……そこまで責任持てないってばさ。」

「責任とかそういうんじゃない、さすが古典は違うなあ、というふうに持ち上げるから、ひっくり返すなよ、っていつてるの。」

体育祭とか文化祭とか？

「クラス対抗戦とか、ね。」

思わず首を振る俺と青島先輩。

「向こうがあればほどへタレてるのに、こっちで手加減しても意味がないですよ」

「そうそう、絶対に総崩れだよ？」

俺たちの言葉にくっと詰まる母、百合子。

「でもねえ、さすがにちょっとへこませすぎだと思っつよ。」

「そりゃ、今回は圧倒的ですけど、それだってみんなが血反吐はくほど努力したおかげだよ？」

「そうです。少なくとも、作戦・戦略・補給まで見渡して詰めてい

れば、あれほど早く崩壊はしなかったでしょう。」

兵力差で3：1だったんだから。

「文化祭や体育祭で負けるとは言わないわ。でもクラス対抗戦では……」

「それこそ無理です。」

すでに特訓を受けたやつらの地力はあがっている。

筆なしでおおよその人間が神通棍を扱えるようになってるし、筆で様々試した霊能から自分にあつたものを探せた人間すらいるのだから。

古代のカリキュラムにおんぶにだつこな奴らと差がでるのは当たり前なのだ。

そんな奴らに「手加減しろ」なんて言えるものではない。言われた奴らが気落ちするならいいけど、逆に増長しかねないところなのだから。

だから、絶対に無理。

「百合子ちゃん、無理にバランスはとらなくていいわ。」

彫像のように今まで黙っていた理事長はにこやかに言う。

「事实は受け入れてもらわないといけないし、新霊具で戦略を立てることもできる機会なの。だから、しばらく放置して、地力を上げてもらった方がいいわ。」

「……そう、解ったわ。」

苦笑いの二人を目の前にして、僕らのお役目ごめんかと思いきや、本題が別にあるという。

「忠夫君、最近学園内が、桃色なの。」

「・・・・・・・・」

「それもね、女子部と男子部のある、中等部だけなの。」

「・・・・・・・・」

「どうしてかしらね？」

どう答えるうちゅうんじゃ。

とはいえ、こんな時は肉の壁。

「・・・・という事です、最近女子部から猛アタックを受けている青島先輩？」

「なつ、横島おめえ、どうしてそれを！！」

「いやー、ほら、有名ですよ？」

「あら、そうなの、青島君？」

「そうね冥那。確かに大人気で、高等部からもラブレターが来てるって話よ？」

「ゆ、百合子さん、なんでそのことを・・・・」

「学園内で私たちが知らないことはないのよ。」

「うっふっふ」

こえーこえー、なんでこの二人が組むかなあ・・・・。

このまま見捨てる逆壁にされるおそれがあるのでフォロー。

「一応、先日の臨海のとんで、印象が高いだけっすよ。時間が解決します。」

そのあいだ、先輩も手を出さなくてくれれば・・・・。

そういつて青島先輩をみたんだけど、なぜか脂汗を滝のように・・・・。

つて、まさかー！

「い、い、いや、ぜんぜんダイジョウブだよ？」

「片言だー！ー！ー！！！」

「ま、まじだ、本気だー！！」

「ぎゃー！ー！ 先輩そのマジ宣言はまずいつてよー！」

「いやいやいやいや、うそじゃなくて！ 手を握ったとかハグしたとかキスマでだー！！」

「相手は誰だー！ー！ー！！！」

ぎゃんぎゃんやりあう僕たちだったけど、じつは正面の二人にはすでに詳細まで握られていたそうなの。

つまり、火遊びしやすい状況だからって、女を食って捨てるなよ、責任とれるなら最後まで行っても良いけど、食い捨てなら「もぎるぞ」という宣言でした。

いいとばかりです、はい。

この件についてはエミねえや令子さんにも釘を差されている。

「連れてきていいのはアタシらより上の女じゃないと認めないワケ」

「そうね、私たちが唸らせるいい女を連れてきたら認めてあげる」

・・・どんだけ高い女を連れてこなくちゃいけないんだろう？

それはさておき、この辺は学内通知が徹底されていないと不味いので、自分のところのクラスには周知させた。

もちろん不満大爆発。

自分たちの株が高騰している今こそチャンスなのに、と魂が震える男たち。

「あのなあ、あの青島先輩だってキスマまで血の涙を流しているん

だぞ？」

「「「「「「ぐっ……」

「で、一応、学園長からの伝言で『食って捨てなんかしたら、もぎるわよ』だってさ。」

さーっと真っ青になるクラスメイトたち。

とはいえ、閉めるばかりじゃ上手くないなあ。

……ちよつと盛り上げた方がいいのかな？

うん、すこし相談してみよう。

横島万歳。

臨海除霊成功のお祝いということで、各学年のAクラス及び他クラスの参加者を神在温泉にご招待という企画が突如発生した。

つまり女子中等部も、だ。

それを聞いた瞬間、やはり俺たちの味方だと思われた横島から一言。

「手つなぎOK、ハグOK、キスマでならOK、オーバー？」

ぐう……そりゃ生殺しだろうが……！！！！

「あのかなあ、女子部が一番燃えるところで切つといた方が、後の展開やイベントが燃えるぞ？」

……さすがスケコマシの言うことは違う。

俺たちの視点では得られない思考、そこに痺れて懂れる！

たしかに、弓の反応を見ると、そこまで一息、というかそこがゴールと思っている感じがある。

うー、確かに妊娠も出産も育児も向こうの負担だ。

そんなことだけ押しつけることを背負わせて、俺だけ気持ちよくなりたいからって言うのはマズイ。

本当にマズイと思う。

そんなわけで、OK三項目を了解した生徒だけが参加できることになったので、男子部も女子部も全員OKした。

女子部全員OKの話聞いて、うちのクラスの数名が鼻血を出したのは秘密だ。

本来の形とは全く違う方向で盛り上がってしまった神在温泉宿泊だったけど、俺たちの、俺と横島の滞在だけはかなり斜め上にずれてしまった。

久しぶりに神在温泉にくと、なんと芦原夫妻きていた。

思わずハグしたり握手したりして旧交を温めていたんだけど、ちよつと話があると呼ばれた。

僕一人だけかな、と思ったら雪乃丞も呼ばれた。

ふたりしてなんだろう、と首を傾げていると、呼ばれた部屋に強力な結界と呪術式が展開される。

その圧力によるめく俺たちだったが、夫婦ともに「しまった」という顔になった。

二人の霊圧が下がったところで、本題がきた。

曰く、

「ふたりとも、私たちの守護を受けてみないかね？」

音に聞こえた魔王中の魔王、真なる力を取り戻した真魔王「魔神アシユタロス」と、古の女神にして現在の神界における最高霊格を持つともいわれる「女神イシユタル」。

それが芦原夫妻の正体だ。

その二人が俺たちを守護してくれるというのがどうもわからん。

「横島だったらわかるけど、何で俺まで？」

「伊達君、私たちは君にも感謝しているんだよ」

「そうですね、伊達君。あなたがあのとき周囲を止めてくれなかったら、半径20kmは塩の柱になってました。」

「そして私たちはその咎で再び封印されていただろう。」

うつわー、やべえ、とはおもってたけど、そこまでだったとわー！！

「だから、私たちがこうやって存在できているのは、伊達君と横島君のおかげなんだよ？」

だから加護、つわれてもなあ……。

俺自身、自分の強さをものにしたし、未だ霊能ってのには疎いし。

横島も「おもいつきり鼻屑ですね」と笑っている。

「なにをいうんだい、横島君。鼻屑？ 当たり前じゃないか。我々が恩義を感じている人間とそうでない人間が平等なはずがないだろ？」

「忠夫君や雪乃丞君を贖済するのは当たり前です。お気に入りですから」

そんな評価を引き出したのも実力だともいう二人。

そこまでいわれて固辞できるほど俺たちは大人ではなかった。

ただ、後々になって、なんであのとき俺たちは大人になれなかったんだろうと、心底思ったものだった。

芦原夫婦から呼び出された横島君と雪乃丞が戻ってくると、宴会会場は大いに盛り上がりました。

この温泉宿泊で霊能に目覚めた生徒も多く、霊気しかまとえなかった一文字さんも霊具使いとしての才能を見せました。

「やったわね、マリ！」

「よかったじゃない、マリ！！」

「やべーよ、うれしくて泣けた」

ぶつきらばうな彼女でしたが、涙を流す彼女を私たちは慰めました。

あの時の、あの臨海除霊の時の一体感が、私たちの些細な隔たりを埋めたのです。

そんな私たちが宴会場で食事をしている中で変えてきたものだから、感動がさらに盛り上がってしまいました。

さすが男子部1-Aのツートップ。

なんだかオーラも違いますわ。

そう、なんだか悟りを開いた聖者のような、そんな雰囲気を負ってますのね。

詳しくはわかりませんわ。

それでも、あのふたりなら、そう思わせる霊気。

いやー、なんつつか、意表を突かれた上で斜め上に行かれた。はじめ、宴会中に起きた地鳴りと警報でパニックになった俺たちだったけど、いち早く正気に戻った横島と伊達が俺に駆け寄る。

「青島先輩、指揮を！」

「俺たちは威力偵察にでるぞ！」

「・・・わかった！ だれか、式神ケント紙を！！！」

鳥の式で彼らとの連絡を取り、俺たちは宴会場を緊急指揮所にする。

「酔っぱらってる奴らは水かぶってこい！ 正気な奴らはすぐに情報収集！ 男、盾出せ！！！」

「！！！！了解！！！！！！」

「！！！！オッス！！！！！！」

一気に散って即座に集まる仲間達。

霊衣に着替え、機材を集め、電源を確保する。

「青島さん、式からの映像です！！！」

3-Aの宇城沢の霊能で、式神の視覚聴覚がプロジェクターに映し出された。

そしてそこには、なぜか特撮ヒーローが魔族に囲まれていた。

「・・・うき、テレビは切り替える」

「・・・青島さん、これライブっす」

まるで特撮の殺陣のように活躍する二人が距離をとってポーズを取った。

「孤高の魔神アシュタロスの加護を受けし黒の戦士、アシユブラックク！」

「慈愛の女神イシュタルの加護を受けし白の戦士、イシユホワイト！」

「ふたりは、イシユアシユ！！！」

すべての緊張はぶっ飛んだ。

遠く遠く宴会場から大爆笑の音が聞こえる。

「あー、大阪人としてはこれだけ受ければ本望やなー」

「泣くなホワイト、形はナニだが、力は本物だ」

「せやなー、せやけど、力がほんまもんなだけにタチわるいつつか・・・、せやろ、ブラック。」

「あー、泣くのも笑うのも全部終えてからだ」

「・・・せやなあ・・・。」

切ない会話の間でも、防御結界を張りつつ戦場を限定して下級魔族を打ち倒す二人の戦士。

ただ悲しいかな、二人の霊衣はなぜか少女ぽかった。

「……この、ふざけやがって、なにがイシユアシュだあ!!」

マシンガンのようなものを乱射する魔族の弾丸を、二人ですごい早さで掴みとってゆく。

それを見ているらしい会場では、かなりの声援と合唱が聞こえた。

『イシユアシュ、イシユアシュっ、イシユアシュ、イシユアシュっ』

かなり出来上がっているっぽい。

「……ブラック、かえっていいか？」

「……ホワイト、とりあえず倒せ」

もちろんやる気はデットゾーン。

俺たちのライフはもうゼロよ。

神在温泉に地域限定ヒーローが生まれた。

そのなも「ふたりはイシユアシュ」。

細かい設定や変身ポーズ、コスチュームが結構作り込まれていることと、2クール放映を意識した作り込み設定はマニアにも大人気で、イシユアシュの正体は、というクイズは好評を集めているそうだ。

「で、よこっち。ホワイトはよこっちやろ？」

「……セーカーい。」
「つうと、ブラックはユツキーやな？」

事務所に遊びに来た銀ちゃんが、神在温泉の記事を持って笑っている。

僕の隣で雪乃丞はあきらめた顔だった。

すでに「イシユアシユ」の正体なんか知られているので、中等部高等部合同の学園祭でのステージ化は決定されたそうで、うちのクラスも「イシユアシユ喫茶」という内容に集約されている。

遊びに来た銀ちゃんに、学園祭の入場券とクラスのチケットを渡すと、仕事を干されてでも行くと言ってくれた。

「しかし、威力が高すぎるんだよなあ。」

「そうなんだよねえ」

僕と雪乃丞の悩みは「そこ」。

自分以外の霊能が、強制的に光臨するのではなく、権能で倍率が変わるだけなのだが、その倍率の最低が「100」。

絶対に授業じゃ使えません。

つうか、仕事でも使えないし。

「なんや、せやったら、威力の低い道具でいいやろ？」

「そこなんだ、そこなんだよ、銀ちゃん」

問題はそこ。

いかに威力が低い道具でも、イシユアシユで使つと「祝福」されてしまうのだ。

威力は倍率じゃなくて「祝福」。

範囲も威力も効果も絶望的の最大能力。

「……そのせいで、全力が試せなくて、どこまでできるのかわからないのが解らなくて怖いんだ。」

「自分の力やないからなあ……。」

「はあ……。」

思わずため息の俺たちを面白そうに見ていた銀ちゃんが、一言聴く。

「なあ、よこつち。祝福つづつのは道具だけなんか？」

「ん？そりやどついう意味？」

「せやから、いわば「イシユアシュ」って魔神と女神の代行者なんやろ？」

「……たぶんね」

「せやったら、代行者の代行者をつくれんのか？」

「え？」

「与える力をセーブして、ふつづのGSよりちょっと強いぐらいに祝福できるのか？」

「……！！！」

試す価値大在り！！

思わず銀ちゃんとラインダンスの僕たちだった。

巻き込む人選は細かくしてみた。

とりあえず、横島事務所の令子さんとエミさんはその場で立候補して実験したところ、白と黒にはならなかった。

エミさんは「赤」、令子さんは「金」だった。

レッドとゴールド。

……微妙だ。

とはいえ、二人とも威力は大満足らしい。

基本的なスペックは100マイト前後にリミッターをかけているのが満足の原因だ。

逆に、低い方にも制限をかけられることから、修行にももってこいだとさらに満足。

そう、これが俺と横島が得られない満足なのだ。

すでに女神と魔神に最高の祝福を得てしまったので、その制限ができないのだ。

せめて最高責任者あたりが制限をしてくれると委員補だけでも、逆に人界の代行者として依頼されてしまったのがつらい。

このままじゃ、まともに修行もままならない。

そう、ままならないのだ。

イシユアシユが祝福された姿なら、俺と横島自身も祝福された存在なのだ。

霊力や霊能には影響していないが、細かいところの運が良くなっ
てしまっている。

くじ引きやおみくじ、席順や抽選に至るまで。

ここぞという時に当たりを引いてしまう。

これこそ祝福の効果で、その気になれば自堕落に暮らすことも可能なのだ。

・・・中学生の段階で、この悩みってどうよ？

もちろん、極力、その権能に関わらないようにしてるけど、靈感がささやくというか本能的に頼らないように生きるまで至っていない。

エミねえや令子さんは「いいじゃない、運がいいぐらいなら変わ

ってほしいぐらいなワケ」「ふっふっふ、宝くじ買いまくりね」と笑っていたけど、これが権能のせいだとなるとオカルト犯罪なんですよ、ええ。

そのことを話したとたん、真っ青になる二人。

というか、すでに宝くじ買ってますよ、二人とも。

もちろん、権能とはいえ当たり具合は微妙なので、安心してほしいのだけれども、それでも、怖いことには変わりない。

地道に素の霊能をあげるしかないんだけどなあ。

「なにいつてるの、忠夫、お前は既にGSなワケ。運が良くてコネがあるのは顧客のためになるワケ。胸を張りなさい」

「そうね、この権能を貸し与える能力にしても、戦力増強から守備力増強まで幅広いわ。安心できる相手に貸してみて、どんな能力が現れるかで修行の助けにもできるんじゃないの？」

なるほど、と手を鳴らす僕と雪乃丞。

「「そんなわけで、ふたりとも、高等部の学園祭企画を手伝ってもらう」わよ」(ワケ)」

第十一話（前書き）

W エー、まとまりの無さが逆に現実的かもとかおもったりしています

第十一話

神在温泉祝杯から帰ってくると、学園は祭り準備一色だった。

もちろん、元女子校だけにチケットは高値だけど、それ以上に各国のオカルト情報関係が暗躍しているのが煩わしい。

大概は先生たちが迎撃できるんだけど、神魔クラスの進入となると僕たちが投入される。

で、戦っているうちに撮影班が集まり野次馬が集まり、さらには警備員が人の整理まで始める。

ここ数日で準備期間の出し物と化してしまったわけだ。

『イシュツアシュツ、イシュツアシュツ！！イシュツアシュツ、イシュツアシュツ！！』

すでに現場で歌われた歌が知れ渡っているのが泣ける。

「いくぞ、ホワイト！」「わかった、ブラック！！」

「イシュアシュ、マールファイヤー！！」

この技も公募されて名前が決まった。

命名者「弓かおり」さん。

第二候補の「神魔ラブラブ霊波光線」は、多大なプッシュがあったが僕たちが拒否した。

ええ、完全拒否だつてばさ！！

僕たちの攻撃を受けて消え去った神魔を背にした瞬間、連絡が入る。

「こちら、レッドなワケ。倍率変更申請なワケ」

「わかりました。指定倍率は？」
「四倍！！」

僕とブラックはその声を聴き、即座に倍率変更。
瞬間、裏門で力の柱が三つ立つ。

「ホワイト、あと一派いるわ。場所は不明」

「ありがとうございます、ゴールド」

「・・・ホワイト、残りは上空から来るの」

「あるがとうございます、ブルー」

僕とブラックは翼を広げた。

白き女神の翼と黒き魔神の翼。

瞬間、フラッシュで光の洪水となる。

「上空の戦闘になります！！ 野外展示物の結界補強をお願いします
す！！」

「下からカメラを構えてたら、即時狙撃だからな！」

飛来する何かに向かって飛び立った。

いま、町内でも大人気のユニット、「ふたりはイシュアシュ」と
「イシュアシュ3」を合わせた「イシュアシュ5」というのが、子
供の「将来の夢」だったりする。

そう、子供のリアルな夢。

アイドルユニットとかアニメとかじゃなくて、実際に活躍してい
るものだから質が悪い。

神魔を撃退し、悪霊を絶ち、少年少女の安全を守る。

「そんな存在が六道学園にいるというのだから、人気は鰻登り。」

「というわけで、近所の子供は、招待しないとイケないみたいなの〜」

理事長の言葉に頭を抱える忠夫と雪乃丞。

最近、神魔からの誘いで神在温泉での握手会などもあるそうので、わりとダメージが大きいとか。

学園に飛来する神魔の中にも「ストーカーファン」も居るらしく、平和の為なのか、騒動の中心なのか疑わしいらしい。

「男の子の大半は、アクション中心の、中等部を希望してるわ〜」

「女子は、高等部？」

「そうね〜、そういう傾向ね〜」

「出し物もそれに寄せますか？」

「そこまで気を使わなくてもいいわ〜」

とはいえ、すでに高等部から合同舞台の要請がいつている。

すでに身内の子女に告知済みだったりするのだ。

わりと多いのよね、うちの所長と雪乃丞のカップリング希望が。

「そこ〜！腐った妄想はしないでください！！」

「勘弁してくれ・・・」

・・・結構精神的にきてるみたいね。

悪いことしちゃったかしら？

一枚1000円で着替え写真を売りさばいたのは秘密にしとかな

いと。

とはいえ、鎌田君が大量購入してるのが気になるわ。
ええ、とつても。

「だから、そういう妄想やめてー！」
「勘弁してくれ・・・」

なんだか、最近、総代よりも俺の方が呼ばれている気がする理事
長室はカオスだった。

美神先輩や横島先輩がにやにやしている対面で、横島と伊達が真
っ青になって落ち込んでる。

まあ、しかたないだろう。

あの高等部の三魔女に関わってるんだからな。

美神令子、横島エミ、六道冥子といえば、六道学院高等部の最高
峰にして三魔女といわれるほどの実力者だった。

美神・六道といえば古からの名門だし、横島といえば業界でもっ
ともホットな家だろう。

そんな家の長女たちだ、カモ派閥もすごいのだが、最もスゴいの
は、三人ともに在学中のGS資格取得していることだろう。

六道学院では在学中受験をひどく厳しい資格審査の上で許可して
いる。

せめて一次試験を通過して、二次試験でも死亡や怪我をする前に
ギブアップできる程度の実力がないと許可されないのだ。

そこまでの実力となると集中的に教育された高等部三年ぐらいで
ないと許可されないのだが、その三人は、なんと、合格を見込んで
許可されたのだ。

これがどれだけ例外的で規格外か、普通の人には解るまい。

どんなに靈力があっても、どんなに実力があっても、年齢的な経験がモノをいう実践形式だ。経験不足の学生が乗り越えられるモノではない。

しかし、三魔女は乗り越えた。

実に伝説的な存在だった。

が、実は我が後輩がもつとヒドい。

スゴいではなく、ヒドいのだ。

実は、後輩の横島は、申請書類も許可書類も承認書類も勝手に出されて、親の同意書とともに試験当日に受験の話がされたという。

年齢的に無理だろうと高を括っていたらしいのだが、推薦人に妙神山関係者が名を連ねていたためスルーされたとか。

で、主席合格。

はつきり言えばヒドい。

ヒドくデタラメで、マンガのような話だ。

それも、素人の書いた「俺Tueeee」みたいな。

まあ、現実なんだが。

「あら、青島君。いらっしやい」

「青島先輩助けてー！ー！ー！」

「寄るな、ウツる」

「「ひでー！ー！ー！」」

涙目の後輩はおいておいて、俺は理事長に向き直った。

「で、今度はどんな厄介事ですか？」

「やだわあゝ、厄介事ってゝ。まるで私がゝ厄介事をゝ毎度押しつけてるみたいゝ」

「ゝゝゝゝ(自覚無しかよ)」「ゝゝゝゝ」

思わずこの場の全員の想いが繋がったと感じた俺だった。

「じつはねえゝ、GS協会からの横やりでゝ、視察させろって言うてきたのよゝ」

其れのどこが厄介事なのか、と首を傾げると、視界の先で横島が苦々しい顔をしている。

よくよく見てみれば、伊達も、美神先輩も横島先輩も。

ふむ、俺には気づけない事情があるな？

でも、俺に関係がある、か？

「で、どんな「花」をもたせると？」

横島の一言ですべてが見えた。

・・・そういうことかよ、まったく。

これは先日の臨海実習で恥をかかされた家々が求めた賄賂だ。与えられるのは虚栄。

求めるのも虚栄。

そして実力の伴わない悪夢だけが残る。

「理事長、学園をお見合い学校にしたいならそれでもいいのではありませんか？」

「青島君も、厳しい事言うわあ」

実のところ、その意味もないわけではないはずだ。が、今のようないけいけな生徒が集まっているところでその路線変更をすると、明らかすぎるほどに弊害がでる。

それに、除霊実習に代表される基礎訓練の段階でネを上げたのだ。これからの活躍など期待できようはずがない。勿論、今までのまま、ならばだ。

「一応、花は持たせるつもりがないわけではありません」

「本当かしら？」

「ええ。ただし、靈力に関わらないところで、です」

「それでは意味がないわ」

学校運営上、確かに受け入れがたいだろう。が、一番の問題点はそこではない。

「逆にお聞きしますが、これから生徒を指導し、卒業させる上で、虚栄と虚構で支えられた人間が、六道卒業の看板を背負って何度もGS試験に落ちる、こんな事実を受け入れますか？」

珍しく、本当に珍しく、理事長は顔をしかめた。

その事実を理解してたが、正面からぶつけられると頷けないのだ。

GS免許取得率の高さが六道の売りだ。

それを無にすることが、絶対にできない。

間違いのない事実だ。

「青島君、君のおかげで、少しだけ目が覚めたわ」

・・・少しだけらしい。

思わず苦笑いの俺だった。

理事長室から退去した俺たちだったが、美神先輩と横島先輩が肩をたたいてくれた。

「青島、あんたなかなか見所があるワケ！」

「青島君、その引けないところを引かない姿勢、評価高いわよ？」

・・・横島あ、おめえの姉ちゃんたちは美人だなあ・・・。

青島君の言っていることは正論だった。

間違いない事実であり、避けようのない未来ともいえた。

そして、六道の看板を掛け変えるかと言えば、それも「否」だ。

今の苦しさを逃れるために呑むべき要求ではないと思っていたが、あそこまで明確に生徒に指摘されると進むことはできない。

伝統や伝説というモノは後からついてくるが、実績だけは一度地に落ちれば回収が難しい。

実績という金看板は一度だって泥にまみれてはいけないのだ。

それがあるからこそ、伝説や伝説がついてくるのだから。

「でも、めんどくさい相手よね」

「ま、あいつらも、ここまで本格的な霊能勝負の世界になるとは思わなかったんでしょ？」

「そうねえ、家名を守るためという話なら、本家の有名どころを持ってくるはずだものねえ」

「三男次男でお茶を濁したやつらの底が浅かったただけだわ」

「でも、本当に面倒よ？」

百合子ちゃんは、ばらつとチケットを広げる。

それは学園祭のチケット。

「で、それをどうするのぉ？」

「簡単よ。ごちゃごちゃ言ってきたる奴らの足下をひっくりがえせばいいのよ」

ニヤリと笑う百合子ちゃん。

その頼もしい笑顔は昔も今も変わらないモノだった。

事務所の電話で青島先輩の家にかけると、妹さんがでた。

なんでも、彼女も霊能があり、来年には六道に受験するとか。

霊能や授業の話をしているところで青島先輩登場。

「・・・おまえ、俺にかかってきた電話だろうが」

「ベーーーーー！ お兄ちゃんのいじわるう！ よこしまさん、今度はお兄ちゃんのいないときに電話してくださいねーーーーー！」

元気いっぱいの子でした、と。

「横島、まさか・・・」

「おりゃあ、ロリじゃねえっすよ」

「一歳差だ、解らん」

「信じて欲しいっす」

とりあえず信じてくれることになったわけだが、今回の御題。なんと、手加減注文撤回がお袋から発せられたのだ。

「・・・ほんとか？」

「とりあえず、結果はどうあれ全力OKだそうです」

「・・・百合子さん、何か仕掛けたのか？」

「不明っす」

「だろっすな」

お袋が暗躍したら、策動内容なんか解るものではない。

とはいえ、やる気を阻害していた用件はほとんど解消だといえる。

で・・・

「クラス対抗、ですが・・・」

「もちろん、おめえらは禁止だ」

「そっつすよね」

おめえら、つまり、俺と雪之丞は禁止。

当然ながら、あの権能は禁止レベルが高すぎる。

変身後の素の状態で中級魔族とガチで殴りあえるって、どんな権能よ、という話で。

バグだチートだと評判で、中等部の実習にも参加させてもらえないくらいだ。

雪之丞には仕方無しに、うちの事務所にバイトとして入ってもらい、現場で訓練をしているという泥縄っぷり。

学校行ってる意味あるのか、と首をひねりたくなる。

閑話休題

GS試験を意識したクラス対抗霊能試合は、まさに実践しながらの訓練として、男子には人気だ。

で、災害戦力・・・いや、最大戦力の俺と雪之丞を欠いた状態で1-Aは勝てるのかというと、実は結構勝率が良い。

一当たり目は負けるが、それ以降は絶対に負けない。

クラス対抗が総当たり戦である段階で、間違いなく首位近くに食い込むことが約束されている。

しかし、今回はトーナメント方式だという。

つまりそこまで勝ちたい、というわけだ。

「で、勝てるか？」

「狩ってもいいんですか？」

「・・・おめえ、ちよつと発音がおかしくないか？」

「じゃあ、喝、とつことぞ。」

「・・・もういいわ、うちも勝ちにいくから、そつちも何とかしろよ?。」

「了解つすけど、学年合同は無しつすよ」

「何でだ？」

「鎌田先輩の被害はいやつす」

実に論理的な理由だった。

第十二話（前書き）

ざっくり始まった学園祭。

もちろん政治色が濃厚な六道学園なのでしたw

第十二話

学園祭は三日日程だ。

一日目は学内開催で、開会式やらクラス別トーナメントの予選や
らが行われる。

二日目は特別招待客用の日程で、三日目が一般招待客用に日程に
なっている。

一応、男子予選が二日目、男女本戦が三日目になっている。

とりわけ、三日目の熱気はすごいらしく、クラス対抗戦で三日目
に残れば、それは誉れだという話だった。

・・・だった。

予選の段階で、でるわでるわ不正の数々。

男子クラスで贈収賄をしていないのはA組とB組だけで、他の男
子クラスは審判役に賄賂を送ったり脅迫したりと大忙しだった。

で、B組は現行のGS協会の主流派家系だけに「脅迫」がメイン
で、じつにすがすがしい脅迫をしまくっていた。

「どんなよい成績だろうと、免許を発行するのはGS協会だ」「な
に、書類不備が5・6回あっただけでは処罰されんしな」「ああ、
そうそう、いまの主流派はあと二十年は現役だよ?」

無論、全部の台詞を六道とお袋に流したけど。

しかし、本格的にバカなんだろうか?

「伝統」と「実力」が伴っていれば、何の不安もないだろうに。

得られなかったトロフィーを強請ることは無意味だ。
勝ち取る事にこそトロフィーの意味があるのだから。

「つづことで、うちからは、靈波しか出せないチームでいかないか？」

「おいおい、そりゃ、あからさまに脅迫に屈するというわけか？」

「ばかいうなつて、横島がそんな弱腰か？」

もちろん、強気で倍プツシュ。

「で、男子戦にのみ通用している靈具持ち込み自由なのに、持ち込む靈具は「これ」だけだ」

「「「「「げ．．．．．」」」」」

「さらに、この方法なら．．．．．」

「「「「「げ．．．．．」」」」」

どん引きのクラスメイト達。

「横島、さすがに反則だろ？」

「どうして？ 自力で足りなけりゃ、周囲から引っ張り込んででも生き残るべきだろ？」

うわー、とひきつるクラスメイト達。

「いいんじゃない？」と雪之丞。

「勝なら全力だろ？」

俺のその一言に、代表に選ばれた三人は苦笑い。

「じゃあさ、特訓は．．．．．」

「その辺はいろいろと教師をそろえたし、得難い先生達もいっぱいいるぜ」

読み上げた教師陣に目を丸くする三人。

「王侯貴族だつてこんな教師をそろえられるかな？」

「・・・こりゃ、本戦で活躍すりゃあ、就職も楽になるな」

「か、彼女できるかな？」

「「「「「できるできるできる！」「」「」「」

闊達な笑いで教室は明るくなった。

持ち込む霊具は自由。

戦略上あかさなくてもいい。

霊能は公表のこと。

霊力はマイト表示。

つまり、霊具資産を持つ者達は、秘伝の道具を持ち込むことができるが、そうでない者達は霊能があかさされ戦略が封じこめられる、とまあ、なんでこんなルールが認められたのか理解できなかった。が、穴がある、そう感じた。

令子は本当に怒りを感じていたらしく、理事長に直撃しそうになっていたが、私が止めた。

「エミ、これはあからさますぎるわ!」

「この程度の罠を喰い破った方が効果的なワケ」

「・・・エミちゃん、どういふことかしら?」

「多分よ? 穴があるワケ」

「穴?」

「そう、解らないけど、穴があるワケ」

冷静になった私と令子は、その穴を考えてみた。

さすがに思いつかなかつたが、その答えあわせを予選でみるのもおもしろいと思えるほどにはなつた。

が、視界の端で行われている行為が、実は正解だとは思わなかつた。

まさかの勝利だつた。

1-AのAチーム、脇山・重田・室城の三名が、固有の霊能も後ろ盾もなかつた三人が予選を勝つた。

相手は1-DのAチーム。

大量の爆雷符と霊体ポーンで飽和攻撃をしてきた相手を、難なくひねりあげたのだ。

まさかの大量霊具投入は、女子部や高等部の受けが大変悪かつたが、勝利を目指す戦略の一つだと理事長が試合中に解説したことで勝利確定かと思われたが、無手で飽和攻撃を受けた重田が「無傷」であつた事で事態は変わる。

再び起きる飽和攻撃も、難なくぐぐり抜ける重田。

誰もがその姿に驚いていた。

資料道理ならば、彼にそんな霊能はないはずだから。

しかし、彼は素早く、果敢に、そして冷静に物事を対処し、そして霊波の盾を巧みに使ってすべてを避け通した。

あまりの巧みに感嘆の息は漏れ、そして敵としてはじめに当てられた人間がD組であることを他のクラス代表達は感謝した。

少なくとも霊能の虚偽記載によって1-AのAチームは退場できず、1-DのAチームも霊具を補給しきれずに退場だから。

目障りな1-Aに一撃を加えることができるようにした1-Dには感謝しなければならぬとすら思う彼らであったが、それは浅薄なことであった。

試合終了時、1-Bの主席によって指摘された霊能の虚偽申告は、全くの的外れであった。

なにしろ1-AのAチーム三人は、本当に固有霊能がなかったのだから。

「では、なぜあのような霊波の盾を発現できた!? あれほど明確な霊能は無かるう!」

そんな1-Bに対して、いや、全学園に対して、1-Aは特別に持ち込んだ霊具の一つを公開した。

それは、かの臨海学校でも有名になった霊具「筆」であった。

霊衣の袖をめくった一人の腕には、びっしりとかかれた文様。

つまり、霊能を発現するための道具として「筆」が持ち込まれていたのだ。

「固有霊能はございませんが、霊具による戦略は公開義務がありません。力無き者達の浅知恵だと見逃してください」

言葉はへりくだってはいる重田。

しかし、仕掛けられたルールを喰い破るにふさわしいものであった。

「後付けであろうとも霊能は霊能だ！」

そう主張する1ーBであったが、全く受け入れられることはなく、予選は粛々と進められることになった。

1ーDは名を落とす、1ーBは格を落とした。

これが畏を喰い破る勢いなのだ、誰もが確信した瞬間だった。

「いやー予想外やね、ブラック」

「ああ、さすがに喰わせ者だったな、ホワイト」

そんな試合をイシユアシユの格好で観戦させられている俺と雪之丞。

試合の解説と言うことで引き込まれたのが悲しい。

「でもな、あの飽和攻撃は良い手やったで？」

「しかしな、指向性も無い爆発を飽和させるんら、相手にその手段を悟らせちゃだめだろ」

「ふつうはそんな攻撃は予想せん。ふつうはな？」

「つうとなにか？ あいつら1ーAのAチームは予想してたつうのか？」

「案外想定範囲やったんやないかとおもうで？」

そんな解説を聞いていた生徒の反応は様々だけど、視界の端で強い視線を送ってくる三人様は「後で説明」と語っている。

まあ説明するのは良いけど、これってクラス対抗程度の戦略じゃないから、めんどくさい話なんだよねえ。

個人的にはスルーしてほしい内容だったから、どんなものだろうか？

まあ、令子さんは諸手をあげて賛成してくれるだろうけど、わりと手段にこだわるエミ姉さんは苦虫をつぶしたような顔になるだろう。

冥子ちゃんは・・・、まあ、こういう世界に生まれてるだけにスルーかもしれない。

まあ、あとの学年や女子部の予選は順当で、逆にGS試験のような内容だなあ、と思いつつ、そういえばクラス対抗ってGS試験の様式をもしてるんですねえ、とか考えたり何だったりしていた俺だった。

しつこく筆による記載は霊能だと食い下がってきた某家に対して、今回ばかりはルールの不備であることを言い渡した冥那だったけど、どのような記載記述事項があるかを提出させなければならなくな

た。
そのことを忠夫に言うと、実にうれしそうに笑う。

「なによ、その不気味な笑いは？」

「不適な笑いつていつてほしい」

すでに予想していたか書類は用意していたと言つが、その量はすさまじかった。

まるで百科事典のようなファイルが12冊ほど出てきた。

「これが以後、筆とともに発表されるはずの呪式指南書の手稿。勝手に外に漏らすと、国内陰陽寮関係者が全員敵に回るからそのつもりでつて伝えておいて」

私はめまいを覚えた。

この呪式の数々を解析するのはいいだろう。対抗手段を練るのもいいだろう。

しかし、この膨大な量を解析して対抗手段をすべて練ることはできない。

逆説的に、この中に答えがあることが解つていながらも、これに手を出すということは情報攪乱という十字架を背負わされることになる。

なにしろ、彼らの資料がすべて正しいとしても、この情報自体が欺瞞でない証拠がないのだから。

というか、これだけの情報量を叩きつけること自体が攻撃ともいえるし、多彩な、多彩すぎる情報自体が、すべて真実だとしても彼らがなにを選択するかまでの戦略情報がない時点で解析する意味はない。

なにしろこの情報は、いずれ開示される情報なのだから。

「で、息子。情報の中に絶望的な真実つて奴が入ってるのかしら？」

「当然、入ってるよ？」

まあ、自慢の息子だけに、それなりに解っているのがうれしい。試しに開いた付箋付きのページで、私は肩をふるわせて笑ってしまった。

あり得ない説明書きとあり得ない内容。
本当に息子は楽しすぎた。

公開された1-Aの霊能、というか戦術幅は広すぎた。

正直に言おう、これだけのことをよくやったと感心してしまった。日常で鎮静符代わりに使っている冥子を見ているので理解したつもりになっていたけど、その想像の枠が狭かったことを思い知らされた私だった。

二日目になって行われた高等部の予選でも、応用として導入されたほだった。

中等部はしらないけれど、高等部はより実践を意識している。

だから、霊具への想い入れは高く、飽和攻撃や物量戦に移行するわけではない変化が訪れている。

「筆」による霊具強化や精神レベルでの安定化、通信符を直接体に書いたり分割記載された攻撃符で虚を狙ったり。

その多彩さは今までにない戦略であり、そして戦術を進化させるにふさわしいものだった。

私も霊具強化で書き込んだ呪式を見せていたのだけれども、実際は物理衝撃の霊能攻撃変換。

これにより、この神通棍を持っている状態なら、直接攻撃でも霊

能攻撃と同じ効能が得られる。

「エミも冥子も「反則」って聞いていたが、今まで前例がないだけで反則ではない。」

「もちろん、次回以降禁止されるかもしれないけど。」

「しっかし、まあ、忠夫のやつも異常手段にかけちゃ天才的なワケ」「本人たちは出場禁止だものね」

あの「イシユアシュ」は禁止だろう。

なにしろあの力は、最低でも下級神魔を圧倒するだけの力がある。人間の、それもGSの卵の前程度では対抗できない。

私たちの「3」も、反則は反則だけど、手加減ができるので問題はない。

というか「3」になる前から、高等部最強の扱いを受けているので、問題ないだろうと思う。

他のクラスでも「チート」が「バグ」になっただけとあきらめムードだし。

逆に私たちに戦略が通用した、とかいう指標になっているのがおもしろすぎる。

これは、ほら、あれ。

「@@から一本とれた、あいつは強いかもしれない、って物差しね」

「あー、まあ理解できるワケ」

「・・・えー、冥子はそんなに強くないわよ？」

まあ、私たちの中で一番のバグは冥子だし。

本人の理解はどうか知らないけどね。

第十二話（後書き）

己のものさしでしか人は他人を計れない。

もちろん、それ横島たちのもとも同じだけど、まあ、いろいろと

w

第十三話（前書き）

おひさしぶりの ただおくん です

いやはや、久しぶりすぎて、誰も読んでないかもとか思ったりする

（ ^^ ;

第十三話

神在温泉謹製の「二人はイシユアシユ」のBGM集が永遠と流れるうちのクラスでは、戦闘員の格好をしたクラスメイトとイシユアシユの格好をしたホワイト&ブラックが給仕してる。

これ、結構くるわ……。

雪之丞は結構ノリノリだけど、オレは、もう、死にたいし。

エミねえたちが来たときなんか、抱きしめる写真を撮るのコンボが決まってしまったし、親父とお袋も大爆笑&写メで大喜び。

アシユさんやらイシユさんまで現れたのは、もう、何ともいえねえ。

近所の子供達やら小学生なんかは「将来の夢」を現実に見ているらしく、感動して安心して大騒ぎになったりなんかする。

「いやー、ホワイトもブラックも、よく似合ってるやないか」

現れたのは銀ちゃん。

エミ姉さんから聞いてやってきたそうなの。

で、何の変装もなしでやってきたものだから大騒ぎ。

今をときめくアイドル俳優が、学校の文化祭にきて、その上、イシユアシユとお友達会話をしている。

携帯のシャッター音が響きわたる中で、イシユホワイトこと俺がさむやく。

「ええんか？ 肖像権とか」

「ええんや。社長も「イシューアシユ」と一緒なら宣伝になるしな、
つていうてたしな」

「あほかあ！ いいわけあるかい！」

「協力しろや、親友！」

そんな有様もフラッシュ連写。

泣ける。

高等部の学内対抗戦、新ルールができた。

「プロ禁止」

ブーイングは私たちだけで、他のクラスは胸をなで下ろした。

まあ、優勝チームが私たちと戦うというエキビジョンが残っただけ
でもいいか。

「ま、令子ちゃん一人でも負けないんだから、しょうがないでしょ
？」

むくれる私を百合子さんがなだめてくれるのが恥ずかしいやら何
やら。

うちのママも「エキビジョンに間に合つようにないくわ」とか言っ
てたけど、なんだかなあ、というかんじ。

「やっぱ、予選で暴れすぎなワケ」

「なによ、エミだって・・・」

「私は流石に裸にひんむいたりしていないワケ」

「だ、だ、だって、どこに隠しているかわからないじゃない!」

忠夫の使った「筆」のせいで、霊具が無数に増えたようなもので、見た目の戦略なんて宛にならなくなってしまった。

そんなわけで、バンツ以外をひんむいたんだけど、かなり評判が悪いらしい。

・・・悪役の自覚はあるわよ、ふん。

「そんなだから対抗戦出場が禁止になるワケ」

「ぐぐぐぐ」

まあ、認めないワケじゃないけど、それでも痛い話は聞きたくないわ。

・・・ええい、この心の痛みは忠夫で晴らしてやるんだから!!

なんとなくか、忠夫のせいで「A」クラスの注目が高くなってしまい、他クラスの主流派師弟は可哀想すぎる感じだったのだが、私が追い打ちをした影響で、さらに追いつめられた。

そう、招待状を彼らの帰属集団のトップに送ったのだ。

「百合子ちゃん、悪辣だわぁ・・・」
「もつと誉めてもいいのよ?」

彼らの帰属集団の多くは、自分のところの人間がうまく立ち回っていないなど考えもしていない。

臨海学校の結果すら歪んだ形で報告を受けているぐらいだが、そんな歪んだ情報を持ったトップが、この学園祭での苦戦を見せられれば、どうなるか?

正直に言うけど、あたしは彼らが行った賄賂だの脅迫だのは問題ないと思ってる。

ただ、それをもみ消すだけの権力とシステムを持っていない事が問題なのだ。

ゆえに突き上げを食らう。

忠夫たちがなにをしようとも、全く歯牙にかけないだけの権力構造が完成していない時点でとる手段ではないのだ。

ゆえに、自分達の帰属集団のトップに来訪されただけで追いつめられるのだ。

逆説的に、忠夫達Aクラスは、あらゆる人脈とコネを形成している関係で、GS協会からにらまれても痛くも力こくもない状態だ。

たとえGS協会から除名されても、京都陰陽寮と政府機関で協力して新たな協会すら造れるだけのコネクションが出来ている。

その事実思い至っているだけに、現在の主流派トップは身動きできないのだ。

が、下っ端となるとそういう視点では見れないために、動きがま
ずくなる。

そう、今回の招待状には「こう」書かれているのだ。

「そちらの派閥は、目障りな小僧を排斥する代わりに、関西の公的

オカルト巨大組織立ち上げの引き金を引こうとしてますよ」

にこやかな笑顔と共に訪問してきた派閥は23派。すべてが「意図なし」と宣言していった。

他の中小派閥は関西組織立ち上げの際には噛みたいという申し入れをすると言う本末転倒な話であったけど。

「でも、関西組織立ち上げは、ちょっと魅力的かしら」
「勘弁してよ、冥那。組織力学だけじゃなくて東西対立なんて事になつたら、めんどくさくてイヤだわ」

まあ、土御門を中心に陰陽寮系で纏めればいいんだろうけど、あつちも権力争いは壮絶だと聞くし。
関わりたくないわ。

が、実はこの話、関西系の教師に漏れ伝わり、「ぜひとも立ち上げを！」という運動を暫く起こされたのは悪夢だった。

イシューアシュー5シヨウ。

・・・病んでるなあ。

高等部の舞台でやったイシューアシュー5シヨウは、実に盛況だったんだけど、飛び入りゲストのせいで熱狂に変わった。

「じゃ、自分のダチを紹介するで〜」

俺の手振りと共に現れた「銀ちゃん」を見て、後者の窓が割れる寸前までふるえた。

『ぎゃーーーーーー!!!』『』『』『』

きゃーとかじゃなくて、まさにギャー!

とりあえず、静穏結界を張っていたので耐えたけど、関係ない人が聞いたら絶対霊症だとおもったね、うん。

が、銀ちゃんは全く意にかえさず、にこやかに手を振っている。さすがプロや。

「えーっと、ホワイトとはガキの頃からの親友で……」

ほんと肩をたたく銀ちゃんは、にこやかな笑顔。

「これからも長いつきあいのダチです!」

この台詞と共にカラオケが流れ、銀ちゃんの持ち歌コーナー。

イシユアシユ5は楽器を持ってバックミージシャンぽい動きに切り替わる。

まあ、冥子さん以外、結構楽器出来るんだけどな。

リードギターを雪之丞。

ベースを俺が。

サブギターで令子姉。

ギタータイプのパーカッションをエミ姉。

で、キーボードを冥子さん。

実際に演奏しているわけじゃないけどノリノリで、雪之丞と令子

姉は曲にあわせた演奏をしているし、エミ姉さんはオリジナルパークッションをあてている。

そろそろ曲が終わると言うところで、舞台の上に飛び乗ってきた人影。

銀ちゃんを守るように俺と雪之丞が前にでる。

「ど……どけえ！ 近畿くんは私の嫁よおおお！！」

ぶわつと広げられた魔力の波。

恒常的に展開する魔力による障壁が押し寄せた。

が、この舞台、イシューアシューショウ。

……それも本物。

電撃的な展開で、瞬時に取り押さえられてしまった。

「……いやあ、圧倒的やな、ホワイト」

「パワーは、本物なんや。見た目以外は最高なんや……」

泣いてないで、泣いてやせんのやあ……

神魔合同の警備隊に引き渡したところ、中級魔であることが判明。名のある魔族であったが、今後のこともあつて実名報道は避けられたが、神魔合同警備隊内で、幾人かの「近畿」ファンができたとか。

銀ちゃん、もてもてやな……。

最近、横島事務所に「イシューアシユ」指名が増えたのは、全部学園祭のせいやと涙を流す横島忠夫の姿があつたとかかなかつたとかいろいろであつた。

第十三話（後書き）

そろそろ学園祭が終わり、他のクラスの暗躍者が終わりそうです
なーむー

第十四話（前書き）

おひさしぶりです、ただおくんですw

第十四話

三日目。

実は横島事務所の人間全員出場停止になってしまいました。

理由はいろいろとあったけど、やっぱりプロは禁止だろ？ということになった。

まあ、エミ姉たちは、GS免許取る前からチート扱いだっだし、仕方ないよな？

つつか、GS予備軍の神経を逆なでしつつ、プライドをポキポキ折っていたようなものだし、仕方ないわな。

せっかく見に来たのに、とシャオ姉も不満いっぱいやったけど、校内を案内したらご機嫌になってくれた。

結構うれしい。

「あ、横島君！」

「よこしまくん！」

「よこしまくーんーん」

あれ、なんでだろ？ だんだん機嫌が悪くなってない？

「……忠夫君。ちょっとお話があります」

「はい、シヤオ姉」

「主に生活態度のことです」

「・・・はい」

「そもそも・・・」

これが始まると長いんだよなあ、シヤオ姉。

「きいてますか!」「ふあいつ!」

わーん、原因不明だわなあ!

そんな騒ぎをよそに、クラス対抗戦は順当に進み、いつの間にか
ら決勝戦。

相手はB組、で、こっちはA組。

で、今回に限り、戦術や霊能を公開しない方向でいこうと無理矢
理ルール変更が提案された。

いいんだろうか、と困惑の三人。

つつか、すでに使用道具の申請が行われた後に時運たちの道具は
見せたくないつつのが、何とも。

まあ、まったく、問題ないんだらうけど。

「どーするよ、受けるか?」

「受けてもいいけど、俺らにメリットねえよな?」

「受けてくださいって頭を下げるなら受けてやってもいいぜ?」

「土下座基本だよな?」

俺の問いに選手三人が苦笑いで答えると、なんとB組三人が土下座をした。

屈辱に身を震わせて!!

「うつわー、一気にこっちが悪人だな」

思わず笑ってしまった俺。

で、何故か連写状態で撮影しているGS協会幹部たち。

「なんで身内に撮影されてるんやろ？」

「あれは、組織ないで対立している上位組織の人員だからよ」

ふらりと現れたお袋がにやにや笑い。

あー、なるほどな、そういうことが。

えげつな。

まあ・・・

「こっちも撮影だな」

「おう、動画と静止画で、バンバンとってるぜ」

ぐっとサインのクラスメイト。

女子部から些か視線が冷たいが、情報戦の最前線で土下座なんてする方が悪いだろ？

まあ、とつても大切な道具を借りた手前、絶対に勝たにやならんのだろうけどな。

で、名前がしければ出落ち決定。

あほらしい。

「で、パターンシュミレーションは完璧か？」

「大丈夫だよ、横島」

ぐっと指を立て合う俺たち。

ほんじゃま、どうしても隠したかった霊具って奴を、本番で拝ませてもらいましょうか!?

試合開始とともに、B組の方が式神を召還しました。

伝承式神でしょう、本人に見合わぬ威力を秘めた式神でした。

「どうだ、まいったか!! これなるは、単体最強レベルの式神『錦丸』だ!!」

蛇を元にして壺毒で高めた素体を式神化したそれは、生まれてから二百年はたっているのでしょうか？ 意識も随分としっかりしてますね。

加えて片手で持っているのは代理召還契約の符でしょうか？

「シャオ姉。どういうこと?」

「つまりですね、すごく強力な式神を、誰かから借りてきたんだぞ、すごいだろう、と自慢しているのです」

その人ことで、周囲の人も観客席も「うっわー」という顔になった。

土下座までして隠した式って、それかよ、と。

「さ、今謝れば、土下座して地面を嘗めれば、さっきの映像をすべて消せば!!! 許してあげないわけではないかもしれないよ!」

おもいつきり根に持っていますね。

まあ、あれだけのことをさせられたんですから、根に持つのは当然ですが。

そんな様をみながら、忠夫君のクラスメイトは肩をすくめて霊具一を取り出しました。

それは、忠夫君が書いた霊符「鎮静符」です。

次に取り出したのは「筆」と呼ばれる霊具で、何かに書くだけで霊効を発揮させるものでした。

くわえて、筆で霊符に何か書いてます・・・って！

「た、忠夫君！ あれは・・・」

「シャオ姉の思っている通りですよ」

「・・・なんて極悪」

六道の式神使いを一流の境地にまで押し上げたという「鎮静符」。でも、この鎮静符は、従来のものと違っていて、既存概念を破壊するような作りになっている。

簡単にいえば、制作に失敗すると全く逆の機能になるのだ。

つまり・・・

「つまり〜？」

いつの間に現れた六道婦人。

そんなことに関わらず、はじめの合図とともに体に描いた加速霊符効果で術者とゼロ距離になる忠夫君のクラスメイト。

「さあ、失敗した霊符で・・・」

電光石火で背中へ霊符を張り付けた少年は、同じ早さで自分たち

のコーナーへ引き上げた。

背中にかかれているであろう「障壁」符で仲間と自分をガードした瞬間にそれは始まった。

真つ黒な光を纏わせた式神が、術者をおそいだしたのだ。

「なっ!!」

『キシャー!』

一撃で吹っ飛ばされた術者は、そのまま結界に突き刺さり意識不明。

同時に結界の外にいた二人も気絶した。

「どうも、一人じゃ支えられなかったから、外にいる二人も使っていたみたいっすね」

「というか、忠夫君、あれ、どうするの!??」

「へ? ほおっしておいても死なないでしょ?」

「そういう問題じゃないわあ、学校の信用問題になるのよ」

「えー、じゃ、うちの所員に・・・」

「所長に依頼するわあ」

「・・・へい」

そんなわけで、その場で即興で封印符を作るというアトラクションの後、式神様を封印したところ、GS協会のなんとら氏が飛んで

きた。

言い訳はいろいろとしていたが、詰まるどころ・・・

「それは俺なんで、かえせ、と？」

ぐつと、言葉に詰まる男。

ここでそれを公にすれば、式神の監督責任と実力のない人間に貸し出したという事実が浮き彫りになるのだ。

言えるバズもない。

加え、意識を持っていると龍神に認められた式神だ。逆に諦め切れるものではない。

損得の狭間に揺れる男の目の前で、俺は封印解除。

すでに一度封印時に鎮静化させているので、結構おとなしく現れた。

「でな、お前さんに選ばせたる。自称お前の術師と龍神さん、どっちのところにいきたい？」

式神は速攻で小竜姫様を選んだ。
当たり前だ。

いわば自分は竜の系譜であり、その姫に出会えたのだから。

「に、にしまるう！」

すがろうとした男を視線で射ぬく小竜姫様。

「これより、この式は、私の家族です。以降の干渉は龍全体への干渉と見なしますので、覚悟なさい」

わーと、歓声が巻き起こり、なぜか一件落着と見得を切る小竜姫

様、つつかシャオ姉。
やっぱテレビに毒されてるなあ。

中等部のクラス対抗、女子は順当で男子は爆笑だった。

中等部はほら、高等部のサブセットって感じ。

それなりに忠夫達の反則を取り入れてて、未来有望な感じがする。

でも男子は恐ろしいほど大爆笑。

時代錯誤のBとD組。

革新的反則に手を染めるA組。

これが各学年で行われているのだ。

それも各学年で毛色が違う。

たとえば三年。

青島指揮下のA組ツートップ、鎌田・籤山が相手を壊してゆくと
いうのが見事だった。

加えて鎌田君の「男好き」アピールが強力で、相手の心をへし折
ってゆく。

逆に二年のA組は、見た目たおやかな男子ばかりだったけど、そ
の油断をついたて口は、あまりにも参考になりすぎると大評判で、
高等部でも防犯教室の教師役に招くべきではないかと話が盛り上が
っているほどだった。

で、件の一年A組。

新霊具をこれでもかとはかりに駆使したため、国内外のエージェ
ントが泡を吹いている。

あの式神使いにとって致命傷ともなる「鎮静符・失敗」乱心符」

の使い方は、たぶん世界的に広がることだろう。

これは術者でも式にでも使える方法だから。

この情報の拡散速度で、作業員の進入ルートや接触方向などを調べる課題も存在するって、うちの学校はどこに向いてるのかしら、ねえ、母さん！

「エミ、いつだって現実と常識は斜め上にあるもんだよ」

深みのある台詞だわ、百合子母さん。

「ところで、男子部は学年総合戦をしないの？」

「忠夫達から絶対にお断りだって」

「なんで？」

「喜ぶのは鎌田君だけだからって」

納得だわ。

「さあ、高等部の決勝もそろそろ終わるんだから、エキビジョン用の準備をなさい」

「はい」

さあ、先輩方。

優勝の気分は味わえましたワケ？

これから味わうのは、現場最前線のGSなワケ。
いい研修よ？

オクラホマミキサーで締めくくられた後夜祭。
いろんな人と踊って、エミ姉や令子姉、冥子さん、シャオ姉・・・
みんなと踊った。

うちのクラス男子も、臨海除霊実習の時に仲良くなった女子と組んでるし、青島先輩も噂の女子と組んでる。

「青島もいい雰囲気なワケ」

「そうだね、エミ姉」

火の粉を舞いあげるキャンプファイヤー。

その周りでいろいろな想いが渦巻き、そして燃やされてゆく。

「なんか一種の儀式っぽいつよね」

「間違ってるないワケ」

三日間にわたる大騒ぎはおしまい。

明日からはまた別の騒ぎが待っている。

「さ、バカ騒ぎもおしまいだし、次のお祭りの準備だよね」

「少しは手加減してほしいワケ」

「ムリムリ」

この大騒ぎでの特別報酬はスゴいことになってるし、エミ姉達の収入も驚くほどのはずだ。

この先だって期待できるんだよーと笑いかけると、すこしやつれた笑顔のエミ姉。

「はあ、この弟には振り回される運命なのかしら？」

第十四話（後書き）

というわけで、文化祭終了ですw

第十五話

学園祭から一週間。

通常授業状態に戻ってはいるんだけど、一年前の学院とは全く違う光景なんだろうなあ、と思う。

まず、校内にカップルがあふれてる。

正直、恐ろしい話だけど、健全な関係のカップルがいっぱいなのだ。

筆頭はやっぱり青島先輩。

除霊実習で名をあげた関係で、中等部女子の人気はトップクラスだったりする。

逆に色々と名を落とした男子は肩身の狭い思いをしている。

何しろ、自分のヘマや行動の影響で、GS協会の幹部再編まで起こしてしまったという人間もいたぐらいだから。

そもそも、学院男子部に来たのも、適当な実力があるからというだけの話も多く、次男三男であるが故の放任状態から、なれない名門の看板を背負わされてしまい暴走してしまったという経緯もある。

つまり、薄っぺらいのだ。

そういう意味では各学年のAクラスには「独我」が集まっており、あらゆる意味で自由であるおかげか、行動の幅が広く、学院との相性がいい。

無論、中にはヘマをする人間もいる。

しかし、クラス全体で一チームであるという意識からか、あらゆる意味でフォローの網がしっかりとっていて問題化しにくかったり

する。

そんなソツのない行動は、女子同士での横の繋がりを思わせるものがあるらしく、女子部から評判がいい。

村社会的結束の高い女子にとって、理解しやすい集団とつきあった方が、楽なのだ。

で、Aクラスメンバーとの集団見合い的な交流が生まれ、そして構成員同士がくっついてしまう流れは自然だろう。

「だからって、休憩のたびに廊下が桃色オーラで染まるのはどうかと思うぞ」

「・・・いいじゃねえか。節度は守ってるぞ」

「そうですね、横島さん。私たちは節度あるつきあいしてますわ」

雪之丞と弓さん。

なんつつか、胸から上はふつっただけど・・・

「休み時間毎に恋人握りの人たちに言われたくありませんから!!」
「!!!!」

真っ赤になる二人だけど、なにがムカつくって、周辺のカップル全員が真っ赤になりやがる。

というか1ーAで独り身は俺だけか!?

「・・・横島さん、あなた、あれだけ女性を侍らせていて、独り身とか、どういう神経ですの?」

「・・・かおり、こいつはこいつ奴だ」

なんだろう、ひどく納得のいかない話をされている気もするなあ。

「まあ、そういう方でも頼りになる方ですし、雪之丞の親友でもあります。軽蔑はしませんわ」

「ありがとうな、かおり」

「……ん」

くそー、何かというと甘い空気にしやがって！

確かにそういう目的もあったけど、共学！

でも、ここまであからさまなのは悔しいなあ、もう。

クラス移動・合併、というプランが提出された。

主にDクラスから。

まあ、旗色の悪い主流派に見切りをつけて、Aクラスに手下を送り込みつなぎをとって、おいしい目にあおうというのが見え見えすぎる小物プランだった。

とはいえ、今勝っているところがこれからも勝ち続ける訳じゃないんだけどねえ、と囁くと計画書は戻されたけど。

もちろん、勝ち馬に乗らせるつもりはない。

あのクラス分けは、これからの業界の試金石になるはずだし、横の繋がり絶ったのだからお互いの汚染を防ぐ目的もあったのだから。

主流派、旧流派、三流派は、混ぜるな危険なのだ。

たいがい混ざったところで、一番汚い部分が強調された集団になっってしまう。

私の社会経験がそれを感じさせる。

それにAクラスを巻き込むことはできない。

少なくとも、彼らは汚染されていない純粋な子供なのだから。伝統や旧癖に汚染された子供ではない。

自由な幅と行動を身につけてほしいと、心から思ってしまう。

「……というわけで、忠夫、どうにかするワケ」

「エミ姉、無茶言わないでよ」

事務所で待機中、中学部の桃色空気を蔓延させるなど怒られた。

まあ、僕も不満なんですよ、ええ。

彼女いないし。

「……忠夫、本気なわけ？」

「えーっと、いないよ？」

むーっと腕を組むエミ姉と令子姉。

なんか不満そう。

「あー、そんなに一人がいやなら、高等部に来ればいいじゃない？」

「そうそう、きれいなお姉さんが相手してあげるワケ」

……それやると、停学にされちゃうんだけど。そう、それはダメって冥那さんとお袋に釘を刺されています。

「うっわー、そりゃ、高等部ウチも不満だわ」
「というか、欲求不満なワケ」

身の丈にあつた恋愛をしなさいってのはなしなんだろうけどさあ、
学生が学校で出会いがなかったら、どこで出会えっていうんだよ、
本当に。

「ま、とりあえず」「事務所で我慢するワケ」

きゅっと僕に抱きついてきた二人の姉。

・・・ああ、なんか柔らかいものが四つぐらいで僕を押しつぶそ
うとしてるう・・・

ああ、なんで僕は悩んでいたんだろう？
黒い悩みがとろけてゆくう・・・。

「というわけで、青島と組んで、桃色空気を一層するワケ」

へーい。

あ、うけちゃった・・・。

「というわけで、先頭切つて桃色空気を改めてください」
「何で俺が!」

青島先輩は、切れ芸の持ち主でしたか。
すばらしいですね、ええ。

「ここはひとつ、不純異性交遊は禁止されていますから、不純同性
交友でも・・・」

「私の出番ね!!」

「あー、かんちゃん、冗談だから・・・」

「でも有効な手段よ！ 主に、私の心と体のために!!」

じりじりと青島先輩近づく鎌田先輩。

もちろん、ダッシュで逃げる青島先輩。

「ふふふ、男子部の軍師さまが指示したのよ？ 従うべきでしょ、
青島くん」

「だ、だ、だれが!! おれは理彩と幸せな家庭を築くんだ!!」

・・・あれ？ 恋人とかじゃなくて、すでに婚約レベルっすか？

「ああ！ このまえご両親に挨拶してきた!」

悪ふざけしていた鎌田先輩や俺、話だけ聞いていた青島先輩のク
ラスメイトたちが目をむく。

「お、おい、青島！ おめえ、今から人生決めちまうのかよ!!」
「つつか、青島！ もっと上目指さねえのか?」

口々に叛意を求める友人たちを突き放す青島先輩は、輝く笑顔で
言い切った。

「俺らGSがGSでいられる時間は短い。だから自分の子供たちに直接教えることなんてできない奴らの方が多い。でも、俺たちは違う。霊的に恵まれた環境と相手がいる。早く子供が得られねが、それだけ早く育てることが出来る。若いウチに、力あるウチに！」

なんだろう、周囲の熱気が盛り上がる。

「俺は、早く理彩と子供がほしい。セックスに興味がないわけじゃねえけど、それよりも子供がほしい。育てられる資金力がほしい！だから、俺は、GSになる！」

超重量級発言に、大歓声が巻き起こった。

胴上げが始まり、中心で青島先輩が苦笑い。

「もう、あれだけ本気を聞かされたら、乙女心が真っ赤に燃えちゃうわ」

くねくねとした鎌田先輩も、勇者をたたえる瞳をしていた。

むー、これじゃあむりか。

さすがごと自分の教室に戻って、いまの英雄伝説を話すと、ウチのクラスも大いに盛り上がった。

すげーぜ、俺たちにできないことを、正面からやりとげる、そこに痺れる憧れる、と。

なんか目指されてまっせ、青島先輩。

「横島、おまえはどうするんだよ？」

「日本のGS事務所に、なる！」

「「「「「おおおお！」」」」」

雪之丞に言われて、反射的に答えたら、クラス中+そこにいた女子が盛り上がる。

「つつか、俺、横島の事務所ぐらいしか就職先ねえんだけど」

「あ、雪之丞、研修にきてんだから断らんよ?」

なんつつか、あんな格好させられた同士だし。

「お、お、おい、横島!」

「あ、あ、あの、横島君!?」

なぜかクラス中から熱い視線。

「あー、全部ウチで引き受けることはできないけど、仕事上で知り合いになった事務所に紹介状は書くぞ?」

「「「「「おおおおお!!!」「」「」「」

なぜか始まる胴上げ。

つつかな、みなさん。

一番紹介される先は六道だからな?

優秀者は六道、特殊者は適正先。

決まってるだろ?

短いながらその辺を感じている雪之丞は苦笑いだった。

恋人ができた、という環境で浮き上がっていた中等部も、自分がまだ修行中で目指す先があると自覚した段階で、いささか醒めたらしい。

というか、関係が冷えたんじゃないで、お互いに高めあう努力をすることになった。と言う感じ。

これだったら高等部のお姉さま方も理解してくれるはずだ！！

と思ったら、学院長部屋に呼び出されました。

「忠夫く〜ん、色々ありがとうございます〜」

どうやら事の詳細を理解した上での感謝だった模様。

「で、六道に回すのは誰だい、忠夫」

その上、人買いの相談ですか、母上！

「えー、本人の希望と適正を鑑みましてえ・・・」

「あたしは、森雪君としずなちゃんがほしいね」

「あー、うちは〜、この、ちさちゃんと〜、みっくんがほしいわ〜」

って、すでに選定済み！

おいおいおい、あんた等なら、本人に気づかれることなく意識誘導できるんじゃないのか？

「もちろん可能よ。でも、それじゃあおもしろくないし、はじめから目指してもらえれば、教育期間も短縮できるし」

「六道学院で、ヘッドハンティングでくるのって、ありがたいわ」

うつわ、どんだけこの人たちの手の内で踊ってんだろ、自分。

「まさか、俺を誘導してる？ 母上」

「はは、忠夫を意識外で誘導するぐらいなら命令してるよ」

そっちの方が楽し、とにこやかな笑みのお母様。

ははは、息子に厳しいねえ、本当。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8239q/>

うちのただおくん

2011年12月13日02時23分発行